

博士論文
(學術)

有標的指示詞の日中英対照研究 *

孟鷹 **

名古屋大学大学院
国際開発研究科

審査委員会

大島義和（委員長）

大名力

加藤高志

木下徹

研究科教授会合格決定

2020年3月4日

* A Contrastive Study of Marked Demonstratives in Japanese, Chinese, and English

** Ying MENG

目次

1. はじめに	1
1.1. 指示詞の分類	1
1.1.1. Diessel (1999) による分類	1
1.1.2. 非制限性	7
1.1.3. 情意性	9
1.1.4. 本研究における指示詞の分類	12
1.2. 研究対象	13
1.3. 研究目的	15
1.4. 研究方法	15
1.5. 本論の構成	17
2. 日中英指示詞の無標的用法について	18
2.1. 外部指示用法	18
2.1.1. 日本語の場合	18
2.1.2. 英語の場合	20
2.1.3. 中国語の場合	21
2.1.4. まとめ	24
2.2. 照応用法	25
2.2.1. 日本語の場合	25
2.2.2. 英語の場合	29
2.2.3. 中国語の場合	31
2.2.4. 連想照応・束縛変項について	45
2.2.5. まとめ	48
2.3. 認識用法	50
3. 日本語の指示詞「この」「その」「あの」の有標的用法	52
3.1. 先行研究	52
3.1.1. 先行研究における非制限的指示詞	52
3.1.2. 感嘆・間投表現に用いられる「この」「あの」	57
3.2. 考察	57
3.2.1. 外部指示	57
3.2.2. 照応用法	69
3.2.3. 認識用法	77
3.3. 本章のまとめ	79
4. 中国語の指示詞「这」「那」の有標的用法	81
4.1. 「这」「那」と名詞句との共起	81

4.1.1 数詞と分類辞について	81
4.1.2. a型・b型の意味と構造について.....	87
4.2. 「这」「那」の有標的用法の考察	95
4.2.1. 外部指示用法.....	95
4.2.2. 照応用法	100
4.2.3. 認識用法	113
4.3. 本章のまとめ	113
5. 英語の指示詞 <i>this・that</i> の有標的用法	116
5.1. 先行研究.....	116
5.2. 考察	121
5.2.1. 外部指示	121
5.2.2. 照応用法	122
5.2.3. 認識用法	125
5.3. 本章のまとめ	126
6. その他の有標的用法	128
6.1. 感嘆・間投表現に用いられる有標的指示詞	128
6.1.1. 日本語の場合.....	128
6.1.2. 中国語の場合.....	129
6.1.3. まとめ.....	132
6.2. 「カテゴリー変換」について.....	132
7. 結論.....	135
7.1. 比較	135
7.1.1. 有標的指示詞の分布について	135
7.1.2. 外部指示・照応・認識用法における日中英有標的指示詞の異同について	136
7.1.3. まとめ.....	139
7.2. 本論のまとめおよび今後の展望.....	140
謝辞.....	142
略語.....	143
参考文献	144
用例出典	150

図表の目次

表

表 1.1. 用語の整理.....	6
表 1.2. 「非制限性」を導入した分類法.....	9
表 1.3. 指示詞の用法.....	12
表 1.4. 本研究における無標的・有標的用法.....	13
表 1.5. 本研究における指示詞の分類.....	13
表 1.6. 日中英 3 言語における名詞修飾型指示詞.....	14
表 1.7. 中国語指示詞「这」「那」の表記.....	14
表 2.1. 先行研究による中国語の指示詞「这」「那」の使用傾向.....	32
表 2.2. 話し手の想定における、話し手・聞き手の指示対象に対する知識の把握状態	33
表 2.3. (2.61) の各場面における日中英無標的指示詞の対応関係.....	49
表 3.1. 外部指示用法における「この」「その」「あの」の有標的用法.....	79
表 3.2. 照応用法における「この」「その」「あの」の有標的用法.....	79
表 3.3. 認識用法における「この」「その」「あの」の有標的用法.....	79
表 4.1. 中国語の指示詞「这」「那」の共起形式.....	94
表 4.2. 会話的な照応用法における「这」「那」(1).....	101
表 4.3. 会話的な照応用法における「这」「那」(2).....	102
表 4.4. 会話的な照応用法における「这」「那」(3).....	104
表 4.5. 外部指示用法における「这」「那」の有標的用法.....	114
表 4.6. 照応用法における「这」「那」の有標的用法.....	114
表 4.7. 認識用法における「这」「那」の有標的用法.....	114
表 5.1. 固有名詞を伴う非制限的な this/that の用法.....	126
表 5.2. 総称表現に用いられる this/that の用法.....	126
表 6.1. 感嘆・間投表現に用いられる制限的な「这」「那」.....	132
表 7.1. 日中英 3 言語における有標的な指示詞.....	135
表 7.2. 日中英 3 言語における有標的な指示詞.....	140

図

図 1.1. 指示詞の主要な用法 (Diessel 1999: 6 に基づき, 筆者が作成)2

有標的指示詞の日中英対照研究

1. はじめに

指示詞に関しては、これまで数多くの研究が進められてきた。個別言語学的な観点からの研究もあれば、通言語的・類型論的な観点からの研究もあり、様々な研究成果が得られている。指示詞の用法には、通言語的に広く観察される典型的な用法から、周辺の用法まで、多種多様な用法がある。後者の具体例として、例えば、次の (1.1) に示すように、指示詞が人称代名詞を伴う場合がある。

(1.1) 中華料理のことなら、この私に任せなさい！

通言語的な観点から指示詞の典型的（無標的）な用法の整理・考察を行った研究としては、Himmelman (1996), Diessel (1999), Dixon (2003), Imai (2018) などがあげられる。また、指示詞の無標的な用法を対象とする個別言語的な研究および言語間の対照研究も盛んに進められている。例えば、日本語に関しては、佐久間 (1992), 久野 (1973), 金水・田窪 (1992) など、英語に関しては、Halliday & Hasan (1976), Levinson (1983), Fillmore (1997) など、中国語に関しては、呂叔湘 (1985), 王力 (1985) などが代表的である。日中英指示詞の対照研究としては、服部 (1968), 木村 (1997), Yoshida (2011), 単 (2005), 胡 (2005, 2006) など、日英、日中、中英の指示詞を比較するものがある。

一方、指示詞の周辺の（有標的）な用法に関する、比較対照的な観点からの研究は、管見の限り見当たらない。個別言語的な研究に関しても、Lakoff (1974) をはじめ、英語を対象とした研究はあるが、日本語・中国語を対象とするものは比較的少ないように思われる。

本研究では、通言語的・類型論的な観点から指示詞を考察した Diessel (1999) による分類を踏まえ、情意性 (affection), 非制限性 (non-restrictivity) という 2 つの概念を軸に、日中英指示詞の有標的用法の比較対照を行い、その共通点と相違点を明らかにすることを目的とする。

1.1. 指示詞の分類

本節では、1.1.1 節において Diessel (1999) による指示詞の分類を概観する。1.1.2 節と 1.1.3 節では、指示詞の周辺の用法を整理分類する概念として、「非制限性」と「情意性」の概念を導入する。さらに、1.1.4 節では本研究における指示詞の分類を提示する。

1.1.1. Diessel (1999) による分類

指示詞は自然言語において普遍的に存在する (Diessel 1999: 1, 36, Diessel 2006: 469, Dixon 2003: 61)。言語により異なる特徴を示すと同時に、共通した機能と用法も観察される。Diessel (1999) は、85 言語のデータに基づき、類型論的な観点から、普遍的に観察され

る指示詞の用法を考察している。Diessel (1999) によれば、指示詞の用法は外部指示用法 (exophoric use) とそれ以外の用法、すなわち、内部指示用法 (endophoric use) に分類される。後者のなかでは、照応用法 (anaphoric use)、談話直示用法 (discourse deictic)、認識用法 (recognitional use) の 3 つがあげられ、論じられている。Diessel (1999) は、各用法に用いられる指示詞をそれぞれ外部指示的指示詞 (exophoric demonstrative)、照応的指示詞 (anaphoric demonstrative)、談話直示的指示詞 (discourse deictic demonstrative)、認識的指示詞 (recognitional demonstrative) と呼んでいる。

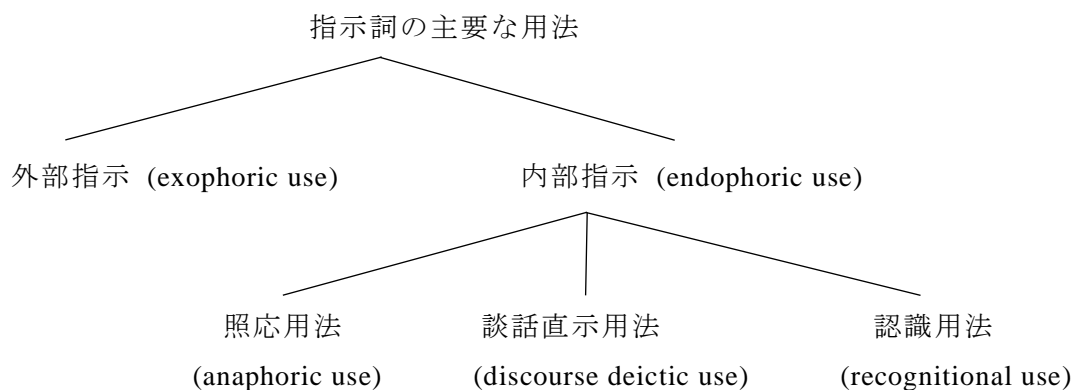


図 1.1. 指示詞の主要な用法 (Diessel 1999: 6 に基づき、筆者が作成)

Diessel (1999: 92) は、図 1.1 に示される 4 つの用法における外部指示用法をより基本的・無標的であると捉えている。しかし、これらの用法は通言語的に観察されるため、本研究ではすべて無標的用法と見なすことにする。以下では、それぞれの用法を説明する。

外部指示的指示詞は、聞き手の注意を会話の場に存在する対象に向けさせる機能を持つ。つまり、(1.2-4) に示されるように、現場の人・もの・場所などを指示する用法である。日本語の指示詞に関する先行研究では、現場指示 (佐久間 1992, 阪田 1992)、眼前指示 (久野 1973)、直示用法 (金水 1999) とも呼ばれるが、本研究では、Diessel (1999) に従い、外部指示用法と呼ぶことにする。

(1.2) (pointing at a painting) Look at that painting!

(1.3) [...], 間宮が紙袋から、[...] 二十号のキャンバスを抜き出した。それは [...] 米ナスやトウモロコシの静物画だった。「この絵、昨夜仕上がった。[...]」

(『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(通常版)(以下 BCCWJ と略記),

樋口有介 2002『ともだち』)¹

1. 本稿では、特に説明がない限り、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(通常版)(BCCWJ) から引用される例文における下線・四角括弧はすべて筆者による。

- (1.4) (目の前にいる子供を見て)
这 孩子 真 可爱.
 Dem.P 子供 実に 可愛い
 「この子、本当に可愛いですね」²

なお、外部指示用法はさらにジェスチャー用法 (gestural use) および象徴用法 (symbolic use) の 2 種類に分けられる (Fillmore 1997: 62-63, Diessel 1999: 94). 次の (1.5) は前者、(1.6) は後者の例である.

- (1.5) (pointing at a dog) Look at {this/that} dog.
 (1.6) *This city is really beautiful.* (Levinson 1983: 65)

(1.5) のようなジェスチャー用法は、話し手のジェスチャー (指さしの動作など) や視線の方向変化などを伴う場合が多い. 例えば、(1.5) では、聞き手は話し手の (指示対象の人物を指さしている) 動作と現場の物理的状況により、指示詞 (this/that) の指示対象を特定できる. それに対して、(1.6) における this city は「今この時点で私 (話者) のいる町」を意味し、会話の現場で既に確立された情報 (話者の位置情報) だけが必要とされ、話し手の指さしの動作を伴いにくい.

日本語および中国語の外部指示的指示詞もこれら 2 種類の用法を有する. 上記 (1.3) と (1.4) は、それぞれ日本語、中国語指示詞のジェスチャー用法に該当する. 次の (1.7) と (1.8) は象徴用法の例である.

- (1.7) 「後藤さん、そういうわけで、僕は明日、一日サンダカンへ行ってていないからさ。こちらを、どこか夕食に連れてってあげてくれないか」後藤さんは、にやりと笑ったように見えたが、「この町ですか？」と訊き返した。「まあ、ろくなところがないのは知ってるよ。しかし、それはそれでいいんだ。フランス料理なら東京で食べればいいし、小説書くなんて人は、どんなひどい飯屋だって知ってなきゃならないんだしさ」
 (BCCWJ, 曾野綾子 1987『慈悲海岸』)

- (1.8) (話し手と聞き手が部屋のなかで話している.)
 下午 在 这 屋 有 个 会.
 午後 Loc Dem.P 部屋 ある Clf 会議

2. 本稿では、中国語例文の訳文において、「この」は中国語の近称指示詞「这」に対応し、「その」「あの」は中国語の遠称指示詞「那」に対応する。「*」と「?」の記号は、中国語指示詞の容認性を示すものであり、日本語における「この・その・あの」の容認性とは関係がない. なお、中国語の表現が、日本語に直接対応する形式が存在しない場合、意味がより近い日本語の形式を用いることにする.

「午後、この部屋で会議が行われる」

前方照応用法において、指示詞は文脈にある名詞句 (NP)³ と同一指示を行い、人・もの・場所などを指示する。例えば、次の (1.9) における **this** は、前文の **his long-awaited announcement** を先行詞に受け、キッシンジャーによる声明を指示している。日本語・中国語の指示詞も同様に用いられる (それぞれ (1.10), (1.11) 参照)。 (1.10) における「その」は「山田さん」を受けており、(1.11) における「那」は「大連 (大連)」を受けている。

(1.9) Kissinger made his long-awaited announcement yesterday. This statement confirmed the speculations of many observers.

(Lakoff 1974: 346, 下線は筆者による)

(1.10) 昨日山田さんという人に会いました。その人、道に迷っていたので助けてあげました。

(久野 1973: 186, 表記を一部改変)

(1.11) 我-们 暑假 去 大連 玩 了。
Pro.1.SG-Pro.PL 夏休み 行く 大連 遊ぶ Pfv
那 地方 挺 不-錯 的。
Dem.D 場所 ととも Neg-悪い DP

「私たちは夏休みに、大連へ遊びに行きました。そこはいいですね」

一方、談話直示的指示詞の指示対象は、談話における命題または発話行為である。指示対象が指示詞の先行文脈に存在する場合と後続文脈に存在する場合とがある。例えば、次の (1.12a) における **that** は前文の **you will move to Hawaii** という命題、(1.12b) における **this** は後文の **John will move to Hawaii** という発話を指示していると解釈することができる。

(1.12) a. A: *I've heard you will move to Hawaii?*
 B: *Who told you **that** (*this)?*

(Diessel 1999: 102)

b. A: *Listen to **this** (*that): John will move to Hawaii.*

(ibid.)

日本語と中国語の指示詞も同様に用いられる。(1.13a) の場合、「これ」は前文の「日本人には独創性がない」と照応しており、(1.13b) の場合、後続文脈の「日本国政府の中枢にいる人々はインフレを望んでいるのではないか」と照応している。(1.14) は中国語の近称指

3. 本稿では、名詞、代名詞、2 語 (以上) からなる、名詞に相当する機能を果たす語句を合わせて名詞句 (NP) と呼ぶことにする。

示詞「这」の例である。(1.14a)の場合、「这」は直前の「不是我(私ではない)」を指示しており、(1.14b)の場合、後続する「我知道是谁(誰だったのかを知っている)」を指示している。

(1.13) a. よく「日本人には独創性がない」ということが言われますが、これに対しては、「とんでもない」というのが私の意見です。

(BCCWJ, 井深大 1992『わが友本田宗一郎』)

b. これは、あくまでも推測だが、日本国政府の中枢にいる人々はインフレを望んでいるのではないか。

(BCCWJ, 浅井隆 2004『いよいよインフレがやってくる!』)

(1.14) a. 不 是 我。 这 是 实话。
Neg Cop Pro.1.SG Dem.P Cop 本当の話
「私じゃない。これは本当の話だ」

b. 这 话 我 只 跟 你
Dem.P 話 Pro.1.SG だけ Dat Pro.2.SG
说, 其实, 我 知道 是 谁。
言う 実は Pro.1.SG 知る Cop 誰
「この話はあなただけに言うよ。実は、誰だったのか、知っているの」

照応用法と談話直示用法における指示詞は共に、文脈中の要素(名詞句・命題・発話など)と照応する点において類似するため、日本語の指示詞に関する研究ではひとまとめに扱われている場合がある(阪田 1992, 金水・田窪 1992など)。本研究でも、両者を合わせて、文脈における言語的要素と照応するという意味で、照応用法(anaphoric use)と呼ぶことにする。また、指示詞の照応対象が前文にある場合を前方照応(anaphora)、後文にある場合を後方照応(cataphora)と呼ぶことにする。上記(1.12a), (1.13a), (1.14a)における指示詞は前方照応に該当し、(1.12b), (1.13b), (1.14b)は後方照応に該当する。

最後に、認識的指示詞は、談話参加者の共通知識から、現場に存在しない指示対象に関する情報を活性化させ、共同注意をそこに向けさせる働きを持つ。例えば、次の(1.15)では、*that radio*は先行詞を持たず、指示対象が会話の現場にも存在しない。話し手は指示詞を用いることによって、聞き手との共通知識から特定のラジオに関する情報を、聞き手に思い出させようとしている。

(1.15) *Do you still have that radio that your aunt gave you for your birthday?*

(Diessel 1999: 7)

日本語のア系列指示詞および中国語の遠称指示詞「那」も同じ用法を持つ(それぞれ(1.16),

(1.17) 参照).

(1.16) (A と B はルームメートである. A は先週 B といっしょに買ったシャツが見つからず, B に聞く)

A: 先週いっしょに買ったあのピンクのシャツ見なかった?

(1.17) (A と B は昨日, 友達の李さんからおいしい店があると聞いた.)

A: 我-们 去 昨天 小李 说-的 那

Pro.1.SG-Pro.PL 行く 昨日 李さん 言う-Attr Dem.D

家 店 吧.

Cif 店 DP

「昨日李さんが言ったあのお店に行きましょう」

従来の研究では, このような用法は記憶指示 (金水 1999), 概念指示 (春木 1991) と呼ばれるが, 本研究では, Diessel (1999) に従い, 認識用法と呼ぶことにする.

本研究では, Diessel (1999) を踏まえ, 指示詞の用法を外部指示用法 (exophoric use) と内部指示用法 (endophoric use) に分類し, それぞれに用いられる指示詞を外部指示的指示詞 (exophoric demonstrative), 内部指示的指示詞 (exophoric use) と呼ぶことにする. さらに, Diessel (1999) で議論された内部指示用法の 3 種類を次の表 1.1 のように, 照応用法 (anaphoric use) および認識用法 (recognitional use) の 2 つに整理し, それぞれに用いられる指示詞を照応的指示詞 (anaphoric demonstrative), 認識的指示詞 (recognitional demonstrative) と呼ぶことにする.

表 1.1. 用語の整理

Diessel (1999)	本研究
内部指示用法	
照応用法	照応用法
談話直示用法	
認識用法	

なお, 照応用法と認識用法の区別に関しては, 先行研究により異なっている. 例えば, 次の (1.18) における指示詞「あの」は, 談話参加者のあいだでよく知られている対象を指示するという点で, 上記 (1.15-17) における認識的指示詞と性質が近いと言える. 一方, 先行詞の「山田さん」と同一指示を行う点で, 照応的な性質も有する.

(1.18) きノウ, 山田さんに会いました. あの人, 変わった人ですね. (金水 1999: 72)

先行研究には、(1.18) におけるような「あの」の用法を認識用法と見なす研究もあれば (金水 1999, 堤 2003 など), (1.10) における「その」と同様に照応用法として扱うものもある (久野 1973, 大島 2014, Oshima & McCready 2017 など). 本研究では, 後者の立場を採用し, 話し手と聞き手の共通知識から指示対象に関する情報を活性化させ, 指示を行うにもかかわらず, 先行詞を持つ指示詞をすべて照応的指示詞と見なすことにする. つまり, 本研究では, 日本語のア系列指示詞の内部指示用法には照応的な場合と認識的な場合に分けられると仮定する (それぞれ (1.18), (1.16) 参照).

以上のように, 指示詞の用例は, 通言語的に広く観察される典型的・無標的なものであると考えられるが, (1.1) に示すように, 指示詞が人称代名詞と共起するなど, 比較的周辺の用法もある. 本研究では, そのような用法に注目し, 指示詞の用法を再整理・再分類することを試みる. 以下の 1.1.2 節では非制限性の概念を導入し, 1.1.3 節では情意性という概念を導入する.

1.1.2. 非制限性

1.1.2.1. 制限的・非制限的修飾部について

形容詞をはじめ, 名詞句の修飾部には制限的 (restrictive)・非制限的 (non-restrictive) 用法の区別がある. 例えば, (1.19) における *small* は制限的, (1.20) における *lovely* は非制限的な解釈を受けている.

(1.19) (There are 3 boxes on the desk. One is *small*, the other 2 big.)

A: Pass me the small box.

(1.20) (A and her only sister haven't see each other for long time.)

A: My lovely sister's coming to see me tonight.

(1.19) における *small* は制限的修飾部 (restrictive modifier) として, 名詞句全体の指示対象を, *small* という属性 (property) を持つ, 机の上にあるひとつ特定のボックスに限定する働きを持つ. それに対して, (1.20) における *lovely* は指示対象をさらに制限するのではなく, 「私の (唯一の) 姉妹」に *lovely* という属性情報を追加する機能を有する. つまり, 非制限的修飾部 (non-restrictive modifier) は, 属性情報を付加的に与えることにより, 指示対象に対する説明を充実させる役割を果たし, 指示対象をさらに限定する機能は担わない (Givón 2001: 10-11).

また, 関係節にも修飾部として, 制限関係節と非制限関係節の区別がある. 制限関係節は先行詞の指示対象を限定する働きを果たす (本多 2010: 76). 一方で, 非制限関係節の場合, 関係節の有無にかかわらず, 先行詞の指示対象は変わらない. 例えば, (1.21) においては, 非制限関係節 *who left early* の有無にかかわらず, 先行詞 *Mary* の指示対象に変化はない. 関係節 *who left early* は, 非制限的修飾部として, *Mary* に対して「早く帰った」とい

う属性情報を付加していると言える。

(1.21) *Mary, who left early, missed the Finale.* (Givón 2001: 11)

形容詞や関係節と同様に、名詞句を修飾する指示詞にも制限的・非制限的用法の区別がある。例えば、上記 (1.1) の場合、「この」があってもなくても、指示対象 (話し手の「私」) は変わらないため、非制限的修飾部と考えられる。一方、上記 (1.2-18) における指示詞は、主要部の名詞の指示対象をさらに限定しているため、制限的修飾部として機能していると考えられる。英語と中国語の指示詞も同様に非制限的な修飾に用いられる場合がある。例えば、次の (1.22) では英語の指示詞 *this* が、(1.23) では中国語の指示詞「这」が固有名詞を非制限的に修飾している。

(1.22) *I see there's going to be peace in the mideast.*

This Henry Kissinger really is something!

(Lakoff 1974: 347, 下線は筆者による)

(1.23) 我-们 公司 来 了 个 新人, 叫 王红.

Pro.1.SG-Pro.PL 会社 来る Pfv Clf 新人 呼ぶ 王紅.

这 (个) 王红 是 本地-人, 今年 刚 毕业.

Dem.P Clf 王紅 Cop 地元-人 今年 たったいま 卒業する

「うちの会社に新人が入ってきて、王紅といいます。この王紅って、地元出身の人で、今年卒業したばかりです」

上記 (1.22), (1.23) に示すように、一般に固有名詞を修飾する指示詞は非制限的な解釈を受けるが、例外的に制限的な解釈を受ける場合もある。例えば、次の (1.24) における「その」は、「山田」と呼ばれる複数の人物のなかから特定の「山田」に限定して指示しているため、制限的に解釈される。

(1.24) A: 山田さん、今月いっぱい会社を辞めるんだって。

B: そうなの？営業部に入ったばかりじゃん。

A: いや、その山田さんじゃなくて、人事部の山田さんのことね。

したがって、日中英指示詞は修飾部として、意味的に制限的な解釈を受けるか、非制限的な解釈を受けるかにより区別される。本研究では、非制限的修飾部と見なされる指示詞は非制限性 (non-restrictivity) があり、非制限的指示詞 (non-restrictive demonstrative) と呼ぶことにする。

1.1.2.2. 本研究における「非制限性」の位置づけ

制限的・非制限的修飾部の区別を定義する際に、Martin (2014: 34) による (1.25) の記述が役に立つ。

(1.25) “... [T]he traditional intuition behind this notion [= (non-) restrictivity] is generally clear: a modifier M restrictively modifies the head H when the contextual set of objects denoted by the modified head MH is properly included in the contextual set of objects denoted by H. On the other hand, M nonrestrictively modifies H if the contextual set of objects denoted by H equals the contextual set of objects denoted by MH.”

(Martin 2014: 38, 四角括弧は筆者による)

本研究では、(1.25) を踏まえ、非制限的指示詞の判断基準を以下の (1.26) のように規定する。

(1.26) 該当文脈において、指示詞が用いられる名詞句全体の指示対象の集合が、指示詞の修飾する主要部の指示対象の集合とは全く同じであると話し手が想定する場合、その指示詞を非制限的であると見なす。

(1.26) の基準を踏まえると、日中英指示詞の用法は制限的用法と非制限的用法に分けられる。本研究では、制限的・非制限的用法の分類と 1.1.1 節で説明した、外部指示用法・内部指示用法 (照応用法・認識用法) の分類と組み合わせ、指示詞の用法を次の表 1.2 のように分類する。

表 1.2. 「非制限性」を導入した分類法

指示詞の用法		制限的	非制限的
外部指示的		(1.2-8)	(1.1)
内部指示的	照応的	(1.9-14), (1.18), (1.24)	(1.23)
	認識的	(1.15-17)	(1.22)

例えば、上記 (1.1) における「この」は、指示対象 (話し手) が現場に存在するため、外部指示的・非制限的用法に該当する。

1.1.3. 情意性

1.1.3.1. Lakoff (1974) による「感情的直示」

Lakoff (1974) では、英語の指示詞 this/that には、感情的直示 (emotional deixis) という用法があると指摘されている。すなわち、話し手の感情や態度、話し手と聞き手の感情的繋

がり，聞き手の発話への参与感 (involvement) など感情的要素に関わる用法である．その用例として，次の (1.27-28) があげられている．

(1.27) I see there's going to be peace in the mideast.

This Henry Kissinger really is something!

(Lakoff 1974: 347, 下線は筆者による ; (1.22) 再掲)

(1.28) That Henry Kissinger sure knows his way around Hollywood!

(ibid.: 352)

Lakoff (1974: 347) によると，(1.27) の *this* は，話し手の指示対象に関する考え・感情などを表す．一方，(1.28) の *that* は，談話参加者のあいだに共感 (emotional solidarity) を確立し，2人が指示対象に対して同じ見方をしていることを表すという (Lakoff 1974: 352)．

Lakoff (1974) 以降の研究では，このような用法は，情意的用法 (affective use) (Davis & Potts 2010, Potts & Schwarz 2010)，感情的用法 (emotive use) (Wolter 2006) とも呼ばれている．本研究では，「情意的用法」という用語を採用する．情意的用法に用いられる指示詞は情意性 (affection) を持っており，情意的指示詞 (affective demonstrative) と呼ぶことにする．

英語の指示詞に関する先行研究において，情意的用法は明確に定義されていない．しかし，その特徴として，情意的指示詞は感情的な傾きを示さない，中立的・客観的な記述には用いられないと指摘されている (Lakoff 1974: 353)．例えば，(1.29) のような，客観的な事実を述べる発話の場合，情意的指示詞は使用できない．この特徴は，指示詞が情意的かどうかを判断する基準となる．

(1.29) *That Henry Kissinger is 5'8" tall.

(ibid.: 353)

しかし，話し手が自分の身長と比べて「キッシンジャーの身長は 177 センチもあるんだって．背が高くてうらやましいよ」などのように，何らかの感情を込められた発話されるような文脈の場合には，情意的指示詞の使用が容認される．したがって，指示詞が情意的な解釈を受けるのかどうかを判断する際には，具体的な発話場面や話者の意図を考慮する必要がある．

さらに，Lakoff (1974) の他に，英語の指示詞の情意的用法を扱った先行研究として，Davis & Potts (2010)，Potts & Schwarz (2010)，Wolter (2006) などもあげられる．これらの研究では，英語における情意的指示詞について，もうひとつの特徴が指摘されている．すなわち，英語の情意的指示詞は上記 (1.27-28) に示すように，固有名詞と共起可能であるという (Lakoff 1974: 347, Potts & Schwarz 2010: 6)．しかし，固有名詞を修飾する指示詞は，必ずしも情意的な解釈を受けるとは限らない．例えば，次の (1.30) において，話し手 (Mrs. Hayes) は *this* を非制限的に用いて自分の全く知らない人物 (Dr. Shepherd) について質問

している。話し手が Dr. Shepherd に対して、果たして良い医者であるのかといった疑いや心配が表されているという解釈だけではなく、指示対象への感嘆・評価を特に表していない、単なる中立的な質問としても解釈可能である。

(1.30) George: [...], Mr. and Mrs. Hayes. [...] I'm gonna bring Dr. Shepherd to see you,
[...] He's the brain specialist.

Mrs. Hayes: Doctor? Is he good, this Dr. Shepherd?

(*Grey's Anatomy: Season 1 Episode 7: The Self-Destruct Button*,

四角括弧・下線は筆者による)

なお、日本語と中国語の場合、固有名詞を非制限的に修飾する指示詞は、必ずしも情意的なニュアンスを伝えるとは限らない。例えば、次の (1.31) における「その」と (1.32) における中国語指示詞「这」は、話し手の感嘆・評価などの情意的な意味を伝達していない。

(1.31) 「ほう。前にもおたくの記者が取材に来たことがあった」マスターはカップをわたしの前に並べながら、名刺にちらりと目をやった。「その男を覚えているかい？」
「ああ。たしか、新なんとか、という名だった」「新庄勇一」「そうかもしれん。一、二度来ただけだからな」「じつは、その新庄が何を追っていたのかを調べている」「その新庄とかいう人はどうしたのかね?」「死んだ。殺されたんだ」「ほう」マスターは顔をしかめた。「いやな世の中だね。しかし、どうして、あの人が殺されたのだ?」

(BCCWJ, 森詠 1986 『北のレクイエム』)

(1.32) (阿誠と梁仲春が話している。談話中、梁仲春が最近「孤狼」というスパイが現れたという情報を阿誠に伝えた。阿誠はそのスパイのことを全く知らない。)

阿誠 惊-疑 道：“ ‘孤狼’?! ”

阿誠 驚く-疑う 言う 孤狼

「阿誠が驚いて、聞く『孤狼?』」

梁仲春 点点头, 轻-声 道：“ 这 个 ‘孤狼’

梁仲春 頷く 軽い-声 言う Dem.P Clf 孤狼

曾经在 远东战役 中 服役, 立-过 军-功. [...]”

かつて Loc ソ連対日戦争 なか 服役する 立てる-Exp 軍-功績

「梁仲春は頷いて、小声で言う『この「孤狼」はソ連対日戦争に参加して、功績のあった者だ。 [...]』」

(张勇 2015 《伪装者》, 括弧・下線・グロス・翻訳はすべて筆者による)

したがって、少なくとも日中英の 3 言語において、指示詞と固有名詞との共起は、その指

示詞が情意的であることを必ずしも意味しない。指示詞の情意性と非制限性という 2 つの意味特徴は、区別して考える必要がある。

1.1.3.2. 本研究における「情意性」の位置づけ

本研究では、Lakoff (1974) を踏まえ、指示詞が情意的かどうかの判断基準を以下の (1.33) のように規定する。

- (1.33) 該当文脈において、指示詞は話し手の何らかの感情・感嘆・評価を表すために用いられ、(感情・評価的な傾きを持たない) 客観的・中立的な解釈を受ける場面には用いられない場合、その指示詞を情意的であると見なす。一方、感情的・評価的な解釈にせよ、客観的・中立的な解釈にせよ、いずれの解釈を受ける場合にも指示詞が用いられる場合、その指示詞を非情意的であると見なす。

日中英指示詞の用法は、情意性の有無により細分化できる。情意性の有無に基づく分類は、外部指示・照応・認識用法の 3 分類および制限的・非制限的用法の分類と組み合わせ可能である。つまり、指示詞が用いられる際に、その指示詞が外部指示・照応・認識用法のいずれかに当たると同時に、意味的に制限的な解釈を受けるのか、非制限的な解釈を受けるのかにより、制限的・非制限的用法のうちの一つに該当する。さらに、その指示詞が中立的・客観的な解釈を受ける場面に用いられるか否かにより、必ず情意的・非情意的用法のなかの一つにも当てはまる。例えば、上記の (1.31) における「その」は、先行詞を持つため照応的であり、固有名詞「新庄」を非制限的に修飾しているため非制限的であり、中立的・客観的な記述に用いられていると解釈できるため非情意的であると考えられる。つまり、(1.31) の「その」は照応的・非制限的・非情意的であると見なすことができる。したがって、指示詞の用法は、次の表 1.3 のように、最大 12 通りに分類可能になる。

表 1.3. 指示詞の用法

指示詞の用法		制限的・ 非情意的	非制限的・ 非情意的	非制限的・ 情意的	制限的・ 情意的
外部指示的					
内部指示的	照応的				
	認識的				

1.1.4. 本研究における指示詞の分類

本研究では、指示詞の用法を、① 外部指示的・照応的・認識的、② 制限的・非制限的、③ 情意的・非情意的という 3 次元のタクソノミーによって、指示詞の用法を分類する。さらに、制限的・非情意的用法には、情意性と非制限性のいずれの特徴も認められない

め、本研究では無標的用法と呼ぶことにする。また、情意性と非制限性のいずれかまたは両方の特徴を備えた用法を有標的用法と呼ぶことにする。つまり、有標的用法には、非制限的・情意的、制限的・情意的、非制限的・非情意的という 3 種類の用法が含まれる。本研究における無標・有標的用法の区分は、表 1.4 のようにまとめられる。また、無標・有標の区分を踏まえた、指示詞の分類は、表 1.5 にまとめられる。なお、表 1.5 における各用法の該当例は 1.1 節に提示したものであり、空欄は少なくとも 1.1 節の具体例には、該当例がないことを意味する。

表 1.4. 本研究における無標的・有標的用法

指示詞	非制限性	情意性
無標的用法	—	—
有標的用法	+	—
	—	+
	+	+

表 1.5. 本研究における指示詞の分類

指示詞の用法		無標的用法	有標的用法		
		制限的・ 非情意的	非制限的・ 非情意的	非制限的・ 情意的	制限的・ 情意的
外部指示的		(1.2-8)			
内部指示的	照応的	(1.9-14)(1.18) (1.24)	(1.23) (1.30-32)		
	認識的	(1.15-17)		(1.22)(1.27-28)	

日中英指示詞の無標的用法に関して、これまで多くの研究が行われてきたが、有標的用法に関しては、不明な点が多く残されている。本研究では、日中英指示詞の有標的用法に着目し、3 言語を対照することにより、有標的指示詞の共通点と相違点を明らかにする。

1.2. 研究対象

日本語指示詞の体系はコ・ソ・アの 3 項対立をしているのに対して、中国語と英語は 2 項対立の体系を持つ。いずれの言語においても、意味や統語的環境により異なる指示詞の形式が用いられる。例えば、日本語では、代名詞として「これ」「それ」「あれ」、名詞句と共起する連体的形式「この」「その」「あの」、場所を表す「ここ」「そこ」「あそこ」、様態を表す「こう」「そう」「ああ」などがあげられる。英語の場合、場所を表す *here/there*、人やものなどを指す *this/that (these/those)* があり、後者は代名詞としても限定詞 (*determiner*) としても用いられる。中国語の「这」(近称)「那」(遠称)も同様に、代名詞の用法と名詞

句を修飾する用法を持つ。本研究では、名詞句を修飾する日中英指示詞の形式のみを調査対象とし、日本語の「この」「その」「あの」、限定詞としての **this/that** およびその複数形 **these/those**、名詞句を主要部に修飾する中国語の「这」「那」の用法を考察する。日中英 3 言語における名詞修飾型指示詞の対応関係は、次の表 1.6 のようにまとめられる。以下における「指示詞」という用語は、説明がない限り、名詞句と共起する指示詞の形式を指す。

表 1.6. 日中英 3 言語における名詞修飾型指示詞

	近称	(中称)	遠称
日本語	この	その	あの
英語	this/these		that/those
中国語	这		那

本研究では、中国語の場合は普通話を考察対象にする。以下における「中国語」は、特に説明がない限り、普通話を指す。中国語の「这」と「那」は、簡体字の表記であり、繁体字の表記は「這」と「那」になる。両者の発音に関しては、それぞれ 2 通りの発音が用いられる。近称の「这」は [tʂʏ4] (ピンイン表記 zhè) か [tʂe4] (ピンイン表記 zhèi) になり、遠称の「那」は [nʌ4] (ピンイン表記 nà) か [ne4] (ピンイン表記 nèi) と発音される (表 1.7 参照)。口語の場合には、[tʂe4] (「这 (zhèi)」) と [ne4] (「那 (nèi)」) の発音が一般的である。本研究では、簡体字表記の「这」と「那」を使用する。

表 1.7. 中国語指示詞「这」「那」の表記

簡体字表記	这	那
繁体字表記	這	那
IPA	[tʂʏ4]	[nʌ4]
IPA (口語)	[tʂe4]	[ne4]
ピンイン表記	zhè	nà
ピンイン表記 (口語)	zhèi	nèi

さらに、直接名詞句の前につけられる「この」「その」「あの」および英語の **this/that** とは異なり、中国語指示詞が名詞句と共起する場合は、「指示詞 ((+数詞)+分類辞)+NP」((1.34) 参照) および「NP₁+指示詞 ((+数詞)+分類辞)+NP₂」((1.35-36) 参照) という 2 つの形式が用いられる。数詞・分類辞は省略可能な場合と不可能な場合とがある。詳しくは第 4 章で説明する。

- (1.34) {这/那} 三 本 书
 Dem.P/Dem.D 三 Clf 本
 「{この／その／あの} 3 冊の本」
- (1.35) A, B 这 两 个 字母
 A B Dem.P 二 Clf 字母
 「A, B という 2 つの字母」
- (1.36) 小王 {这/那} 两 本 书
 王さん Dem.P/Dem.D 二 Clf 本
 「王さんの {この／その／あの} 2 冊の本」

1.3. 研究目的

本研究の研究目的を以下の (1.37) に示す。

- (1.37) a. 1.1 節の (1.26) の非制限性と (1.33) の情意性の判断基準および表 1.5 の分類に基づいて、日本語指示詞「この」「その」「あの」の有標的用法を考察し、その機能を明らかにする。
- b. (a) の考察を踏まえ、名詞句を主要部に修飾する中国語指示詞「这」「那」、限定詞としての英語指示詞 *this/that* (およびその複数形 *these/those*) の有標的用法を考察し、その機能を明らかにする。
- c. (a) と (b) の考察結果を比較し、有標的用法における日中英指示詞の共通点と相違点を明らかにする。

1.4 研究方法

本研究では、名詞句と共起する指示詞の用例を主にコーパスから収集した。また、コーパスにある言語データの体裁・規模に関して、不十分な場合があるため、必要に応じて、小説、脚本、ドラマの台詞からの用例も合わせて、調査を行った。書籍・ドラマなどを選ぶ際には、できる限り現代に話されている日本語・中国語・英語に近いものを選択した。次の (1.38) に、本研究で使用した言語データの出典を示す。ドラマの台詞に関しては、すべて映像の音声に従い、記述・考察を行った。また、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(通常版)(BCCWJ) は、中納言を通して使用した。《北京大学中国语言学研究中心 CCL 语料库》(CCL) および *The Corpus of Contemporary American English* (COCA) は、それぞれのウェブ上に公開されたサイトで使用した。COCA による引用例は、すべて 2019 年 11 月に再検索・再確認を行った。本稿において、特に明示しない限り、以下 (1.38) のリストによる用例を引用する場合、四角括弧・下線、中国語の例文におけるグロスと翻訳は、すべて筆者による。

- (1.38) a. 日本語
 書籍
 『三州吉良殺人事件』
 ドラマ・脚本
 『ホタルノヒカリ』(ドラマ)
 『古畑任三郎 2nd Season』
 『テレビドラマ代表作選集 (2011 年版)』(脚本)
 コーパス
 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(通常版) (BCCWJ)
- b. 中国語
 書籍
 《二战全史》
 《大国航母 (第 1 部)》
 《三体全集》
 《围城》
 《伪装者》(小説版)
 ドラマ
 《伪装者》
 コーパス
 《北京大学中国语言学研究中心 CCL 语料库》(以下 CCL と略記)
- c. 英語
 ドラマ
Grey's Anatomy: Season 1
 コーパス
The Corpus of Contemporary American English (ver. December 2017)
 (以下 COCA と略記)

本研究では、まず、コーパスなどの言語データから指示詞の有標的用法に該当するものを抽出し、整理・分類を行った。次に、有標的指示詞の個々の例における働きを分析し、用例を再整理、再分類した。さらに、それぞれにおける指示詞の機能を説明するための仮説を立て、各用法を説明することを試みた。仮説の妥当性を検討するなかで、使用する用例をより適切なものに見直すと同時に、必要に応じて作例を追加し、仮説の検証・修正を行い、有標的指示詞の機能に関してより妥当な記述を試みた。同様のプロセスにより、日本語の指示詞「この」「その」「あの」、中国語の指示詞「这」「那」、英語の指示詞 *this/that* に着目し、日中英指示詞の有標的用法における機能を検討した。作例の容認性判断については、日本語と英語の場合はすべて母語話者のインフォーマントに聞き取り調査を行った。

中国語での作例の容認性判断は筆者による。最後に、考察の結果に基づき、日中英指示詞の有標的用法を比較することにより、その共通点と相違点を整理し、結論をまとめた。

1.5. 本論の構成

本論は全 7 章から構成される。次の第 2 章では、日中英指示詞の無標的用法に関する先行研究を概観し、各言語における無標的な指示詞の機能および指示詞間の区別を整理する。第 3 章から第 5 章では、日本語の指示詞「この」「その」「あの」、中国語の指示詞「这」「那」、英語の指示詞 **this/that** の有標的用法を考察し、それぞれ指示詞の機能を分析する。第 6 章では、日中英 3 言語における有標的指示詞の用法のうち、表 1.5 に示す 12 の用法に収められにくいものを取り上げる。第 7 章では、第 3 章から第 5 章まで議論した日中英 3 言語の有標的指示詞の用法を比較することにより、その共通点と相違点を整理し、結論を述べる。

2. 日中英指示詞の無標的用法について

日中英 3 言語のなかで、日本語の指示詞は近称・中称・遠称 (コ・ソ・ア) の 3 項対立をなす「人称指向的 (person-oriented)」体系を持つ (Diessel 1999:39, Huang 2014: 196). 対して、中英両言語は近称と遠称 (这・那, this/that) の 2 項対立をなす指示詞の体系を持つ. 第 1 章で言及したように、先行研究では、日中英のそれぞれにおける指示詞の無標的用法を取り上げるものもあれば、この 3 言語を含めた数多くの言語データに基づき、類型論的な共通点に注目して考察するものもある. また、日英、日中、中英を対象に、指示詞の無標的用法に関する対照研究も多く行われている. 本章では、日中英 3 言語における指示詞の無標的用法に関する先行研究を概観し、外部指示・照応・認識用法のそれぞれにおける無標的指示詞の機能および各言語における指示詞の区別を整理する. 以下の 2.1 節では外部指示用法, 2.2 節では照応用法, 2.3 節では認識用法における日中英指示詞の無標的用法について説明する.

2.1. 外部指示用法

以下 2.1.1 では日本語のコ・ソ・ア系列指示詞, 2.1.2 節では英語の this/that, 2.1.3 節では中国語の「这」「那」の外部指示用法について説明する.

2.1.1. 日本語の場合

日本語のコ・ソ・ア系列指示詞の外部指示用法について、一般に、コは近称 (proximal) 指示詞であり、直視中心の話し手に近い指示対象を指す; ソは中称 (medial) 指示詞であり、話し手からは遠いが聞き手に近い指示対象を指す; アは遠称 (distal) 指示詞であり、聞き手と話し手の両方から遠い指示対象を指すと見なされている (Halliday & Hasan 1976: 59, Diessel 1999: 39, 服部 1968: 71, Hoji et al. 2003: 2, 金水・田窪 1992: 143, 小泉 1988:9).

話し手の遠・近に対する認識は主観的なものであり、物理的距離により判断される場合もあれば、他の要因に影響される場合もある. 例えば、談話参加者の指示対象に対する操作・接触可能性、談話参加者と指示対象との所有・所属関係、話し手と指示対象との心理的距離などの要素があげられる (佐久間 1992: 34, 金水・田窪 1992: 132, Imai 2018). 発話の場面により話し手の指示詞の選択を左右する要因が異なる. 例えば、金水・田窪 (1992: 132) では、指示対象の操作可能性が物理的距離よりも優先に考慮される例として、次の (2.1) があげられている. (2.1) では、指示対象が話し手 (患者) 自身の身体部位であり、話し手に極めて近いと考えられるが、その部位が聞き手 (医者) に操作またはコントロールされていると想定されるため、ソが用いられている.

(2.1) 医院で：

医者：(患者の腹部を押さえながら) ここ，痛みますか。

患者：そこは，それほどでもありません。

(金水・田窪 1992: 132)

また，所有・所属関係に関して，指示対象が話し手の近くにあっても，それが聞き手に身につけているものか聞き手に所有されると話し手が想定する場合，ソが優先される。

なお，指示対象の遠近を判断する際に，金水・田窪 (1992: 128) は，話し手が現場における指示対象が遠いと認知できるのは視覚と聴覚に限られ，触覚，味覚などによっては認知されないと指摘している。例えば，次の (2.2) では，話し手は音の発生源が 2 階にあると判断し，それが話し手 A と聞き手 B の両方から離れていると認識したため，アを用いていると考えられる。

(2.2) (アパートの 1 室で A と B が話している。2 階の部屋から，ドシンドシンという音が聞こえる。)

A：あれ，何をしている音かな？

B：引っ越しじゃん？

また，次の (2.3) に示すように，話し手は聴覚により，指示対象が聞き手に所有されるものと判断し，ソを用いることができる。

(2.3) (A と B は図書館で勉強している。突然，B のカバンから携帯電話の着信音が大音量で流れる。)

A：おい，早くそれ止めろ。怒られる。

したがって，指示対象が見えず，音しか聞こえない場合，日本語では，話し手はその音の発生源の遠近を推測することにより指示詞を選択する。一方，視覚・聴覚以外の場合，例えば，においにより指示対象を認識する場合，そのにおいの遠近によりコ・ソ・アを区別して選択することができず，コを用いることになる (千葉・村杉 1987: 128)。

なお，ソ系列指示詞のなかで，場所を指示する「そこ」の使用・選択に関しては，聞き手と指示対象との遠近に対する話し手の認識だけでは説明しきれない場合があると指摘されている (服部 1968, 阪田 1992 など)。阪田 (1992) は，小説から「話し手と相手が同一の場所を『ここ』と指示し，『あそこ』と指示するほどには遠くない場所を両者がたがいに『そこ』と指示しあう (阪田 1992: 59)」用例をあげ，「そこ」は話し手からやや離れているが，「アで指示するほどは遠く離れていない (阪田 1992: 58)」指示対象を指示する用法もあると主張している。例えば，次の (2.4) に示すように，乗客と運転手が同じ場所を「そ

こ」で指すことができる (阪田 1992: 59). この場合、「そこ」の指示対象が乗客か運転手の片方により近いと解釈することができない。

- (2.4) 乗客：そこで止まってください
運転手：そこの床屋の角ですね

(阪田 1992: 59, 一部改変)

つまり、「そこ」は話し手が自分より聞き手に近いと認識するものを指示する用法のみならず、自分から近くもなく遠くもないと見なすものを指示する「中距離用法」も持つと考えられる (金水・田窪 1992: 138, 平田 2015, 金井 2017 など).

2.1.2. 英語の場合

英語と中国語は共に近称・遠称の 2 項対立の指示詞体系を持っており (Huang 2014: 193, 金水・田窪 1992:142), 近称指示詞 (this・这) は話し手に近い, 遠称指示詞 (that・那) は話し手から比較的遠い対象を指示するのが一般的である (Diessel 1999: 36). 本節では英語, 次の 2.1.3 節では中国語の場合について説明する。

英語の場合, 近称の this は話し手に近いもの, 遠称の that は話し手に遠くないあるいは遠く離れたものを指示する (Lakoff 1974: 346, 349, Halliday & Hasan 1976: 58, Diessel 1999: 36, Huang 2014: 193-194). 遠近の判断に関しては, 日本語の場合と同様, 物理的距離, 談話参加者の指示対象に対する操作・接触可能性, 話し手と指示対象との心理的距離など多くの要因により影響される (服部 1968: 74-76, Wu 2004: 191, Imai 2018). そして, 日本語の場合と同じように, 各要因のなかで, 物理的距離が必ずしも優位に立つわけではない。英語では, 日本語の (2.1) の例と似たように, 指示対象に対する操作可能性が物理的距離より優先されることがある。例えば, 医者が患者の背中に触れるとき, 患者の話し手が医者に触れられる部位を指示する際には, 近称より遠称の that を用いるのが一般的である (Imai 2018: 527). また, 英語でも, 日本語の場合と同様, 談話参加者と指示対象の所有・所属関係が指示詞の選択を左右する場合がある。例えば, 聞き手が身につけているものに対して, 自分の近くにあっても話し手が this ではなく, that で指示するのが普通である (服部 1968: 75). したがって, 英語では, 日本語のように聞き手に近いものを指示するための中称指示詞を持たないが, 近称 (this)・遠称 (that) の区別・選択に関しては日本語と類似し, 聞き手の影響に敏感であると考えられる。しかし, 話し手が指示対象に直接接触している場合, 日英語のあいだに指示詞を選択する要因の優先度には違いが見られる。英語において, 話し手が自分の手に持っているものでも, 遠称の that が選ばれることがある (千葉・村杉 1987: 111, Lyons 1995: 310-311, Wu 2004: 191). その場合, that が話し手の指示対象に対する疎遠・嫌悪などの気持ちを表し, 物理的距離より心理的距離が優先されると考えられる。それに対して, 日本語では, 話し手が直接接触している対象を指示する

際、近称の「こ」が義務的になる (Imai 2018: 526).

最後に、話し手の指示対象に対する遠近の区別に関して、英語では、視覚・聴覚・嗅覚により認知されることが可能である。次の (2.5) に示すように、現場に見えない対象を指示する際、聴覚による遠近の認識に基づいて **this/that** のいずれかを選ぶことになる。

(2.5) (Hearing a big sound of a machine, which both the speaker and hearer cannot see)
What's {this/that}?

また、においの程度により出所の遠近を推測して、または、そのにおいに対する話し手の心理的距離の遠近を区別して、次の (2.6) に示すように、**this/that** のいずれかを選ぶことができる (千葉・村杉 1987: 128-130).

(2.6) What's {this/that} smell?

(千葉・村杉 1987: 128, 下線は筆者による)

この点に関しては、英語の指示詞 **this/that** は日本語・中国語の場合とは異なる (それぞれ 2.1.1 節, 2.1.3 節参照). 日本語の場合は嗅覚, 中国語の場合は聴覚・嗅覚により指示対象の遠近に基づいて異なる指示詞で指示対象を指すことができない. 次の 2.1.3 節では中国語の外部指示的指示詞の無標的用法について説明する.

2.1.3. 中国語の場合

中国語の場合、一般に、近称の「这」は話し手に近いもの、遠称の「那」は話し手から離れたものを指示するのに用いられる (吕叔湘 1985: 187, 王力 1985: 299, 沈家煊 1999: 187, 肖薇・郭晓华 2005: 155). 指示対象が近いか遠いかを判断する場合、日本語と英語の場合と同様に、物理的距離の他、心理的要素など多くの要因により影響される場合があるが、主として話し手と指示対象との物理的距離もしくは現場における指示対象の物理的配置に左右される (讚井 1988: 5). つまり、中国語における指示詞の選択に関しては、物理的要因の優先度が日英語の場合より高いと考えられる. 例えば、話し手・聞き手と指示対象との所有・所属関係に関して、2.1.1 節と 2.1.2 節で述べたように、日本語・英語においては、聞き手の身につけているものまたは聞き手に所有されると想定されるようなものに対しては、非近称の指示詞 (ソ・that) が選好される. 一方、中国語においては、聞き手の手に持っているものや身につけているものに対して、遠称の「那」で指示することもあるが、話し手と聞き手が手の届くような近くにいる場合においては、物理的距離が優先に考慮され、近称の「这」が好まれる (木村 1997: 185). この点では、中国語の指示詞は、聞き手と指示対象との所有・所属関係により非近称指示詞が優先される日本語・英語とは異なる. また、指示対象が話し手の手に持っているものもしくは身につけているものなど、

話し手と指示対象が直接接触しているような場面では、近称の「这」しか用いられず、英語のように、心理的・感情的な疎遠により遠称指示詞を選ぶことはできない。この点に関して、中国語の指示詞は日本語の場合と同様に、話し手が指示対象に直接接触している場合、一般的には近称指示詞（这・コ）の使用が義務的となる。

さらに、中国語の場合、現場指示における遠近の区別は視覚による認識に限られ（金水・田窪 1992: 129; cf. 讚井 1988: 9), 聴覚・嗅覚などにより指示対象の遠近を区別して「这」「那」の選択をすることはなく、音やにおいの発生源の遠近にもかかわらず、近称の「这」で指示することになる。この場合、遠称の「那」が用いられにくい。例えば、次の (2.7) では、話し手は車の音が聞こえているが、その車が見えない。話し手はその音が「小明 (明ちゃん)」の車の音であると推測し、「明ちゃんが帰ってきたんじゃない」と言っている。この場面では、音の発生源 (車) の遠近にもかかわらず、近称の「这」しか用いられない。

(2.7) (A と B は友人同士である。2 人が、B の家で話をしているとき、外から車の音が聞こえてくる。A は、それが B の息子である明が帰ってきて、駐車している音であると推測し、B に言う)

A: 这 是 小明 回来 了吧?
 Dem.P Cop 明ちゃん 帰る Pfv DP
 「これ、明ちゃんが帰ってきたんじゃない？」

また、嗅覚の場合も同様である。次の (2.8) に示すように、においを指示する際、その出所の遠近にもかかわらず、近称の「这」しか用いられない。

(2.8) (変なにおいがして)
这 是 什么 味儿?
 Dem.P Cop なに におい
 「これ、なんのにおい？」

この点では、中国語の指示詞は、聴覚により遠近の区別ができる日本語および聴覚・嗅覚により区別ができる英語の指示詞とは異なる。

また、中国語の外部指示的指示詞は、日本語と英語には見られない、呼称詞につける用法を持つ (奥田 1995: 204)。中国語では、名前・職業などが全く知らないような、呼びにくい相手に対して、指示詞を用いて呼びかける場合がある。そして、指示詞の選択は話し手の指示対象に対する遠近の認識による。次の (2.9) における「这」は近くにいるお客さん、(2.10) における「那」は遠ざかっていく女性を呼びかけるのに用いられている。

- (2.9) (お店のなかで、店員が目の前に待っているお客さんに)
这 位 先生, 请 稍 等.
 Dem.P Clf.Hon Voc.Masc.Hon どうぞ ちょっと 待つ
 「このお客様, 少々お待ちください」
- (2.10) (すれちがった女性が何かを落としたと気づき, 遠ざかっていくその女性を呼びかけて)
那 位 大姐! 您 东西 掉了!
 Dem.D Clf.Hon お姉さん Pro.2.SG.Hon もの 落ちる Pfv
 「その／あのお姉さん! 落とし物がありますよ」

対して, 以下の (2.11) に示すように, 英語では, 聞き手に対して直接 **this/that** を用いて呼ぶことが一般的ではない.

- (2.11) (to call the addressee)
 ??{This/That} man!

日本語の「この」「その」「あの」も同じように, (2.12) のように用いることは普通できない.

- (2.12) (聞き手を呼ぶ)
 ??{この／その／あの} {先生／お客様／人}!

ただし, 次の (2.13) に示すように, 場所を表す「ここ」「そこ」「あそこ」もしくは「こちら」「そちら」「あちら」を用いて相手を呼ぶことは可能である.

- (2.13) おい, そこの君!

また, 日本語では, 次の (2.14) に示すように, 指示詞「この」と「あの」が一部の名詞とひとつの全体をなして間投詞的に用いられ, 話し手の感情・感嘆を表す用法を持つ。「その」はこの用法を持たない.

- (2.14) {この／あの} バカ!

中国語においても, 上記日本語の (2.14) と同様に, 指示詞が間投表現に用いられ, 感嘆的な意味を伝える場合がある. 次の (2.15) がその例である.

- (2.15) {这/那} 个 笨蛋!
 Dem.P/Dem.D Clf バカ
 「{この／その／あの} バカ！」

上記 (2.14-15) のような用法においては、指示詞が常に感嘆的な意味を表すため、情意的な性質を持つと考えられる。この点では、上記 (2.9-10) における呼称詞的な用法とは性質が異なる。(2.14-15) のように、指示詞が感嘆・間投表現に用いられる用法については、第 6 章の「その他の有標的用法」において詳しく検討する。

2.1.4. まとめ

以上のように、日本語の指示詞は近称 (コ)・中称 (ソ)・遠称 (ア) の 3 項対立をなすのに対し、中英両言語は近称 (这・this)・遠称 (那・that) の 2 項対立の指示体系を持つ。外部指示用法において、日中英指示詞の選択は主に話し手の指示対象に対する遠近の認識に左右され、指示対象が話し手に近いと認識される場合は近称指示詞 (コ・这・this) が使用される。そうでない場合は、非近称 (中称・遠称) の指示詞が使用される。後者に関しては、中英語の場合、遠称指示詞 (那・that) が用いられる。日本語の場合、指示対象が (話し手から離れているが) 聞き手に近い場合は中称のソ、話し手と聞き手の両方から離れている場合は遠称のアで指示する。ただし、「そこ」は、やや特殊な用法として、話し手からやや離れているが、遠称のアで指示するほど遠くもないような対象を指示する「中距離用法」も持つと指摘されている (金水・田窪 1992: 138, 阪田 1992, 平田 2015, 金井 2017 など)。

さらに、話し手の指示対象の遠近に対する認識に関しては、様々な要因から影響を受けるが、各要因の中で、聞き手に関する要因 (聞き手と指示対象の所有・所属関係、聞き手が指示対象に対する操作・接触可能性など) および話し手と指示対象の距離など物理的な要因の優先度に関しては、日英語と中国語のあいだに相違が見られる。すなわち、日本語と英語においては、指示詞の選択に関して、指示対象の所有・所属関係など聞き手に関する要因が優先に考えられる場合があるのに対して、中国語の場合においては、主として物理的な要因が指示詞の選択に影響を与える。また、話し手が直接指示対象と直接接触している場合、日本語と中国語では、近称指示詞 (コ・这) が義務的になるが、英語では、場面により心理的な要因が優先に考慮され、遠称指示詞 (that) が選ばれることがある。

最後に、日中英 3 言語において、話し手は視覚・聴覚・嗅覚により認知した対象を指示することができるが、聴覚・嗅覚の場合において、指示対象の遠近の区別を指示詞により反映できるかどうかについては、この 3 言語の指示詞に違いが見られる。嗅覚の場合、英語の指示詞は指示対象の遠近を区別することができるが、日本語・中国語の指示詞はその区別ができず、近称指示詞 (コ・这) を用いることになる。一方、聴覚にしか認知できない対象を指示する際に、日本語と英語の両言語においては、音声源の遠近により異なる指示

詞を選ぶことができるのに対し、中国語では、近称指示詞「这」しか用いられない。すなわち、中国語の指示詞を選択するとき、遠近の区別は視覚のみに基づいていると言える。

2.2. 照応用法

第 1 章で説明したように、指示詞の照応用法には前方照応と後方照応の 2 種類に分かれる。日中英 3 言語においては、一般に、すべての指示詞は前方照応に用いられるが、近称指示詞 (コ・this・这) のみ後方照応にも用いられる。日本語・英語・中国語における照応的指示詞の無標的な使用についてはそれぞれ以下の 2.2.1 節, 2.2.2 節, 2.2.3 節で述べる。また、やや特殊な照応現象として、「連想照応」と「束縛変項 (bound variable anaphora)」という現象も見られる。これらに関しては 2.2.4 節で説明する。

2.2.1. 日本語の場合

日本語におけるコ・ソ・アの使い分けに関しては、談話参加者の知識管理の観点から分析する先行研究が多く、成果をあげている (久野 1973, 金水・田窪 1992, 黒田 1992, 大島 2014, Oshima & McCready 2017 など)。まず、コ・ソ・ア 3 系列のうち、ア系列指示詞のみ、指示対象が談話参加者の共通知識の一部となっており、なおかつ、すべての談話参加者がそのことを知っていると話し手が想定する場合にしか用いられないと指摘されている (大島 2014 ; cf. 久野 1973)⁴。

次に、コ・ソの両系列の区別に関して、コは前方照応・後方照応の両方に用いられるのに対し、ソ系列の使用は前方照応に限られ、後方照応には用いられない (安藤 1986: 223)。さらに、前方照応のコ・ソの使用条件として、ソ系列は、指示対象が談話参加者の共通知

4. ただし、例外的な場面として、指示対象に関して、話し手もしくは聞き手がよく知らない場合においても、「話し手が『聞き手が特定の属性 (=P) を備えた個体を探している』という想定をしたうえで、P を備えた個体を紹介する場合、その個体を指示するのにア-系列を用いることができる」(大島 2014: 8)。例えば、次の (i) においては、話し手 (A) は、聞き手 (B) がスペイン語に堪能な人をさがしているかもしれないと想定し、その条件を満たした「高木」という人を紹介している。そこで、話し手は聞き手の知らない「高木」を「あの」により指示することができる (この場合、「その」も容認される)。

(i) (A と B は同じ会社に勤めている。B はスペイン語の書類を翻訳する必要があり、辞書を片手に四苦八苦している。)

A: 経理課に配属された新入社員で、高木っていう人がいるんですけど、{あの/その} 人はスペイン語ができるらしいですよ。

(大島 2014: 7, 下線は筆者による)

識の一部となっており、なおかつ、すべての談話参加者がそのことを知っていると話し手が想定している、というア系列の使用条件が満たされていない場合にのみ用いられると指摘されている (大島 2014 参照)。すなわち、話し手と聞き手のうち、指示対象を同定できない者がいる、または、話し手・聞き手が共に指示対象を同定できないと話し手が想定する場合、ソが用いられる (大島 2014 参照 ; それぞれ以下 (2.16), (2.17) 参照)。

(2.16) 明日会場に行けば、受付に中村さんという人がいますから、{*あの人 / その人} に聞いてください。

(金水・田窪 1992: 130, 一部改変, 下線は筆者による)

(2.17) (A と B が、連れだって映画館の席につく。A が、床に携帯電話が落ちているのを見つける。)

A: おや、誰か携帯電話を忘れていったみたいだ。

B: その人, 今頃あわてているだろうね。

(大島 2014: 3)

また、話し手・聞き手が共に指示対象を同定できても、聞き手がそのことを知らないと話し手が想定する場合においては、ア系列ではなく、ソ系列が用いられる (大島 2014: 8-9)。次の (2.18) における 2 つ目の「その」の用法はこれに当てはまる。

(2.18) (A が B のうちを訪ねてくる)

A: 駅前でケーキを買ったんだけど、その店の店長さん、すごく面白い人だったよ。その人, 若いころ、パリでお菓子作りの修行をしたんだって。

B: {その / (?) あの人}人, 私の幼馴染で、いまでもよく一緒に釣りに行ったりするんですよ。

(大島 2014: 8)

したがって、前方照応におけるソ系列指示詞は以下 (2.19) に示すすべての場面に用いられると整理することができる。

- (2.19)
- a. 話し手が指示対象を同定できるが、聞き手はできないと話し手が想定する
 - b. 話し手が指示対象を同定できないが、聞き手はできると話し手が想定する
 - c. すべての談話参加者が指示対象を同定できるが、そのことを知らない者がいると話し手が想定する
 - d. すべての談話参加者が指示対象を同定できないと話し手が想定する

(大島 2014, Oshima & McCready 2017 に基づき, 筆者が整理)

一方、コ系列指示詞に関しては、上記 (2.19a) の場面にしか用いられず (久野 1973: 189, 大島 2014: 12), 発話に「生き生きと叙述する」ような効果があり, 外部指示的な色彩が依然として強いとされている (久野 1973: 188). この「生き生きと」した効果は情意的なニュアンスに関係していると考えられる. その理由として, 次の (2.20a) のように, 話し手が何らかの感嘆をするような場面においては, 前方照応的なコが自然に用いられるが, (2.20b) のように, 事実を客観的に述べる場合においては, コの容認度が低下する. この性質は第 1 章で説明した情意的指示詞の特徴に当てはまる. つまり, 前方照応に用いられるコは話し手の何らかの感嘆・評価を表すと解釈することが可能であり, (2.20b) におけるような (感情的に) 中立的な文脈には容認されにくいいため, 情意性を持つ有標的指示詞と見なすことができる.

- (2.20) a. コンビニでレトルトのカレーを買ったんだけど, {この/その} カレーがすごくおいしくてびっくりしちゃった.
- b. コンビニでレトルトのカレーを買って, うちで {??この/その} カレーをご飯にかけて食べた.

(孟・大島 2018: 120, 下線は筆者による)

対して, ソ系列指示詞は (2.20) に示すいずれの場面にも用いられるため, 非情意的であると言える. よって, 前方照応において, (2.20) のように制限的な解釈を受ける場合, ソは非情意的で, 無標的である一方, コは情意性を持っており, 有標的であると考えられる. 有標的な「この」「その」「あの」の用法については, 第 3 章で詳しく分析する.

以上, 先行研究を踏まえ, 談話参加者の知識管理の観点からコ・ソ・アの用法と区別を整理してきた. しかし, このような説明は, 聞き手が存在しない (その代わりに読み手が相手となる) 非対話的な文脈においては適用されない. また, 上記で述べた前方照応におけるコ系列の情意的な特徴も同様に, 非対話的な文脈においては見られない. 例えば, 次の (2.21) の新聞記事の例では, 下線部の「この」は客観的な陳述に用いられている.

- (2.21) AP 通信や CNN テレビなどの米主要メディアは一日、三月末にパキスタン当局が米情報機関などと協力して実施したパキスタン国内のテロ組織アルカーイダ拠点の摘発で、同組織の最高幹部の一人であるサウジアラビア生まれのパレスチナ人、アブ・ズベイダ氏とみられる人物が見つかり、米国が身柄を拘束していると伝えた。ロイター通信などによると、ホワイトハウス当局者は二日、この人物について「アブ・ズベイダであると信じている」と述べ、当人であることは間違いないことを示唆した。

(BCCWJ, 『産経新聞』2002)

このような新聞記事や論説文など書き言葉的な場面においては、コが一般的であると言われている (庵 2002: 15, Oshima & McCready 2017: 816). そこを補うために、庵 (1994, 1995a, 1996, 2002) は文脈の「結束性」に基づいたアプローチを提案し、新聞記事を研究対象にコ・ソの照応的な使用を考察した。庵 (1995a: 80) では、「結束性」という概念を、「文中のある要素が自らの解釈を他の部分に依存し、そのことによって文連続が一つの意味的まとまり (テキスト) をなすとき、その文連続には結束性がある」と定義している。庵の考察によると、新聞記事など書き言葉的な文脈においては、コ・ソの置き換えが可能な場合が多いが、「この」は先行詞を「言い換えた形で受けること」が多いのに対し、「その」は「先行詞をそのまま受けることになる」(庵 2002: 11) と報告されている。また、指示詞が先行詞とのあいだの距離が大きくなる、または、トピックとの関連性が高くなるほど「この」しか用いられなくなるという (庵 1995a 参照)。

なお、庵 (1994, 1995a, 1996, 2002) は、ソ系が「テキスト的意味付与」をマークするという特有の機能を持つと主張している。具体例として、(2.22) があげられている。(2.22) では、「その順子」の解釈は先行文脈に依存し、「僕なしでは生きられないと言った順子」という「テキスト的意味」が指示詞により臨時的に付与されていると述べられている (庵 1995a: 79)。「この順子」あるいは「順子」で置き換えると、(2.22) における 2 つの文の連続が不自然になる。

(2.22) 順子は僕なしでは生きられないと言った。その／＃この／??φ 順子が今は他の男の子供を二人も生んでいる。

(庵 1995a: 79)

庵は制限的・非制限的用法の区別について明確に言及していないが、(2.22) における「その」は非制限的な解釈を受けると考えられるため、本稿の定義に従うと、非制限的な有標的指示詞と見なすことができる。このような用法については、第 3 章で、有標的用法の 1 種として具体的に検討する。

最後に、日本語の先行研究でよく議論される指示詞の用法のひとつとして、代行指示と呼ばれるものがある (庵 1995b, 2002, 金水 1999, 堤 2012 など)。例えば、次の (2.23) における「その」が代行指示用法に該当し、「先行詞+の」(「太郎の」) の代用形として機能していると考えられる。

(2.23) 太郎とその弟

これはソに特有の用法であり、コ・アにはないと指摘されている (金水 1999: 81, 堤 2012: 59)。

英語と中国語の指示詞にはこの用法が見られない。ただし、英語の場合、限定詞的な

this/that は日本語の「その」のように用いられないが、次の (2.24) に示すように、that of N のような形で、似たような働きを果たすことがある。この場合、this は用いられない (Huddleston 1984: 296-297).

(2.24) His behaviour was like that of a child

(Huddleston 1984: 297)

中国語の「这」と「那」も、英語の場合と同じく、上記 (2.23) に示すような用法を持たない。次の (2.25-26) に示すように、同様の場面では、人称代名詞を用いることになる。

(2.25) 太郎 和 他 的 弟弟
太郎 と Pro.3.SG.Masc の 弟
「太郎と彼の弟」

(2.26) 夏目漱石 及 其 著書
夏目漱石 と Pro.3.の 著書
「夏目漱石と彼の著書」

したがって、英語と中国語の場合、少なくとも名詞修飾型の指示詞 (this/that・这/那) は、「その」の代行指示に該当するような用法を持たないと言える。

2.2.2. 英語の場合

英語において、this は前方照応・後方照応の両方に、that は前方照応にのみ用いられる (Lakoff 1974: 346, 350, Huddleston 1984: 296, Diessel 1999: 103, 安藤 1986: 218). 先行研究では、this/that の両方が前方照応に用いられるが、口語的な場面では that のほうが一般的に用いられ、this の使用頻度は比較的低いと報告されている (Passonneau 1989, Strauss 2002 など). さらに、指示詞 this/that の用法の区別は、談話参加者の指示対象に対する知識の (非) 対称性の観点から説明可能である。Oshima & McCready (2017) は、this/that の使い分けを次の (2.27) のように整理している。

- (2.27) i. this が用いられるのは聞き手か話し手のうち、いずれかが指示対象に対してよりよく知っていると話し手が想定する場合に限られる
ii. that の使用には (i) のような制限が課されていない

(Oshima & McCready 2017: 824 に基づいて、筆者が整理)

つまり、this の使用は話し手と聞き手の間に、指示対象に対する知識の非対称性があると想定される場合に限り容認される。具体的には、話し手と聞き手のうち、片方は指示対象

を同定できるが、もう片方はできないと話し手が想定する場合 ((2.28) 参照), または, 話し手・聞き手が共に指示対象を同定できるが, 片方が指示対象についてよりよく知っていると話し手が想定する場合 ((2.29) 参照), **this** が用いられる.

(2.28) A: John has a pet tortoise.

B: Oh really? How big is **{that/this}** tortoise?

(Oshima & McCready 2017: 823)

(2.29) A₁: Do you remember that you, I and a student of yours had some discussion on null anaphora at the LSA meeting a couple of months ago?

B: Sure.

A₂: Is **{that/this}** student still around? Our project team needs some help from a native speaker of Japanese.

(ibid.: 824)

上記 (2.29) では, 話し手 A と聞き手 B は共に指示対象の学生を同定できるが, 聞き手のほうがその学生についてより多くの情報を持っていると話し手が想定していると考えられる. このような場面では, **this** の使用が容認される. 逆に, 話し手自身が指示対象について聞き手よりよく知っている想定する場合も同様である ((2.30) 参照).

(2.30) A₁: Do you remember that you, I and a student of yours had some discussion on null anaphora at the LSA meeting a couple of months ago?

B: Sure.

A₂: Well, **{that/this}** student is going to finish his thesis, and he is hoping to have you as an external committee member.

(ibid.)

一方, すべての談話参加者が指示対象を同定できるまたは同定できないと話し手が想定する場合, **this** は用いられない (Oshima & McCready 2017 参照).

したがって, Oshima & McCready (2017) によると, 以下 (2.31) に示す 4 つの場面のうち, **this** は (a) と (b) のような場面で用いられる. (c) のような場面においては, 話し手と聞き手のあいだに, 指示対象に対する知識に非対称性がある場合に限り, **this** が容認される. 対して, **that** にはそのような制限がなく, (a-d) のすべての場面に用いられる.

- (2.31) a. 話し手は指示対象を同定できるが、聞き手は指示対象を同定できないと話し手が想定する場合
 b. 話し手は指示対象を同定できないが、聞き手は指示対象を同定できると話し手が想定する場合
 c. すべての談話参加者が指示対象を同定できると話し手が想定する場合
 d. すべての談話参加者が指示対象を同定できないと話し手が想定する場合

(Oshima & McCready 2017 に基づき、筆者が整理)

したがって、英語の場合、*this/that* のうち、*that* のほうが一般的であると言える。一方、近称の *this* は談話参加者のあいだの知識の非対称性をマークする機能を持つと考えられる。なお、前方照応において、両者の置き換えが可能な場合、*this* を使うことで、話題がこれからもしばらく続くと予想される傾向があるのに対して、*that* は話題がこれで終わると感じさせると指摘されている (Lakoff 1974: 350)。また、*this* は話し手が指示対象に対して親近感や興味を持っていることを表し、*that* は客観的あるいは冷淡な態度を示すという指摘もある (服部 1968: 78-79)。

しかし、新聞記事、学術論文など非会話的な場面に関しては、近称指示詞 (*this*) のほうが一般的であるとされている (Oshima & McCready 2017: 825-826)。英語の書き言葉を中心に指示詞を考察する研究として、Nishimura (1996)、McCarthy (2004)、Fan (2013) などがあげられるが、例えば、コーパスにおける学術論文を対象に *this*, *that*, *it* の使用を考察した Fan (2013) では、*this* の使用は *that* より圧倒的に多い (*it* の使用頻度は *this* と *that* のあいだである) と報告されている。なお、McCarthy (2004) は、新聞・雑誌などにおける書き言葉的な言語データに基づいて *it*, *this*, *that* の用例を分析した結果、*this/that* の使用は注意の焦点 (*current focus*) の転移に関係していると指摘している。*this* は、先行文脈では注意焦点にはならなかった対象を、現在の注意の焦点として取り上げることを標示する一方、*that* は現在の注意の焦点には当たらない対象 (例えば、前の注意の焦点に当たったが現在の注意の焦点には当たらないものなど) を指示すると述べられている。

2.2.3. 中国語の場合

中国語の場合、近称の「这」と遠称の「那」は共に照応用法に用いられる。一般的には、日英語の場合と同様に、近称指示詞 (这) は前方・後方照応用法を共に持ち、遠称指示詞 (那) は前方照応の用法のみを持つと言われている (吕叔湘 1985: 205, 肖薇・郭晓华 2005: 156, 小野 2016 など)。

しかし、前方照応における「这」と「那」の具体的な区別に関しては、これまで多くの研究が重ねてきたが、日本語と英語の場合ほど深く議論されていない。2.2.1 節および 2.2.2 節で述べたように、日本語・英語における照応的 (特に前方照応的な) 指示詞の選択は、談話参加者の知識管理の観点から説明されるが、同じ観点から中国語の指示詞につい

て考察する先行研究は管見の限り見当たらない。その代わりに、「这」と「那」の大まかな使用傾向を列挙するもの（吕叔湘 1985, 王力 1985 など）や「这」と「那」の選択に影響を与える（談話参加者の知識に関係しない）要因を議論するものが多い。例えば、「这」と「那」の選択に左右する重要な要因として、時間的距離・心理的距離（話し手と指示対象との関わりや話し手の指示対象に対する関心の有無などに関わる要因）、または、指示詞と先行詞（もしくは照応する命題・発話）とのあいだの距離があげられる（讚井 1988, 丁启阵 2003, 高 2004, 王灿龙 2006, 小野 2016, 甘时源 2017 など）。また、指示対象が話題要素となる場合には、近称の「这」が使用され、指示対象が話題要素として確立されていない場合には、遠称の「那」が使用されるという指摘もある（丁启阵 2003, 小野 2016 など）。丁启阵（2003）は、① 指示対象の事象が現実であるか、仮定もしくは未来のことであるか、②（評価的に）肯定的な意味が強い文脈に用いられるか、（評価的に）否定的な意味が強い文脈に用いられるか、③ 動詞「来（来る）」を伴っているか、「去（行く）」を伴っているか、などの要因を取り上げ、「这」と「那」の使用傾向を分析している。これらの影響要因による「这」「那」の使用傾向は、次の表 2.1 のようにまとめられる。

表 2.1. 先行研究による中国語の指示詞「这」「那」の使用傾向

指示詞の選択に影響する要因	这	那
話し手と指示対象との（時間・心理的な）距離が近い（+） ／距離が遠い（-）	+	-
指示詞と先行詞との距離が近い（+）／距離が遠い（-）	+	-
話題要素に当たる対象を指示する（+） ／非話題要素に当たる対象を指示する（-）	+	-
事実になっている事象を指示する（+） ／非現実的な（未来もしくは仮定の）事象を指示する（-）	+	-
（評価的に）肯定的な意味が強い文脈に用いられる（+） ／（評価的に）否定的な意味が強い文脈に用いられる（-）	+	-
動詞「来る」を伴う（+）／動詞「行く」を伴う（-）	+	-

（丁启阵 2003: 36 に基づき、筆者が整理）

しかし、これらの研究においては、外部指示・照応・認識用法の区別をせずに議論するものもあれば、指示詞の用法の分類が曖昧なものもあり、照応用法として扱われる用例のうち、本稿の分類に従うと外部指示用法もしくは認識用法に該当するものが混在している場合がある。また、名詞修飾型の指示詞のみならず、代名詞として用いられる「这」「那」や、場所を表す（日本語の「ここ・そこ・あそこ」に対応する）指示表現、動作・様態を表す（日本語の「こう・そう・ああ」「こんな・そんな・あんな」に対応する）指示表現など

様々な形式を混同して議論するものもある。純粋な照応用法における名詞修飾型の「这」「那」の区別については、十分な説明ができておらず、不明な点が多く残されている。

したがって、本節では、知識管理のアプローチが中国語の指示詞「这・那」の用法の説明に適用できるかどうかを検証し、照応用法（特に前方照応）における「这・那」の使い分けを整理することを試みる。2.2.1 節、2.2.2 節の内容を踏まえると、対話的な場面では、話し手の想定における、話し手・聞き手の指示対象に対する知識の把握状態に関して、以下表 2.2 に示す 4 種類の場面が予想される。

表 2.2. 話し手の想定における、話し手・聞き手の指示対象に対する知識の把握状態

話し手の想定における指示対象の同定可能性	a	b	c	d
話し手	○	×	○	×
聞き手	×	○	○	×

つまり、(a) 話し手は指示対象を同定できるが、聞き手はできないと話し手が想定する場合、(b) 話し手は指示対象を同定できないが、聞き手はできると話し手が想定する場合、(c) 話し手・聞き手が共に指示対象を同定できると話し手が想定する場合、(d) 話し手・聞き手が共に指示対象を同定できないと話し手が想定する場合、という 4 つである。以下では、それぞれにおける「这」と「那」の使用について考察する。

a. 話し手のみ指示対象を同定できると話し手が想定する場合

第 1 に、話し手は指示対象を同定できるが、聞き手は指示対象を同定できないと話し手が想定する場合において、次の (2.32) に示すように、「这」と「那」のいずれも用いられることがある。しかし、(2.32) における「这」と「那」が伝えるニュアンスには違いがある。遠称の「那」のほうからは、話し手の指示対象に対する（社会的や感情的な要因などによる）心理的な距離感が感じられ、話し手と指示対象とはさほど親しくないと推測されやすい。(2.32) では、人称代名詞やゼロ代名詞も用いられる。

(2.32) (話し手の学校に新しい先生が着任してきた。聞き手はそのこともその先生のこと
も全く知らない。)

我-们 学校 新 来 位 老师。
 Pro.1.SG-Pro.PL 学校 新しい 来る Clf.Hon 先生
 听-说 {这 (个) 人/ 那 (个) 人/ 他 /φ}
 聞く-言う Dem.P Clf 人 Dem.D Clf 人 Pro.3.SG.Masc
 之前 在 美国 留学, 今年 刚 回国。
 前に Loc アメリカ 留学する 今年 たったいま 帰国する

「うちの学校に新しい先生が来ました。{この人／その人／彼} は、前にアメリカに留学していて、今年 (海外から) 帰国したばかりだそうです」

次の (2.33) の場合も「这」と「那」の両方が容認されるが、「那」が使用される場合には、話し手が指示対象のイヌを疎遠に感じているという印象が生じる。なお、中国語では、人物以外を指す 3 人称代名詞 (「它 (tā) 」) の使用が一般的ではないため (Li & Thompson 1981: 134), 上記 (2.32) とは異なり 3 人称代名詞が用いられにくい。

(2.33) (話し手が隣の家のイヌについて話している。聞き手はその家のこともそのイヌのことも全く知らない。)

我 隔壁 养 了 只 狗,
Pro.1.SG 隣 飼う Pfv Clf イヌ
{这 狗 / 那 狗 / φ}

Dem.P イヌ Dem.D イヌ

一 到 晚上 就 叫, 特别 吵。
すると 着く 夜 すぐに 吠える とても うるさい

「隣の人がイヌを飼っているんだけど、{このイヌ／そのイヌ} が夜になると吠え出して、とてもうるさいんだよね」

上記 (2.32-33) においては、指示詞の先行詞が話し手により導入されているが、逆に聞き手により導入された場合も同様に「这」と「那」の両方が使用可能である。次の (2.34) では、指示詞の先行詞 (「老师 (先生) 」) は、聞き手 A により導入されているが、(2.32-33) の場合と同じように、「这」「那」のいずれも自然である。

(2.34) (A と B は友人同士であり、同じ学部先生である。先日、その学部で新しい先生が着任してきた。A はそのことを聞いたが、その先生のことを全く知らない。B はその先生に会ったことがある。)

A: 听-说 我-们 系 新 来 位 老师。
聞く-言う Pro.1.SG-Pro.PL 学部 新しく 来る Clf.Hon 先生
「うちの学部で新しい先生が入ってきたって？」

B: 嗯, 听-说 {这 (个) 人/ 那 (个) 人/ 他 / φ}
うん 聞く-言う Dem.P Clf 人 Dem.D Clf 人 Pro.3.SG.Masc

之前 在 美国 留学, 今年 刚 回国。

前 Loc アメリカ 留学する 今年 たったいま 帰国する

「うん、{この人／その人／彼} は、前にアメリカに留学していて、今年 (海外から) 帰国したばかりだそうです」

しかし、以下の (2.35) の場合、「那」の使用は容認可能であるが、「这」の使用は容認度が低下する。

- (2.35) (話し手と聞き手はルームメートである。話し手が普段より遅く帰ってきたので、聞き手はどうしたのかを聞く。話し手は答える)
- 刚才 有 个 女孩 迷路 了, 我 看
 たったいま ある Clf 女の子 道に迷う Pfv Pro.1.SG 見る
 {??这 姑娘 / 那 姑娘 / 她 } 行李
 Dem.P 女の子 Dem.D 女の子 Pro.3.SG.F 荷物
 挺 多 的, 就 给 送 到 车站 了.
 とても 多い DP だから Acc 送る 着く 駅 Pfv
 「さっき、女の子が道に迷っているのを見かけて、{??この子/その子/彼女}, 荷物が多かったから、駅まで送ってあげた」

(2.35) において、話し手はルームメートの聞き手に対して、なぜ遅く帰ってきたのかについて説明している。ここで、話し手は過去の出来事(指示対象の女の子が道に迷っているのを見て、助けてあげたということ)を説明するとき、その出来事に参与した女の子を「那」で指示している。「这」を用いると、容認性がやや低下する。このように、話し手が、過去自分が直接体験(直接見たり、参与したり)した出来事について述べる時、その出来事に関与した対象を指示する場合に遠称の「那」が優先され、近称の「这」が用いにくくなると考えられる。(2.35) では、3 人称代名詞の使用も可能である。一方、指示詞の現れた発話において、話し手が述べている出来事は自分が直接体験したことでなければ、それが過去の出来事でも、近称の「这」の使用が容認される。例えば、次の (2.36) の下線部の発話において、話し手は知り合いの先生が先週主任と口喧嘩したことについて話している。その出来事は伝聞に過ぎず、話し手自身が直接見たわけでもなく、参与したこともない。このような場合においては、上記 (2.32-34) と同様に、近称の「这」と遠称の「那」のいずれも使用可能である。

- (2.36) (話し手と聞き手は友人同士であり、異なる学校で働いている。話し手が自分の学校の先生について話している。聞き手はその先生のことを全く知らない。)
- 我-们 系 有 个 老师, 是 以前
 Pro.1.SG-Pro.PL 学部 ある Clf 先生 Cop 昔
 校长 亲自 请 来 的.
 校长 自ら 招聘する 来る DP
 听-说 {这 (个) 老师/ 那 (个) 老师/ 他 }
 聞く-言う Dem.P Clf 先生 Dem.D Clf 先生 Pro.3.SG.Masc

上礼拜 和 我们 主任 吵-起来 了，
 先週 と Pro.1.SG-Pro.PL 主任 口喧嘩する-しはじめる Pfv
 吵-得 可 凶 了。
 口喧嘩する-Man とても 甚だしい DP

「うちの学校に校長先生から直接招聘された先生がいるんだけど。{この先生／その先生／彼}，先週，うちの主任と口喧嘩していて，すごかったらしいよ」

したがって，指示詞の現れた発話の内容において，話し手は，過去における自分が直接体験（見たり，参与したり）した出来事について述べる場合には，「那」が選好され，「这」が容認されにくいと考えられる。

また，指示詞が使用された発話が過去ではなく，未来に起きる出来事を言い表す場合も同様である。つまり，話し手が未来に直接体験する出来事について述べる際，その事象に関わる対象を指示する場合，近称より遠称の「那」が好まれる。例えば，次の (2.37) では，話し手は発話時の翌日に友達を迎えに行くことについて述べている。これは話し手自身が未来に行くことであり，それに関わる対象，つまり話し手の友達を指示する際には，「这」よりは「那」のほうが自然である。その場合，3 人称代名詞も使用可能である。

(2.37) (話し手と聞き手は友人同士である。話し手が翌日，ある知人を迎えに行くことについて聞き手に話している。聞き手はその人のことを全く知らない。)

明天 我 得 去 车站 接 个
 明日 Pro.1.SG しなければならない 行く 駅 迎える Clf
 朋友，{??这 姑娘 / 那 姑娘 / 她 } 第一 次
 友達 Dem.P 女の子 Dem.D 女の子 Pro.3.SG.F 第一 回
 来 北京，人-生-地-不-熟 的。
 来る 北京 人-知らない-土-Neg-馴染む DP

「明日友達を迎えに，駅に行かないといけないんだけど，{??この子／その子／彼女}，北京に来るの初めてで，土地にも不案内ですし，知り合いもないから」

なお，過去の場合と同様に，指示詞が使用された発話において，話し手は自分が直接体験する（未来の）出来事ではなく，伝聞について述べる場合には，次の (2.38) に示すように，近称の「这」と遠称の「那」の両方が使用可能である。

(2.38) (話し手と聞き手は友人同士であり，異なる学校で働いている。話し手が自分の学校の先生について話している。聞き手はその先生のことを全く知らない。)

我-们 系 有 个 老师，是 以前
 Pro.1.SG-Pro.PL 学部 ある Clf 先生 Cop 昔

校長 亲自 请 来 的。
 校長 自ら 招聘する 来る DP
 听-说 {这 (个) 老师/那 (个) 老师/他 /φ}
 聞く-言う Dem.P Clf 先生 Dem.D Clf 先生 Pro.3.SG.Masc
 下个月 要 移民 去 美国 了……
 来月 もうじき 移民する 行く アメリカ Pfv
 「うちの学校に校長先生から直接招聘された先生がいるんだけど。{この先生/その先生/彼}, 来月アメリカに移民するらしいよ……」

以上をまとめると、話し手は指示対象を同定可能であるが聞き手は同定できないと、話し手が想定する場合、中国語では「这」と「那」の両方が用いられる場合が多い。その場合、「那」の使用は、話し手の指示対象に対する(感情的・社会的な要因などによる)心理的な距離感を表すことができる。しかし、指示詞が使用された発話において、話し手は発話時より過去・未来に起きる、自分自身が直接体験する出来事について述べる際、その出来事に関する対象を指示する場合、遠称の「那」が選好され、近称の「这」は用いられにくい。つまり、遠称指示詞「那」は、指示対象が(発話時)現在の発話場面ではなく、過去や未来の時点との結びつきが強いことをマークする機能を持つと考えられる。より具体的には、話し手が過去・未来の時点で直接体験する出来事について述べる場合、その出来事に関わる対象は(発話時)今現在の発話場面より、過去、または未来の特定の時点とは強いつながりがあると考えられる。上記(2.35), (2.37)の場合、指示詞が使用された発話が言い表す出来事および指示詞の指示対象が、現在の発話場面とは直接結びつかずに、過去や未来の時点との結びつきが強いいため、遠称指示詞「那」が好まれるのであると説明することができる。一方、近称指示詞「这」はこの機能を持たないため、容認されにくくなると考えられる。それに対して、近称指示詞「这」が容認される(2.33)では、話し手が指示対象のイヌの現在継続中の状態について述べているため、(2.35)と(2.37)のような場面よりも、現在の発話場面との結びつきが強いと考えられる。また、(2.32), (2.34), (2.36), (2.38)のように、話し手が指示対象に関する伝聞について述べる場合、それが過去の出来事であっても、未来の出来事であっても、伝聞として話し手の知識になっている。そのため、話し手の発話時点における知識状態に関係しているという点で、過去や未来ではなく、現在の発話場面と結びついていると考えられる。

したがって、話し手は指示対象を同定できるが、聞き手は同定できないと話し手が想定する場合において、近称・遠称指示詞の選択は、話し手と指示対象との心理的距離から影響を受けるだけではなく、指示詞が使用された発話において、述べられる事象および指示詞の指示対象が(発話時)現在の発話場面と結びついているのか、(発話時)現在より過去・未来の時点と強く結びついているのかにも関係している。前者の場合、近称の「这」と遠称の「那」のいずれも容認されるが、後者の場合には遠称の「那」が優先される。

b. 聞き手のみ指示対象を同定できると話し手が想定する場合

第 2 に、話し手自身は指示対象を同定できないが、聞き手は指示対象を同定できると話し手が想定する場合に関しては、基本的には「那」が用いられ、「这」の使用は許容されないと考えられる。次の (2.39) では、A がカバンをなくしたことをサービスカウンターの従業員 B に話している。話し手 B が聞き手 A により導入されたカバンに対して、全く知らず、同定できないと想定される。このような場合においては、「那」のみが容認され、「这」は用いられない。また、指示詞の先行詞が話し手自身により会話に導入された場合も同じく、「那」のみが容認される。次の (2.40) では、話し手が聞き手の部門に新人が入ってきたと聞いたが、その人に対して全く知らず、指示対象を同定できないと考えられる。そこで、(2.39) の場面と同じように、遠称の「那」しか用いられない。(2.40) では、指示詞の代わりにゼロ代名詞を用いることもできる。

(2.39) (A が映画館でカバンをなくしたあと、サービスカウンターに行き、その従業員 B に言う)

A: 我 包 没 了
 Pro.1.SG カバン ない Pfv
 「私のカバンがなくなっていました」

B: {*这/那} 包 什么 颜色?
 Dem.P/Dem.D カバン なに 色
 「{*この/その} カバンはなに色ですか?」

(2.40) (A と B は友人同士であり、同じ会社の異なる部門に属している。B の部門は手が足りないためいつも忙しい。A もそのことを知っている。A が最近 B の部門にやっと新人が入ってきたと他の同僚から聞いて、その新人のことについて、B に聞く)

A: 听-说 你 那儿 进 新人 了?
 聞く-言う Pro.2.SG Dem.D 入る 新人 Pfv
 {*这 人/那 人/φ} 怎么样, 能 帮上忙 吗?
 Dem.P 人/Dem.D 人 どう できる 役立てる DP
 「あなたのところに新人が入ってきたって?{*この/その} 人どう, 役に立ちそう?」

しかし、話し手にとって指示対象の同定ができるか否かは問題にはならない例外的な場面がある。既に先行文脈で確立された指示対象の属性情報だけに基づいて何らかのコメントを述べる場合には、近称の「这」も許容される。例えば、次の (2.41) における A は、自分の同僚に頻繁に遅刻や早退をする人がいるが、その人物は上司に叱られたことがないと述べている。話し手 B は、A の発話を受け、その人が遅刻や早退をしても全く叱られない

のはコネがあるからだろうとコメントしており、指示対象に対する（入社の際に正当でない手段を使ったなど）軽蔑的なニュアンスを伝えている。この場合、話し手が指示対象を同定できるかどうかは問題とはならず、聞き手の先行発話に提示された「頻繁に遅刻や早退をしているが、1度も上司に叱られたことがない」という指示対象の属性情報のみが指示詞の使用に関係している。話し手はその属性情報に基づいて、指示対象に対する自分の（否定的な）評価を述べている。このような場合においては、「这」が用いられるようになる。したがって、聞き手のみ指示対象を同定できると話し手が想定する場合、「这」の使用は(2.41)に示すような、話し手の何らかの感嘆や評価を表す場合に限ると考えられるため、情意性を持つ有標的用法の1種として見なすことができる。

(2.41) (AとBは友人同士であり、異なる会社で働いている。Aが自分のある同僚について話している。Bはその同僚のことを知らない。)

A: 我 一 同事, 经常 迟到 早退,

Pro.1.SG ある 同僚 しょっちゅう 遅刻する 早退する

但是 领导 从来 不 说 他.

しかし 上司 いつも Neg 言う Pro.3.SG.Masc

「ある同僚が頻繁に遅刻や早退をするんだけど、1度も上司に叱られたことがないんだよね」

B: {这/那} 人 是 关系户⁵ 吧?

Dem.P/Dem.D 人 Cop コネのある人 DP

「{この/その}人、コネでもつかって入ってきたんじゃない?」

c. すべての談話参加者が指示対象を同定できると話し手が想定する場合

第3に、すべての談話参加者が指示対象を同定できると話し手が想定する場合、中国語は日本語・英語の場合と同様に、遠称指示詞（那）が一般的に用いられる。例えば、次の(2.42)に示すように、話し手は聞き手との共通の知人を指示詞で指示する場合、遠称の「那」しか用いられない。また、(2.42)では、3人称代名詞も用いられる。

(2.42) (AとBは同じ会社の友人であり、かつて「小王(王さん)」という人と同じイベントに参加したことがある。)

A: 你 还 记得 小王 吗?

Pro.2.SG まだ 覚える 王さん DP

「王さんのことまだ覚えている?」

5. 中国語では、「关系户(コネのある人)」という言葉はネガティブな含みを表す場合が多い。

B: 嗯, {??这 姑娘 / 那 姑娘 / 她 } 人 很 好
 DP Dem.P 女の子 Dem.D 女の子 Pro.3.SG.F 人 とても よい
 「ええ, {??この子／あの子／彼女} はいい人だよね」

(2.42) は, 先行詞が聞き手により発話に導入された場合であるが, 以下の (2.43) に示すように, 話し手自身により導入された場合も同じである. すなわち, 遠称指示詞もしくは人称代名詞が用いられるが, 近称の「这」は用いられにくい.

(2.43) (A と B は同じ会社の友人であり, かつて「小王 (王さん)」という人と同じイベントに参加したことがある.)

A: 你 还 记得 小王 吗?
 Pro.2.SG まだ 覚える 王さん DP
 「王さんのことまだ覚えている？」

B: 嗯.
 DP
 「ええ」

A: {??这 姑娘 / 那 姑娘 / 她 } 今年 毕业 了,
 Dem.P 女の子 Dem.D 女の子 Pro.3.SG.F 今年 卒業する Pfv
 说 想 来 我-们 这儿 就业.
 言う したい 来る Pro.1.SG-Pro.PL Dem.P 就職する
 「{??この子／あの子／彼女} は今年卒業で, うちの会社に就職したいって言ったの」

しかし, すべての談話参加者が指示対象を同定できるが, 聞き手はそのことを知らないとい話し手が想定する場合, 近称の「这」と遠称の「那」の両方が用いられる. 例えば, 次の (2.44) では, A は自分の会社に入ってきた新人について話している. 話し手 B が指示対象の「王红」とは同じ大学の同級生で, 「王红」を知っているが, 聞き手はそのことを知らない. このように, 話し手と聞き手が共に指示対象を同定できるが, 話し手も指示対象を同定できるということを, 聞き手がよく知らないまたは確定できないと話し手が想定する場合, 「这」「那」のいずれも容認され, 両者の置き換えが可能である.

(2.44) (A と B は友人同士であり, 異なる会社で働いている. A は, B が大連外国語大学出身であることを知らない.)

A: 我-们 公司 新 来 个 女孩儿,
 Pro.1.SG-Pro.PL 会社 新しい 来る Clf 女の子

是 大外 [=大连外国语大学] 毕业 的, 叫 王红.
Cop 大連外大 [=大連外国語大学] 卒業する DP 呼ぶ 王紅

「うちの会社に新人の女の子が入ってきて、大連外大出身で、王紅っていうの」

B: 啊, {这/那} 姑娘 我 认识, 和 我
DP Dem.P/Dem.D 女の子 Pro.1.SG 知る と Pro.1.SG
同年, 也 是 英语系-的.
同い年 も Cop 英語学部-Nomz

「あ、{この/その} 子なら私知ってる、私と同い年で、同じく英語学部の人だったの」

なお、「b. 聞き手のみ指示対象を同定できると話し手が想定する場合」と同じように((2.41) 参照), すべての談話参加者が指示対象を同定できる, なおかつ, すべての談話参加者がそのことを知っている, と話し手が想定する場合でも, 指示対象の同定とは関係なく, 話し手が先行発話で確立された指示対象に関する属性情報だけを問題にして, それに対する自分の感嘆・評価を述べる際には, 近称の「这」が許容され, つまり, 情意的に用いられることができる. 例えば, 次の (2.45) では, 女性友人同士の A, B, C が C の彼氏について会話している. A が C の彼氏が他の女性と親しそうに話しているのを見たことを B と C に言っている. B, つまり話し手がその話を受け, 指示対象, つまり C の彼氏に対して, 「頼りにはならない」などと否定的な評価をしている. 一般的には, 談話参加者の 3 人が共に指示対象をよく知っているため, 近称の「这」が用いられず, 遠称の「那」で指示するのが自然であるが, (2.45) のように, 話し手が先行発話に提示された指示対象の情報に基づいてコメントする場合, 近称の「这」も容認されるようになる.

(2.45) (A, B, C は全員女性であり, 友人関係にある. C には交際中の彼氏がおり, A と B はその人のことを知っている. A が前日その彼が他の女性と親しそうに話しているところを見たことを B と C に話す)

A: 我 亲-眼 看见 的, 他_i [= C の彼氏] 和
Pro.1.SG 自ら-目 見かける DP Pro.3.SG.Masc と
那 女-的 有-说-有-笑 的, 特别 殷勤.
Dem.D 女-Nomz ある-話す-ある-笑う DP とても 積極的だ

「この目で見たの. 彼がその女と楽しそうに話したり笑ったりして, とても積極的だったの」

(B が A の話を聞いて, しばらく考えて, C に言う)

B: 看来, 这 (个) 人_i 很 不 可靠,
どうやら Dem.P Clf 人 とても Neg 頼りになる

吃-着-碗-里-的 -看-着-锅-里-的.
 食べる-Dur-ボウル-中-Nomz -見る-Dur-なべ-中-Nomz
 「どうも、この人信用できないね、碗にある物を食べながら鍋の中をうかがっ
 ているようなもんじゃない」
 你 [= C] 可 得 想-好 了.
 Pro.2.SG ぜひ しなければならない 考える-よく DP
 「あなた [= C] はちゃんと考えなおさないと……」

しかし、話し手の感嘆・評価につながる、情意的な内容であれば、近称の「这」がすべて容認されるわけではない。上述のように、「这」が容認されるのは、用いられた発話が指示対象の同定可能性とは関係なく、先行発話で明示された、指示対象に関する属性情報だけに基づいたものでなければならない。例えば、上記 (2.42) における指示詞は「人很好 (いい人だ)」というような評価的な内容に用いられているにもかかわらず、「这」の使用が容認されない。(2.42) における「人很好 (いい人だ)」という評価は話し手が指示対象を同定できるということを前提としているためである。

なお、遠称の「那」は日本語のアと同様、すべての談話参加者が知っている対象を、先行詞なしで指示することができる。つまり、照応用法だけではなく、認識用法にも用いられるということである。対して、上記 (2.45) に示すような、情意的な「这」は先行詞を必要とし、認識用法には用いられない。

d. すべての談話参加者が指示対象を同定できないと話し手が想定する場合

最後に、すべての談話参加者が指示対象を同定できないと話し手が想定する場合、「这」の使用が容認されにくく、「那」のほうが一般的に用いられると考えられる。例えば、次の (2.46) では、話し手 B と聞き手 A がもうひとりの学生を待っているが、2 人ともその人のことを全く知らず、指示対象を同定できない。この場合、「那」のみが使用され、「这」は使用しにくい。

(2.46) (A と B は同じクラスの友人であり、昨日先生に研究室の掃除を頼まれた。先生が昨日もうひとり、他のクラスの学生にも頼んでいると 2 人に伝えた。2 人はその人のことを全く知らない。A と B が研究室でその人を待ちながら会話している。)

A: 我-们 现在 就 开始 吗?

Pro.1.SG-Pro.PL いま すぐに 始める DP

「いますぐ始めますか?」

B: 不-是 还 有 一 个 人 吗?

Neg-Cop まだ ある 一 Clf 人 DP

{??这/那} 人_i 来 了 再 一 起 弄 吧.

Dem.P/Dem.D 人 来 る Pfv また 一 緒に やる DP

「もうひとり来んですよね？{??この/その} 人が来てから一緒にやりましょ
う」

上記 (2.46) では、指示詞が話し手自身により導入された先行詞と照応しているが、次の (2.47) に示すように、逆に先行詞（「一个人 (ひとり)」）が聞き手により導入された場合も同じように、遠称の「那」のほうが自然に用いられ、「这」は容認されにくい。

(2.47) (A と B は同じクラスの友人であり、昨日先生に研究室の掃除を頼まれた。先生が昨日もうひとり、他のクラスの学生にも頼んでいると 2 人に伝えた。2 人はその人のことを全く知らない。A と B が研究室でその人を待ちながら会話している。)

A: 我-们 现在 就 开始 吗?

Pro.1.SG-Pro.PL いま すぐに 始める DP

「いますぐ始めますか？」

B: 不-是 还 有 一 个 人_i 吗?

Neg-Cop まだ ある 一 Clf 人 DP

「もうひとり来んですよね？」

A: 是 啊, {??这/那} 人_i 什么 时候 到 啊?

Cop DP Dem.P/Dem.D 人 なに とき 着く DP

「そうですね、{??この/その} ひとはいつ来るのかな？」

しかし、すべての談話参加者が指示対象を同定できないと話し手が想定する場合でも、上記 (2.41), (2.45) のような場面と似ていて、指示対象の同定可能性とは関係なく、既に先行発話で確立された指示対象の属性情報だけを問題とし、話し手の指示対象に対する評価や感嘆などを表すのに「这」を用いることが可能である。例えば、次の (2.48) では、A₂ の発話は指示対象の同定可能性とは関係なく、先行文脈で確立された「来るはずである」という属性情報および「まだ来ていない」という事実だけが関係する。その場合、話し手はそれらの情報を受けて、指示対象に対して「本当に来るんですか」といらだつ際には、「这」を用いることができる。

(2.48) (A と B は同じクラスの友人であり、昨日先生に研究室の掃除を頼まれた。先生が昨日もうひとり、他のクラスの学生にも頼んでいると 2 人に伝え。2 人はその人のことを全く知らない。A と B が研究室でその人を待ちながら会話している。)

A₁: 我-们 现在 就 开始 吗?

Pro.1.SG-Pro.PL いま すぐに 始める DP

「いますぐ始めますか？」

B: 不-是 还 有 一 个 人 吗?

Neg-Cop まだ ある 一 Clf 人 DP

{??这/那} 人 来 了 再 一起 弄 吧

Dem.P/Dem.D 人 来る Pfv また 一緒に やる DP

「もうひとり来んですよ？{この/その} 人が来てから一緒にやりましょ
う」

(しばらく待っても、その人が来ない.)

A₂: {这/那} 人 到底 来 不 来 啊!

Dem.P/Dem.D 人 いったい 来る Neg 来る DP

「{この/その} 人は本当に来るんですか？」

以上、次の (2.49) に示す 5 種類の場面における「这」と「那」の照応用法を整理してきた。

- (2.49) a. 話し手は指示対象を同定できるが、聞き手は指示対象を同定できないと話し手が想定する場合
- b. 話し手は指示対象を同定できないが、聞き手は指示対象を同定できると話し手が想定する場合
- c. すべての談話参加者が指示対象を同定できる、なおかつ、すべての談話参加者がそのことを知っているとして話し手が想定する場合
- c'. すべての談話参加者が指示対象を同定できるが、聞き手はそのことをよく知らないまたは確定できないとして話し手が想定する場合
- d. すべての談話参加者が指示対象を同定できないとして話し手が想定する場合

すなわち、(a) の場面において、一般的には「这」「那」のいずれも用いられるが、遠称の「那」は心理的に離れた対象や、話し手が過去・未来に直接体験する出来事に関与する対象を指示する際に選好される。また、(c') の場合も、「这」「那」の両方が用いられ、両者の置き換えが可能である。それ以外の場合、つまり、(b, c, d) に相当する場面においては、一般的には「那」が用いられ、「这」は容認されにくい。ただし、指示対象の同定とは関係なく、話し手が先行発話に提示された指示対象の属性情報に基づいて何らかの感嘆や評価を述べる場合、例外的に「这」が容認されるようになる。このような場合、「这」を情意的指示詞と見なすことができる。

したがって、前方照応において、対話的な場面における「这」と「那」の使い分けは、以下の (2.50) のようにまとめられる。

- (2.50) i. 話し手は指示対象を同定できるが、聞き手は指示対象を同定できないと話し手が想定する場合、一般に、「这」「那」のいずれも用いられる。後者は話し手と指示対象との心理的距離や（発話する現在ではなく）過去・未来の時点との強い結びつきをマークする機能を持つ。
- ii. すべての談話参加者が指示対象を同定できるが、聞き手はそのことを知らないまたは確定できないと話し手が想定する場合、「这」「那」が用いられ、両者の置き換えが可能である。
- iii. 上記 (i), (ii) の条件が満たされていない場合、「那」しか用いられず、「这」は一般的には用いられない。ただし、指示対象の同定可能性とは関係なく、先行発話において、既に確立された指示対象の属性情報だけに基づいて何らかの感嘆・評価を述べる場合、情意的な「这」を用いることができる。

つまり、近称の「这」が選好されるのは、話し手のみが指示対象を同定できると話し手が想定する場合か、または、すべての談話参加者が指示対象を同定できるが、聞き手がそのことをよく知らないとして話し手が想定する場合である。言い換えると、話し手が指示対象に関する知識に対して、何らかの意味で聞き手より優位に立つと話し手が想定する場合においては、近称の「这」が容認される。その条件が満たされていない場合、無標的な「这」は用いられにくく（ただし、情意的な使用が容認されることがある）、遠称の「那」が用いられる。

このように、中国語における近称・遠称指示詞の選択は日英語の場合と同様に談話参加者の知識管理の観点から捉え直すことができる。日英語の指示詞と同じように、知識管理に基づく説明は、非対話的な文章においては適応できない。新聞、物語など、聞き手の代わりに読み手が相手として想定されるような書き言葉的な文脈では、近称の「这」が一般的であり、使用頻度が「那」と比べて圧倒的に高いと指摘されている（楊玉玲 2011: 201, 劉 2012 など）。この点に関しては、日本語と英語の指示詞も類似している（2.2.1 節, 2.2.2 節参照）。

2.2.4. 連想照応・束縛変項について

前方照応に関して、これまでは指示詞が先行する名詞と照応し、その名詞と同一指示を行うような典型的なものについて説明してきたが、やや特殊な照応現象も一部の先行研究により指摘されている。以下では、連想照応と束縛変項 (bound variable) という 2 つの現象を取り上げ、それぞれにおける日中英指示詞の使用について説明する。

2.2.4.1. 連想照応

日本語において、照応的なソが必ずしも明確な先行詞を持つとは限らず、先行文脈の言語的要素から推測されたものと照応する場合も観察される。加藤 (2004) では、そのよう

な用法を「連想照応」と呼ばれている。例えば、次の (2.51) においては、「その CD」の先行詞に該当する名詞が明示されていないが、先行発話からそれが「毎日通学のときに聞いている、話し手が気に入っているバンドの CD」であることが分かる。

(2.51) 最近気に入っているバンドがあつて毎日聞きながら通学しています。その CDはもう百回以上聞きました。

(加藤 2004: 172, 下線は筆者による)

つまり、聞き手は「照応詞が現れるまでの言語的文脈の情報から連想的に先行詞に相当する内容を理解する (加藤 2004: 173)」ことができる。そこで、指示詞「その」は連想された先行詞と照応し、同一指示を行っていると考えられる。そして、連想の「材料」となる文脈情報および連想された先行詞のあいだには「強く関わりを持つ要素」でなければならない (加藤 2004: 172-174)。例えば、次の (2.52) に示すように、先行発話の衝突事故から「犯人」に連想して照応的な「その」を用いることができない。なぜなら、一般常識として衝突事故にはかならずしも犯人が存在するとは限らないからである。

(2.52) 本日未明、北陸自動車道でバスとトラックの衝突事故があつた。しかし、*その犯人はまだ捕まっていない。

(加藤 2004: 173, 下線は筆者による)

英語においても似たよう照応現象が見られる (坂原 1996: 43-44) が、次の (2.53) に示すように、定冠詞が用いられ、限定詞的な *this/that* の使用は許容されない (坂原 1996: 47)。

(2.53) a. I drove to London at full speed. I wore out the car in this trip.
b. I drove to London at full speed. *I wore out {this/that} car in this trip.

(坂原 1996: 47, 下線は筆者による)

中国語の場合、遠称指示詞「那」が日本語のソと同様に連想照応に用いられることができる (劉羈 2014)。例えば、次の (2.54) において、指示詞は話し手のスタイリストを指示しているが、先行詞と見なされる名詞が見当たらない。指示詞の指示対象は会話の現場に存在せず、聞き手もその人物を全く知らないため、外部指示用法や認識用法とは考えられない。聞き手の指示対象の解釈は話し手の「去剪头发 (髪切りに行って)」という発話に依存している。上述の日本語の例 (2.51) と同じように、(2.54) では、「髪を切る」ということには必ず「髪を切る人」が存在するという推測ができるため、「髪切りに行って」から「髪を切る人」や「スタイリスト」などといった先行詞が連想され、指示詞がその先行詞と照応し、同一指示を行っていると考えられる。

- (2.54) 我 昨天 去 剪 头发，
 Pro.1.SG 昨日 行く 切る 髪
 {??这/那} 个 理发师 一直 让 我
 Dem.P/Dem.D Clf スタイリスト ずっと Acc Pro.1.SG
 买 卡， 烦-死 了！
 買う カード うんざりする-死ぬ DP
 「昨日髪切りに行って，{??この/その} スタイリストさんがずっと（会員）カードを買わせようとしていて，うんざりだったんだよ」

このような用法においては，遠称の「那」が一般的に用いられ，近称の「这」は容認されにくくなる（劉羈 2014 参照）。なお，(2.54) では，指示詞の指示対象に対して，話し手のみが同定可能であり，聞き手が全く知らないと想定されるため，典型的な前方照応においては，「这」「那」のいずれも容認される（2.2.3 節参照）が，ここでは「这」が用いられにくい。その理由に関して，劉羈（2014:95）は，照応的な「这」の使用には明確な先行詞が必要であると指摘している。この性質は 2.2.3 節で言及した，制限的・情意的な「这」にも見られる。つまり，有標・無標にも関係なく，近称指示詞「这」の使用は，一般的には文脈もしくは会話の現場の状況などによる指示対象の活性化が必要とされると考えられる。また，(2.54) の場合においては，人称代名詞やゼロ代名詞の使用も容認されない。

まとめると，日中英 3 言語のうち，日本語のソ系列および中国語の遠称指示詞「那」が連想照応に用いられるが，英語の *this/that* はこの用法を持たず，定冠詞 *the* を用いることになる。

2.2.4.2. 束縛変項

束縛変項の用法では，照応表現の先行詞が数量表現，*wh* 疑問詞もしくは仮定のものであり，指示対象が特定のものに決まっているのではなく，先行詞の解釈に束縛された変数として解釈することができる。例えば，次の (2.55) における *him* は束縛変項の解釈を受けている。

- (2.55) Someone brought a knife with him.
 (Higginbotham 1980: 679, 下線は筆者による)

英語では，(2.55) に示すように代名詞が束縛変項に用いられることが多いが，次の (2.56) のように，指示詞 *that* も束縛変項の解釈を受けることがある。

- (2.56) Every logician was walking with a boy near that logician's house.
 (Evans 1977: 491, 下線は筆者による)

日本語の場合，一般的には束縛変項として用いられるのがソ系列指示詞であると言われて
いる (上山 2000, Hoji et al. 2000, Hoji et al. 2003, Ohima & McCready 2017: 832 など). 次
の (2.57) における「その県」は束縛変項の例である.

(2.57) どの県の職員がその県の条例に一番通じているか、競い合ってみましょう。
(上山 2000: 174)

一方，中国語では，「这」「那」の両方が容認される ((2.58-68) 参照). また，指示詞の他に，
人称代名詞の使用も自然である.

(2.58) 如果 一 个 人 在 纽约，
もし 一 Clf 人 Loc ニューヨーク
{这 个 人/ 那 个 人/ 他 / 她 }
Dem.P Clf 人 Dem.D Clf 人 Pro.3.SG.Masc Pro.3.SG.F
就 不-可能 同时 在 东京.
すると Neg-可能である 同時に Loc 東京
「もしある人がニューヨークにいれば，{この人/その人/彼/彼女} が同時に東
京にいるのは不可能である」

(2.59) 在 这 支 队伍 里，每 个 人 都 有
Loc Dem.P. Clf チーム なか 每 Clf 人 すべて ある
{这 个 人/ 那 个 人/ 他 / 她 }
Dem.P Clf 人 Dem.D Clf 人 Pro.3.SG.Masc Pro.3.SG.F
应该 承担-的 责任.
すべき 担う-Attr 責任
「このチームの中では，すべての人には {この人/その人/彼/彼女} が担うべ
き責任がある」

(2.60) 每 家 公司 都 有 {这/那} 家 公司 的 规矩.
每 Clf 会社 すべて ある Dem.P/Dem.D Clf 会社 の 規則
「すべての会社には {この/その} 会社の規則がある」

2.2.5. まとめ

本節では，無標的な照応用法における日中英指示詞の用法について概観した. この 3 言
語においては，近称指示詞 (コ・this・这) のみ前方照応にも後方照応にも用いられ，非近
称 (ソ/ア・that・那) は前方照応にしか用いられない. 日中英における照応的指示詞の使
い分けは，対話的な場面に限り，談話参加者の知識管理の観点から説明可能である. 談話
参加者が指示対象に対する知識の把握状態に関しては，以下 (2.61) に示す 5 つの場面が

考えられ、日中英の無標的指示詞が使用可能な場面は次の表 2.3 のようにまとめられる。

- (2.61) a. 話し手は指示対象を同定できるが、聞き手は指示対象を同定できないと話し手が想定する場合
 b. 話し手は指示対象を同定できないが、聞き手は指示対象を同定できると話し手が想定する場合
 c. すべての談話参加者が指示対象を同定できる、なおかつ、すべての談話参加者がそのことを知っているとして話し手が想定する場合
 c'. すべての談話参加者が指示対象を同定できるが、聞き手はそのことをよく知らないまたは確定できないとして話し手が想定する場合
 d. すべての談話参加者が指示対象を同定できないとして話し手が想定する場合

((2.49) 再掲)

表 2.3. (2.61) の各場面における日中英無標的指示詞の対応関係

(2.61)	a	b	c	c'	d
日本語	ソ	ソ	ア	ソ	ソ
英語	this/these, that/those	this/these, that/those	that/those	this/these, that/those	that/those
中国語	这, 那	那	那	这, 那	那

ただし、2.2.1 節および 2.2.3 節で説明したように、話し手の感嘆・評価につながる、情意的な発話に限り、日本語のコが (2.61a) に相当する場面で容認される場合があり、中国語の「这」が (2.61b, c, d) に相当する場面に容認される場合がある。つまり、これらは情意性を持つ有標的指示詞と見なすことができる。しかし、この情意的な性質は対話的な場面に限られ、新聞記事など非対話的な書き言葉の文脈においては見られない。新聞記事など非対話的な書き言葉の文脈では、日中英 3 言語に共通して、近称指示詞 (コ・this・这) の使用が一般的である。なお、日本語の「その」が「先行詞 + の」の代わりに用いられるような、代行指示という用法が見られるが、英語と中国語の指示詞 (this/that・这/那) にはこの用法が見られない。

最後に、2.2.4 節では、やや特殊な照応用法として、連想照応・束縛変項という 2 つの用法を取り上げた。連想照応では、指示詞の先行詞が文脈に明示された表現ではなく、推測されたものである。日本語のソ、中国語の「那」はこの用法に用いられることができるが、英語の場合、指示詞 this/that の使用は容認されず、定冠詞 the が用いられる。束縛変項では、指示詞が先行詞と決まった対象を同一指示しているのではなく、先行詞に束縛された変数として解釈される。一般的には、日本語ではソ、英語では that、中国語では、「这」「那」の両方が用いられる。

2.3. 認識用法

第 1 章で説明したように、日中英 3 言語においては、認識用法に用いられるのは遠称指示詞、すなわち、日本語ではア系列、英語では *that*、中国語では「那」のみである。ただし、「年」「日」など時間的表現と共起する際に、中国語の「那」が日本語と英語の指示詞とは異なり、必ずしも談話参加者のあいだによく知られている、特定の時点を指すとは限らず、ただ単に「(過去の) ある年/月/日 (等々)」と解釈されることがある (呂叔湘 1985: 204, 木村 1997: 202-203)。次の (2.62) における「那」はその例である。

(2.62) 辛楣 [...], 看见 董斜川 在 写, 忙 说:
辛楣 見かける 董斜川 Prog 書く 急いで 言う
“斜川, 你 在 干 什么?”
斜川 Pro.2.SG Prog やる なに
「辛楣は [...] 董斜川が書いてるのを見て、せかせかと、「斜川、きみは何して
る？」

董斜川 [...] 道：“我 在 写 诗。”
董斜川 言う Pro.1.SG. Prog 書く 詩
「董斜川は [...], 「ぼくは詩を書いている」

辛楣 [...] 道：“快 多 写 几 首[...]
辛楣 言う 速く 多く 書く いくつ Clf
我 那 位 朋友 苏-小姐, 新-诗 做-得
Pro.1.SG Dem.D Clf 友達 蘇-さん.F 新しい-詩 つくる-Man
非常 好, 对 旧-诗 也 很 能 欣赏。
とても よい Dat 古い-詩 も とても できる 鑑賞する
回头 把 你 的 诗 给 她 看。”
あとで Acc Pro.2.SG の 詩 あげる Pro.2.SG.F 見る

「辛楣は [...], 「何首でもせいぜいたくさん書いてくれ。[...] 例の友達の蘇さんは、近代詩がすごくうまくて、古典詩にも中々鑑賞眼がある。あとできみの詩をあの人に見せてやろう」

斜川 [...] 说：“新-诗 跟 旧-诗 不-能 比!
斜川 言う 新しい-詩 と 古い-詩 Neg-できる 比べる
我 那 年 在 庐山 跟 [...] 陈散原-先生
Pro.1.SG Dem.D 年 Loc 廬山 と 陳散原-さん.Masc

聊天, 偶尔 谈-起 白话-诗 [...]"
雑談する たまに 話す-始める 口語-詩

「斜川は [...], 「近代詩は古典詩と比較にならないさ! ぼくは先年廬山で, [...]
陳散原老先生 [...] としゃべってて、偶然口語の詩のことになったら、[...]」

(钱钟书 2017 《围城》 ; 翻訳は錢鍾書 (著)

荒井健・中島長文・中島もどり (訳) 1988 『結婚狂詩曲 (上)』による)

(2.62) では、話し手(「董斜川」)は近代詩と古典詩の話題について、前に廬山で陳散原という人と話したことがあると聞き手(「辛楣」)に言っている。聞き手はそのこともそのことの発生した時間も知らない。ここの「那年」は先行詞もなく、聞き手にも知られている時間と考えられにくく、ただ単に「過去のある年」, 「先年」と解釈するのが自然である。このような解釈は過去の出来事を述べる場合にしかできない (木村 1997: 203-204)。「那」が未来の時間を指示する場合、指示対象が先行文脈で提示された時間か談話参加者のあいだに知られている、特定の時間でなければならない。例えば、次の (2.63) における「那天」は「(未来の) ある日」と解釈することができない。

(2.63) 那 天不-远 了
Dem.D 日 Neg-遠い DP

「その/あの日はもう遠くはない」

しかし、上記 (2.62) における「那年 (先年)」のような用法において、「那」は不特定の時間を指示している点で、指示詞とは言いがたく、むしろ英語の冠詞と似たような働きを果たしていると考えられる (cf. Li & Thompson 1981: 131-132).

3. 日本語の指示詞「この」「その」「あの」の有標的用法

本章から第 5 章においては、日中英指示詞の有標的用法について考察する。本章では、日本語の指示詞「この」「その」「あの」の有標的用法を考察する。まず、3.1 節で、「この」「その」「あの」の有標的用法に関する先行研究について説明する。次の 3.2 節では、第 1 章で述べた分類法に従い、外部指示・照応・認識用法の 3 つに分けて、有標的に用いられる日本語の指示詞を考察する。それぞれ 3.2.1 節、3.2.2 節、3.2.3 節で詳しく説明する。

3.1. 先行研究

日本語の指示詞に関する先行研究は、主に無標的用法に重点を置いて行われてきたが、有標的指示詞に関連する用法を議論するものも見られる。例えば、庵 (1994, 1995a, 2002) は新聞記事の言語データを対象に、固有名詞と共起する「この」「その」の用法に言及しており、Sawada & Sawada (2014, 2017) は会話における非制限的な「この」「その」「あの」の意味を検討している。また、井上 (1988) や Naruoka (2006) は、「この女!」や「あのバカ!」のような話し手の感情・感嘆を表す指示詞の用法に言及している。以下では、先行研究で議論された指示詞の有標的用法について説明する。

3.1.1. 先行研究における非制限的指示詞

3.1.1.1. Sawada & Sawada (2014, 2017) による「モーダル指示詞」

Sawada & Sawada (2014, 2017) は、固有名詞や人称代名詞と共起する指示詞の用法に注目し、モーダル指示詞 (modal affective demonstratives) という概念を提案した。Sawada & Sawada (2014, 2017) によれば、以下の (3.1) における「あの」は、話し手の想定においては、「フェデラーが負ける」という命題が真になる可能性が低いということを表すと同時に、話し手の驚きの感情を伝えている。

(3.1) あのフェデラーが負けた。

(Sawada & Sawada 2014: 181, 表記改変, 下線は筆者による)

以下の (3.2) における「この」、(3.3) における「その」の用法もモーダル指示詞に該当し、同じ機能を持つという (Sawada & Sawada 2014)。

(3.2) この {私/?太郎/?あなた} が負けた。 (ibid.: 183)

(3.3) {太郎/ぼく/あなた} はとても強い選手だ。その {太郎/ぼく/あなた} が負けた。 (ibid.)

なお、Sawada & Sawada (2017) では、固有名詞と共起する「あの」の用法を 2 つのタイプに分けられている。ひとつは上記説明したモーダル指示詞の用法、もうひとつは有名な

対象を指示する用法であり，両者の解釈に曖昧性が生じることがあるという (Sawada & Sawada 2017: 144-145).

上記 (3.1-3) における指示詞は本研究の分類によると，すべて非制限的指示詞に該当する。しかし，第 1 章で説明したように，日本語の非制限的指示詞は必ずしも話し手の感情を表すとは限らない。また，非制限的指示詞の使用は，話し手のイメージにおける，命題が真になる可能性と関係しているか否かという点において，再考の余地がある。例えば，次の (3.4) では，話し手の「山田ならきっと合格できる」と信じているような発言に，非制限的な「あの」が加えられている。話し手のイメージでは「山田が合格する」という命題が真になる可能性が低いとは解釈されず，ここの「あの」が話し手の驚きを表しているとも考えにくい。また，「山田」が有名人である必要はない。

(3.4) あの山田なら，きっと合格するに違いない。

それでは，上記 (3.1-3) の用例から話し手の意外が感じられるのはなぜかという疑問が生じる。その理由を説明するために，庵 (1994, 1995a, 2002) による「テキストの意味の付与」の概念が役に立つ。以下の 3.1.1.2 節では，「テキストの意味の付与」について説明し，3.1.1.3 節では上記 (3.1-4) に示すような非制限的指示詞の用法に関して，本稿の主張を述べる。

3.1.1.2. 庵 (1994, 1995a, 2002) による「テキストの意味の付与」

庵 (1994, 1995a, 2002) は新聞記事を中心とする書き言葉的な文脈において，「この」「その」の照応用法について考察している。両者の区別に関して，庵 (2002: 11) では，「その」は「先行詞をそのまま受けることになる」のに対して，「この」は先行詞を「言い換えた形で受けること」が多いと報告されている。さらに，「言い換えた形」により，指示対象の新たな属性情報が付加的に読者に伝わる場合があるという (庵 2002: 12)。

庵は，制限的・非制限的用法の区別については明示的に言及していないものの，「その」より「この」のほうが固有名詞と共起しやすいと指摘している (庵 2002: 11)。また，「その」しか用いられない例として，次の (3.5) に示すように，「その」が固有名詞を非制限的に修飾するものを取り上げられている。

(3.5) 順子は僕なしでは生きられないと言った。その／＼この／＼順子が今は他の男の子供を二人も生んでいる。

(庵 1995a: 79)

庵 (1995a: 81) によれば，(3.5) における「その」は「テキストの意味の付与」をマークする。庵 (1995a: 81) は「テキストの意味」を，「名詞句が語彙的意味の他に各テキスト毎に

臨時に持つ意味」と定義している。(3.5)において、「その順子」の解釈は、前の「僕なしでは生きられないと言った」というテキストに依存し、「その」の指示対象である「順子」は「僕なしでは生きられないと言った」人でなければならない。そうでない場合には、(3.5)の2文のつながりが不自然となるという(庵 1995a: 82)。言い換えると、(3.5)において、指示詞「その」は、前文に提示された指示対象の属性情報(「僕なしでは生きられないと言った」)を、臨時的に名詞句に付与する機能を持つと考えられる。一方、「この」は「テキスト的意味の付与」をマークする機能を持たないため(庵 1995a: 82-83)、(3.5)の「その」を「この」には置き換られない。

しかし、(3.5)は書き言葉より、むしろ話し言葉的な発話である。話し言葉的な対話では、非制限的指示詞を用いて先行詞を繰り返す場合、「その」が一般的であり、「この」が用いられにくいと考えられる。例えば、次の(3.6)の対話において、話し手は先行発話で言及された名前「新庄」を繰り返す際に、非制限的な「その」を付け加えている。ここの「その」も(3.5)の場合と同様、「この」には置き換えられないが、「その」が「テキスト的な意味」を付与しているかどうかに関しては、解釈が曖昧である。本研究では、このように用いられる非制限的指示詞に対して、「テキスト的な意味」を付与するという庵の説明を採用するのではなく、非制限的指示詞は、修飾する名詞句を先行文脈に提示された指示対象の情報と結びつける機能を持つと主張する。本研究の主張に基づく、(3.6)における「その」は、前の「おたくの記者」「その男」「新庄勇一」と照応することにより、固有名「新庄」を先行発話で提示された情報(「取材に来たことがあった」「一、二度来ただけ」など)に関連づけていると説明される。

- (3.6) 「ほう。前にもおたくの記者が取材に来たことがあった」マスターはカップをわたしの前に並べながら、名刺にちらりと目をやった。「その男を覚えているかい？」
「ああ。たしか、新なんとか、という名だった」「新庄勇一」「そうかもしれん。一、二度来ただけだからな」「じつは、その新庄が何を追っていたのかを調べている」「その新庄とかいう人はどうしたのかね?」「死んだ。殺されたんだ」「ほう」マスターは顔をしかめた。「いやな世の中だね。しかし、どうして、あの人が殺されたのだ?」
(BCCWJ, 森詠 1986『北のレクイエム』;(1.31)再掲)

上記(3.5)における「その順子」が必ず「僕なしでは生きられないと言った」属性を持つという理解に関しても、「その」が「順子」を先行文脈で提示された属性情報と結びつけているからであると考えられる。また、前節(3.3)から意外が感じられるという点は、「その」により修飾される名詞句「太郎／ぼく／あなた」が先行文脈で提示された「太郎／ぼく／あなたはとても強い選手だ」という属性情報とリンク付けされ、その属性が「負けた」という事実との対比・矛盾から、話し手の驚きが表されるのであると説明される。本研究では、上記(3.3)と(3.5-6)に示すように、非制限的指示詞が先行詞を繰り返すことにより、

先行文脈で提示された指示対象の属性情報を修飾する名詞句と結びつける用法を「繰り返し用法」と呼ぶことにする。繰り返し用法の詳細については、次の 3.2 節で論じる。

本研究では、(3.5) における「その」が属性情報を名詞句に付与する機能を持つという庵の主張には同意しないが、庵による「テキスト的な意味の付与」という考え方は、前節 (3.1-2) や (3.4) に示すような「この」「あの」の非制限的用法を説明する上に示唆的である。以下 3.1.1.3 節では、本論における「この」「あの」の非制限的用法の解釈について述べる。

3.1.1.3. 「テキストの意味の付与」から「情報追加用法」へ

前節で述べたように、庵の「テキストの意味の付与」という考え方によれば、「その」は属性情報を臨時的に名詞句に付加する機能を持つ。この指摘は、次の (3.7) における「この」と (3.8) における「あの」に対しても適用可能である。つまり、非制限的な指示詞は修飾する名詞句に何らかの属性情報を付加する機能を持つと考えられる。

(3.7) (勝てると思っていたテニスの試合に負けてしまったあとで)

この私が負けるなんてうそだ。

(3.8) でもまあ...一番の吃驚は、あの佐奈が自殺した事ね。この家の中では、一番自殺から遠い人だと思っていたのに

(BCCWJ, 佐藤友哉 2001『フリッカー式』)

例えば、(3.7) では、「この私」を「テニスが得意な私」などと解釈することが可能である。ここで、非制限的な「この」は、「強い」や「得意だ」などの属性情報を「私」、つまり、話し手に追加していると考えられる。また、(3.8) における「あの」は「明るくて自殺するわけがない」などの属性情報を指示対象の「佐奈」に追加していると考えられる。(3.7-8) における非制限的指示詞は、修飾する名詞句に対して、指示対象の何らかの属性情報を付加的に与えていると言える。本研究では、このような用法を「情報追加用法」と呼ぶことにする。

上記 (3.7-8) に示すように、非制限的修飾に用いられる場合、「この」と「あの」は共通して情報追加用法という機能を持つと言える。しかし、それぞれが共起できる名詞句に関して、情報追加の「この」は 1 人称表現と共起する場合にのみ用いられ、外部指示用法に該当するのに対して、「あの」にはそのような制限が課されておらず、照応・認識の 2 用法に見られる。「この」「あの」の情報追加用法についての考察は次の 3.2 節で詳しく説明する。

なお、情報追加用法における「この」と「あの」は、上記 (3.5) に示すような「その」の用法とは、以下の点で性質が異なる。すなわち、庵 (1994, 1995a, 2002) に指摘されたように、(3.5) に示すような「その」は先行文脈に明示された情報としか照応できないのに対して、上記の (3.7) における「この」と (3.8) における「あの」の場合、両者により付

加された属性情報は先行発話には明示されておらず、話し手と聞き手のあいだの暗黙の認識として推測されるものである。つまり、「この」と「あの」は話し手と聞き手の共通知識から、指示対象の特定の属性情報を活性化させ、聞き手に想起させる機能を果たしているため、先行文脈による言明を必要としない。そこで、本研究では、情報追加用法を上記 (3.3) と (3.5-6) における「その」の非制限的用法、すなわち、繰り返し用法と異なる用法として捉えることにする (以下 3.2.2.1 節参照)。

(3.7) の場合、喚起される属性情報は「強い」や「得意だ」などである。話し手は「この」を用いて、自分がテニスが上手いなどの情報を聞き手に思い出させることにより、「自分が強いのに負けた」という意外や悔しい感情を表していると考えられる。一方、(3.8) では、「明るい」「自殺するわけがない」などといった「佐奈」の性格に関する情報が「あの」により活性化されていると考えられる。その結果、話し手は聞き手に「佐奈」の性格に関する情報を喚起させることにより、「佐奈は自殺するわけがないのに自殺した」という意外を表している。Sawada & Sawada (2014) により指摘された (3.1-2) の用例から話し手の意外が感じられるのも、同じ理由で説明可能である。また、Sawada & Sawada (2017) で述べられた有名人を指示する用法は情報追加用法として捉えられる。例えば、(3.9) における「あの」は「有名な」のような属性情報が付加されていると解釈できる。

(3.9) この手記はあのジョン・レノンのものです。

(Sawada & Sawada 2017: 145, 表記改変, 下線は筆者による)

なお、「この」や「あの」により追加される属性情報は、話し手の想定における (聞き手との) 共通知識によるものであるため、必ずしも聞き手の認識や記憶に一致するわけではない。そのため、次の (3.10) に示すように、話し手が特定の属性情報を、確実に聞き手に思い出させるために、さらに具体的な説明 ((3.10) では二重下線の部分) を加えることがある。(3.10) は話し手の「私」から伯父への手紙の一部である。話し手は自分自身に対して、家を離れたことがなく、「天然ボケ」であるというような属性情報を、非制限的な「この」を用いて追加し、読み手の伯父に喚起させようとしている。話し手は、伯父がその属性を確実に思いさせるよう、二重下線の内容を付け加えていると考えられる。

(3.10) ようやく生活にリズムが出来てきて身边が落ち着きました。東京生まれで東京育ちの私 (しかも、高校時代まで山手線以外乗ったことがなく、天然ボケという点では友人の間でもピカーと言われていたこの私が!) が、よりによって新聞記者などという職業につき、初めて家を離れ。しかも最初の赴任先が遠い北国ということで、親も友人も心配していましたし、何より本人が面くらっていましたが、ようやく慣れてきて周囲を見る余裕が出来てきました。

(BCCWJ, 恩田陸 2003『象と耳鳴り』)

以上を踏まえると、本研究における情報追加用法の指示詞が担う機能は、次の (3.11) のように整理することができる。

- (3.11) 非制限的に用いられる「この」「あの」は談話参加者の共通知識により、指示対象が備えた特定の属性情報を喚起させ、修飾する名詞句に対して付加的に与えることができる。

3.1.2. 感嘆・間投表現に用いられる「この」「あの」

日本語の先行研究において、次の (3.12-13) に示すように、感嘆・間投表現に用いられる「この」「あの」の用法を情意的用法と見なすものがある (井上 1988, Naruoka 2006⁶ 参照)。

- (3.12) {この／あの} 女！

- (3.13) {この／あの} バカ (が)！

しかし、(3.12-13) に示すような「この」「あの」は限られた表現としか共起できない。つまり、「女」や「バカ」などの軽蔑表現 (pejorative, derogatory expressions, slurs) とは共起するが、(3.14) に示すような「人」や「先生」などの軽蔑的な意味を伴わない名詞句とは共起できない。そのため、生産性が低く、単独の指示詞として見なされにくい。むしろ、後ろの名詞句とひとつの全体をなしており、慣用表現として定着しつつあると考えられる。本研究では、(3.12-13) のように用いられる「この」と「あの」の用法をやや特殊な有標的用法として位置づけ、第 6 章「その他の有標的用法」で再検討する。

- (3.14) *{この／あの} {人／先生}！

3.2. 考察

本節では、日本語の「この」「その」「あの」の有標的用法を考察する。以下の 3.2.1 節では外部指示、3.2.2 節では照応、3.2.3 節では認識用法について説明する。

3.2.1. 外部指示

外部指示用法において、「この」「その」「あの」の有標的用法は非制限的・非情意的な場合に限られる。言い換えると、外部指示に用いられる非制限的な「この」「その」「あの」はすべて情意的な場面だけではなく、客観的・中立的な文脈にも用いられる。また、制限的・情意的用法は見られない。以下の 3.2.1.1 節では固有名詞、3.2.1.2 節では総称名詞句、

6. Naruoka (2006) は「情意的 (affective)」の代わりに、interactional という用語を用いている。

3.2.1.3 節では人称代名詞を伴う有標的指示詞について考察し、有標的な「この」「その」「あの」の機能を分析する。

3.2.1.1. 固有名詞を伴う場合

以下では、人物を表す固有名詞と場所を表す固有名詞と共起する場合に分けて説明する。まず、人名を非制限的に修飾する際、外部指示的指示詞は無標的な場合と同様、指示対象が現場に存在することを前提としており、聞き手の注意を指示対象に向けさせる機能を持つ。例えば、次の (3.15) では、「この」が人名を非制限的に修飾している。

(3.15) (藤山正美と笠井光男は友人であり、木崎はその 2 人の先輩である。木崎は 2 人の会話を聞いて、笠井の言ったことに対して不満を感じ、笠井を殴った。)

光男がいきなり殴り倒される。

殴ったのは五年生の木崎忠雄である。

木崎「立て！」

立ち上がる光男の側で立ち尽くす正美。

他の端艇部員がボートを仕舞いながら見ている。

木崎「貴様、この藤山にさつき何話しとった？もう一遍言ってみろ！」

(『テレビドラマ代表作選集 (2011 年版)』, 大森寿美男 (脚本),

『15 歳の志願兵』, 丸括弧は筆者による)

ここで、外部指示的な「この」が用いられる前提として、「藤山」の指示対象が会話の現場にいないければ、「この藤山」の言い方は語用論的に不自然となる。(3.15) において、「この」は指示対象に関連する現場情報 (話し手との距離の遠近など) を、「藤山」という固有名に付加し、「現場にいるこの人物＝藤山」という意味を伝えていると考えられる。

このように、外部指示的指示詞は指示対象の現場情報を修飾する名詞に付加することができるため、固有名詞だけでは、聞き手が指示対象を解釈することが困難であると、話し手が想定する場合、外部指示的指示詞を用いることにより、聞き手の解釈を容易にすることがある。次の (3.16) では、聞き手は「山田」という人物を知らないため、固有名詞だけで指示対象を判定することが難しい。(3.16) における「この」は、無標的なジェスチャー用法の場合と同様に、話し手のジェスチャー (例えば、指さしの動作や視線の変化など) を伴うことが期待され、聞き手に現場の人物から指示対象を特定させる働きをする。話し手は「この」を付け加えることにより、その特定の人物と「山田」という固有名とを結びつけ、「今私が指しているこの人物＝山田」という意味を表し、指示対象に対する紹介・説明を簡潔に行うことができる。

- (3.16) (会社で、先輩である話し手は聞き手の新人社員に仕事などについて説明する。聞き手は話し手以外の社員を全く知らない。そこで、話し手は自分のすぐ近くに座っている社員山田を指して)
まあ、また何か分からなかったら、この山田に聞いて。

このように、外部指示用法において、「この」が非制限的・非情意的に用いられ、指示対象に関する現場情報を修飾する固有名詞に付加することにより、指示対象に対する冗長的な言語的説明を回避するストラテジーとしての機能を持つと考えられる。

「その」と「あの」も同じ用法を持つ。例えば、(3.16) と似たような場面で、談話参加者と指示対象との距離により、「その」((3.17) 参照) や「あの」((3.18) 参照) を用いる場合がある。

- (3.17) (会社で、先輩である話し手が新人社員に仕事などについて説明したあと、話し手からやや離れているが、聞き手のより近くに座っている社員山田を指して)
まあ、また何か分からなかったら、その山田に聞いて。
- (3.18) (会社で、先輩である話し手は新人社員に仕事などについて説明した後、話し手と聞き手の遠くに座っている社員山田を指して)
まあ、また何か分からなかったら、あの山田に聞いて。

ただし、上記 (3.16-18) に示すような用法は目上の人に対しては使用しにくい。特に、(3.17) における「その」は、「この」と「あの」よりも、指示対象に対して敬意を欠くという印象を与えやすい。母語話者の容認性判断に関しては、(3.16) における「この」は問題なく容認されるのに対して、(3.17) における「その」および (3.18) における「あの」の容認度には個人差が見られる。「あの」に関しては、大体容認されるが、やや不自然に感じるインフォーマントもいる。「その」の場合、容認できると判断するインフォーマントもいるが、容認できない、または容認できるが場面が限られていると判断するインフォーマントもあり、ばらつきが見られる。そのため、外部指示用法において、非制限的な「その」「あの」は「この」の場合と比べて、容認度がやや低く、特に「その」のほうが自然に言える場面が比較的限られると思われる。

次に、場所を表す固有名詞を非制限的に修飾する場合、外部指示的指示詞は無標的な象徴用法と似た機能を果たす (第 1 章参照)。次の (3.19) では、「この」は固有名詞「日本」を非制限的に修飾している。「この」は無標的な場合と同様、発話時話し手のいる場所を指示しているため、「日本」に「今私がここにいる」という現場情報を付加する機能を持つと考えられる。つまり、「この日本」は「今私のいる日本」という意味を表すことになる。

(3.19) 勉強して儲かるのなら、この日本は金持ちばっかりになりますもんね！！

(BCCWJ, 著者不明 2005 Yahoo!知恵袋)

したがって、外部指示用法において、非制限的・非情意的な「この」「その」「あの」は修飾する固有名詞に対して、指示対象に関する現場情報（話し手との距離など）を付加する機能を持つと考えられる。聞き手が固有名詞に対してさほど馴染みがない場合、非制限的指示詞の使用が聞き手の理解を容易にし、冗長的な言語的説明を回避するストラテジーとして用いられることができる。

3.2.1.2. 総称名詞句を伴う場合

外部指示用法において、「この」「その」「あの」が種 (kind) を指し示す名詞句、すなわち、総称名詞句 (generic NP) を非制限的に修飾する場合がある。日本語は名詞の単数・複数の屈折変化も冠詞も持たないため、裸の名詞が単数あるいは複数の個体を指す解釈も種の解釈も受けられる。例えば、「イヌ」という名詞は (3.20a) では話し手が道に見かけた特定の 1 匹のイヌ、(3.20b) では特定の数匹のイヌを指すのに対して、(3.21) における「イヌ」は「イヌ」という種を指示している。

(3.20) a. (道に一匹のイヌを見て) ほら、イヌがいる！

b. (道に数匹のイヌを見て) ほら、イヌがいる！

(3.21) イヌは人間の友達だ。

日本語の指示詞「この」「その」「あの」が (3.21) における「イヌ」のような総称名詞句に付け加え、非制限的な修飾を行うことができる（中国語・英語の指示詞も同じ用法を持っており、それぞれについては次の第 4 章、第 5 章で説明する）。例えば、(3.22) において、話し手は手に持っている特定の線香花火を通じて、「この」を用いて「線香花火」という種を指示している。固有名詞を修飾する場合と同様、ここの非制限的指示詞「この」は指示対象の種に関する現場情報を「線香花火」という総称名詞句に追加し、「この線香花火」は「(持っている) これの属する種」を表している。

(3.22) (話し手は友人と縁側で線香花火をしている)

子供の頃、おばあちゃんちの縁側で、よく花火をやったんですけど。私はこの線香花火が一番好きでした。

(『ホタルノヒカリ』第 7 話，丸括弧は筆者による)

日本語において、総称表現に用いられる非制限的指示詞は (3.22) のような評価的・感情的な内容に限らず、(3.23) のように、客観的・中立な記述にも用いられる点で、非制限的・

非情意的であると見なすことができる。

- (3.23) (公園の中で、ある桜の木を指して、桜について説明して)
この桜はバラ科の落葉樹です。

ただし、総称表現に用いられる指示詞に対して、制限的解釈と非制限的解釈に曖昧性が生じる場合がある。例えば、上記 (3.22) の「この線香花火」は場面により、線香花火の下位分類、つまり、特定の種類の線香花火と制限的に解釈する場合もあり得る。

「その」と「あの」も以下の (3.24-26) に示すように、総称表現を非制限的に修飾することができる。

- (3.24) (ペットショップで、すぐ目の前にいる柴犬を指さして)
この柴犬は日本原産の犬種です。

- (3.25) (ペットショップで、話し手からやや離れているが、聞き手のより近くにいる柴犬を指さして)
その柴犬は日本原産の犬種です。

- (3.26) (ペットショップで、遠くにいる柴犬を指さして)
あの柴犬は日本原産の犬種です。

しかし、固有名詞の場合と似ていて、「この」は問題なく容認されるが、「その」と「あの」の容認度は、人により低下する場合がある。なお、非制限的な「この」「その」「あの」は、上記 (3.22-26) に示すように、「線香花火」「桜」「柴犬」のような、比較的特定の種を指示することができるが、指示対象が「花」「犬」のようなカテゴリーになると、非制限的な解釈が難しくなる。

3.2.1.3. 人称代名詞を伴う場合

指示詞「この」「その」「あの」が、固有名詞や総称表現の他に人称代名詞を非制限的に修飾する場合がある。非制限的指示詞が 1・2 人称代名詞を伴う場合、指示対象が話し手か聞き手に当たり、会話の現場に存在するため、外部指示用法に該当する可能性がある。一般的には、「この」は 1 人称のみ、「その」は 1・2 人称を非制限的に修飾することができる。「あの」が 1・2 人称を非制限的に修飾する用例はほとんど見当たらない⁷。そのな

7. 「あの」が 1・2 人称を伴う用例は少ないが、観察される。たとえば、次の (ii) では、「あの」が 1 人称の「私」と共起している。しかし、このような場面において、話し手は異なる時期の自分を区別して、「一番楽しかった頃の」自分を「あの」で指示している。つまり、(ii) における「あの」は 1 人称代名詞を修飾しているが、制限的な解釈を受けていると考えられるため、無標的用法と見なすことができる。

かでは、1 人称と共起する「この」の用法は外部指示に当てはまる。1・2 人称を伴う「その」は先行文脈を必要とする点で、外部指示ではなく、照応用法に当てはまる (次の 3.2.2 節参照)。以下では、1 人称を非制限的に修飾する「この」の機能について検討する。

本研究では、1 人称と共起する「この」は情報追加用法と対比用法の 2 つの機能を持つと指摘する。前者の場合、「この」は話し手と聞き手の共通知識から、1 人称 (話し手) に対して、特定の属性情報を活性化させ、追加する機能を担う。後者の場合、「この」は話し手を他者と対比させる機能を持つ。それぞれの用法について、次の 3.2.1.3.1 節と 3.2.1.3.2 節で説明する。

3.2.1.3.1. 情報追加の「この」

3.1.1.3 節で述べたように、「この」は 1 人称に対して、話し手自身の特定の属性情報を、話し手と聞き手の共通知識から活性化させ、追加するという情報追加用法の機能を持つ。追加された属性情報の性質により、それが話し手自身に対する評価になる場合とそうでない場合とがある。次の (3.27) では、「この」により、「テニスが得意だ」など、話し手が自分自身を高く評価するような属性情報が聞き手に想起され、「私」に追加されていると考えられる。結果として、話し手の自負・自信が感じられる。

(3.27) (テニスの試合前、相手に対し) この私に勝てるかな。

次の (3.28) も同様である。(3.28) では、話し手は非制限的な「この」を用いることにより、「王族である」や「身分が高い」などのような属性情報を自分自身に追加していると解釈することができる。結果、話し手は自分を高く評価していることになり、話し手の自負が表されている。

(3.28) 「仕方ない」ジェロームが口を開いた。「[...] カマール王子、白状してしまいましたよ [...] ミズ・ハンター、孫娘のセリーナとカマール王子は、数カ月前から E メールをやりとりしているんだよ」マータ [=ミズ・ハンター] は目を見開き、テーブルコーダーのスイッチを入れた。「お話を続けてください! [...]」 「これ以上は話せない」ジェロームはフォークを手にとった。「両家のあいだの交渉が非常に難しいことはわかるだろう? 話がまとまるまでプライバシーを尊重すると約束できるなら、きみに独占記事を書かせてあげよう」セリーナがぼかんと口を開けてカマールを見た。カマールも呆然とした顔で見つめ返した。[...] ジェロームはいった

(ii) 鬱病患者は軽躁状態を普通の状態とと思っていることがあるそうです。私はひどい状態は脱しましたが、まだまだ憂鬱です。もしかして私が目指していたのは軽躁状態だったのでしょうか? 一番楽しかった頃のあの私には、もう戻れないのでしょうか? だとしたら、もう絶望的です。
(BCCWJ, 著者不明 2005 Yahoo!知恵袋)

いなにを言おうとしているんだ？このぼくが、ゾラズベル王家の王子が、セリーナ・キャリントンに求愛しているとでもいうのか？

(BCCWJ, スー・スウィフト (著) 森山りつ子 (訳) 2005
『シークは気まぐれ』)

一方、「この」により付加された属性情報が、話し手が自分自身を低く評価するような内容に当たる場合もある。このような場合において、非制限的「この」は話し手の謙遜・卑下を表す効果がある。例えば、次の (3.29) では、話し手は「この」により、「思想家でも学者でもない」といった属性情報を自分自身に追加しており、その属性を持った自分が立派な理論など書けるわけがないと述べ、自分自身を低く評価していると解釈することができる。(3.27-28) とは逆に、「この」から話し手の謙遜が伝えられる。

(3.29) [...] 若い方達の為に何か書けとの御依頼です。教養とか文化とか幸福についてとか。で、私は机に向いました。何を書こうとするのか、自分にもはっきり解らぬままに。実はそういう事について、私はまだ何も考えても居ないし、考えた事もないのです。[...]、思想家でも学者でもないこの私が、立派な理論など持ち合せている筈ありません。

(BCCWJ, 白洲正子 2001『白洲正子全集』)

次の (3.30) も同様である。(3.30) の先行文脈では、話し手の春太は聞き手の竜一から、刺青がとれるかどうかについて相談をされている。話し手 (春太) は、医者でもなく竜一の親しい友人でもない。そのため、下線部の発話では、春太はなぜ自分に相談したのかと、聞き手の竜一に聞いている。ここの「このぼく」に対して、「医学知識も持たないぼく」や「親友とは言えないぼく」といった解釈が可能であり、話し手は自分を低く評価するような属性情報を「ぼく」に追加していると考えられる。「この」の使用により、話し手の卑下や謙遜が表されると同時に、竜一が「医者でもなく、親友でもない」自分に相談してきたことに対する話し手の驚きが伝達される。

(3.30) (竜一は背中から二の腕にかけて刺青がある。竜一は好きな女性から、その刺青を取ったら、女房になってもよいと言われ、刺青がとれるかどうかなどについて、春太に相談した。春太は医者でもなく、竜一の親しい友人でもない。)
[...]「死ぬんです。辰巳さん [=竜一] の刺青は、取ったら死ぬような刺青なんです」
春太は立ちあがった。シャレードから出て行きたかった。[...] 行きかけて、身じろぎひとつしなない竜一の背後から声をかけた。「なんで、このぼくなんか相談したんですか？」「里見 [=春太] はんやったら親身になってくれそうな気がしたんや。弟を飛行場へ送って、タクシーで帰って来たら、ちょうどあんたが地下鉄の

階段を昇って来るのが見えてなァ。それで、満腹やのに、太楼軒へ入って行ったんや」

(BCCWJ, 宮本輝 1989『夢見通りの人々』, 丸括弧は筆者による)

なお、「この」により追加される属性情報が自分自身に対する高い評価にも低い評価にもならない場合もある。例えば、次の (3.31) では、「この」の非制限的な使用は、「私」に「マネリストである」という属性情報を与える働きを果たしていると考えられ、話し手自身に対する高い評価にも低い評価にもならない。そのため、(3.31) から話者の自信や謙遜は感じとれない。

(3.31) だから美術史家がもはや様式としてのマネリスムはないと言い張ろうがどうしようが、「私がマネリスト、この私がいるかぎり、生きているかぎりマネリスムはある」のだと、どこ吹く風。

(BCCWJ, 高山宏 2002『表象の芸術工学』)

したがって、情報追加用法における「この」は上記 (3.31) に示すように、必ずしも話し手の感情・評価につながらないため、情意的とは考えられず、非制限的・非情意的用法として見なされる。

以上をまとめると、「この」の情報追加の機能は、次の (3.32) のようにまとめられる。

(3.32) 「この」は談話参加者の共通知識から、共起する 1 人称表現に対して、指示対象に関する特定の属性情報を活性化させ、付加的に与えることができる。付加された属性情報が話し手自身を高く評価するようなものに当たる場合は話し手の自信・自負、低く評価するようなものに当たる場合は話し手の謙遜・卑下の効果を生じさせる。

なお、1 人称を伴う情報追加の「この」は会話の現場に存在する人物 (話し手) を指示する点から見ると外部指示用法と見なされるが、「この」により付加された属性情報が談話参加者の共通知識から活性化されたものである点では、固有名詞や総称表現を伴う場合には見られない、認識的な性質も持っていると考えられる。

3.2.1.3.2. 対比の「この」

「この」が焦点 (focus) に当たる 1 人称表現を非制限的に修飾する場合、話し手を他者と対比させる機能を持つ。例えば、次の (3.33) では、A の「誰」の質問に対して、(3.33a) の「私」でも、(3.33b) の「この私」でも焦点として見なされる。そして、(3.33a, b) のいずれの答えも語用論的に「この絵を描いたのは私、そして私だけである」と解釈すること

ができる。しかし、(3.33a) の下線部では話し手のみが問題とされているが、「この」の付いた (3.33b) では他者の存在が意識され、話し手自身との対比が表されている。つまり、非制限的な「この」を加えることにより、1 人称の話し手を含む代替要素 (alternative) の集合が活性化され、話し手自身を他の代替要素と対比させる機能を果たしていると考えられる。なお、(3.33b) における「この」は話し手に関する何らかの属性情報を喚起させ、付与しているとは考えにくい。

(3.33) A: この絵、誰が描いたの？

B: a. 私です。

b. この私です。

Vallduví & Vilkuna (1998) によると、ある要素を含む代替要素の集合が生起される場合、その要素が対比的焦点 (Kontrast ; cf. identificational focus in Kiss (1998), contrastive focus in Umbach (2004)) にあたり、ただ単に前提とされていない、新しい情報を標示する (Lambrecht 1996, Vallduví & Vilkuna 1998) 焦点の概念とは区別されている。Vallduví & Vilkuna (1998) では後者を Rheme と呼んでいる。Vallduví & Vilkuna (1998: 89) では、焦点と対比的焦点は互いに独立した特徴として捉えられ、ある要素が同時に両者の特徴を備えている、あるいは備えていない場合もあれば、両者のなかのいずれかひとつを備えている場合もあり得る⁸。例えば、次の (3.34) では、the dog は焦点に当たるが、only により、the dog を含む代替要素の集合が活性化されている点で、the dog は同時に対比的焦点にも当てはまる。

(3.34) What did you see?

I saw only [_R the DOG].

(Vallduví & Vilkuna 1998: 85)

すると、上記 (3.33b) のように、1 人称を非制限的に修飾する「この」も、(3.34) の only と類似した機能、すなわち、代替要素の集合を活性化させる機能を持つと考えられる。つまり、(3.33b) の「この私」は (3.34) の the dog と同様、焦点に当たると同時に、対比的焦点の特徴も持つと考えられる。

さらに、非制限的な「この」が対比を表す際に、聞き手にとって、話し手自身が他の代替要素と比べて、何らかの意外性を持つ場合でなければ用いられにくい。例えば、次の (3.35) では、A が次の研究会で、誰が発表するのかを聞いている。まだ発表していないのは山田と伊藤のみであるため、答えは必ずそのうちのひとりである。このような場面では、

8. さらに、焦点の一部が対比的焦点になる場合もあるという (Vallduví & Vilkuna 1998: 85).

「この」を付けた (3.35b) の言い方はやや不自然となる。ただし、話し手が偉そうな態度で、あえて (3.35b) の言い方をする場面もあり得る。その場合、非制限的な「この」は対比ではなく、情報追加の解釈を受け、話し手の自負・自信を表すと考えられる。

(3.35) (山田と伊藤はクラスメートで、佐藤が主催する研究会に参加している。研究会では、参加者が 1 回ずつ発表しなければならない。まだ発表していないのは、山田と伊藤のみである。佐藤が次の発表者について 2 人に聞く)

佐藤: 次の研究会では、山田さんと伊藤さん、誰がやりますか？

山田: a. 私が発表します。

b. ?この私が発表します。

したがって、1 人称が発話の焦点に当たる、なおかつ、他の代替要素よりも話し手自身への言及が聞き手にとって、何らかの意味で予期しにくいと話し手が想定する場合、非制限的な「この」を加えることで、話し手とそれらの代替要素と対比させることができる。

次の (3.36) も同様である。(3.36) では、一般的には、柩に入れられるのは人ではなく、ものであるため、話し手が自身に言及することが、読み手にとっては比較的予想されにくいと推測することができる。そこで、話し手は「この」を用いて自分自身を「夫の柩に入れたかった」ということを明示することにより、読み手の予想しそうな代替要素、つまり「夫の柩に入れる」ものが話し手自身と対比され、読み手への意外性を緩和していると考えられる。

(3.36) 夫には、山歩きのときの服を着せました。還暦のお祝いの赤いちゃんちゃんこと赤い帽子も着せました。今、私の正直な気持ちを言いますと、私も一緒に行きたい、という一言に尽きます。歌人の与謝野晶子は、私の尊敬する人物の一人ですが、晶子が、夫の寛を亡くしたときの歌にこのようなものがあります。「筆硯 煙草を子等は 棺に入る 名のりがたかり 我を愛できと」子どもたちは、これはお父さんが使っていた筆だ、愛用していた硯だ、これはお父さんが好きだった煙草だ、とあって、柩にいれているけど、お父さんが一番愛したのは、このお母さんなんだよ、とは名乗りを上げられないでいる、そういう意味です。私も、夫の柩に一番入れたかったのは、この私なのです。

(BCCWJ, 米沢富美 2004 『二人で紡いだ物語』)

次の (3.37) も同様である。(3.37) では、聞き手 (グロス皇帝) は、列車にいるすべての人間を殺すと述べている。話し手も含めて、列車にいるすべての乗客を代替要素とすると、聞き手の予想において、その代替要素の集合には聞き手と戦える相手は存在しないと推測できる。そのため、話し手がいきなり戦う相手として自分自身を焦点に取り上げることは、

聞き手にとっては予期しにくいと考えられる。話し手は非制限的な「この」を用いることにより、自分自身を他の乗客たちと対比させていると解釈できる。

- (3.37) ゴトゴト...列車のまどを流れる山の景色をカケルはわくわくしてながめていた。今からお父さんの仕事場の山の中の丸太小屋に遊びに行くのだ。と、とつぜん、前方の空が真っ黒になった。「ああっ！」暗黒の空間に客車はすいこまれる！悲鳴がこだました。そのとき、やみの中にいっそうこい黒い人かげがうかびあがった。かげはどんどん大きくなり...巨人のように見おろす。「ウワッハッハッハッ。余の名はグロス、グロス皇帝！ひとり残らず死んでもらおう！」背すじをぞおっと冷たくする低い声だった。「ウワッハッハッハッ...」仮面の下でわらいながら、グロス皇帝は走る車両をつかみあげようとする。「待てっ！」カケルは立ちあがった。そんなこと、させてたまるか。「このぼくが相手だっ！...うわあっ！」いきなり足もとがゆらいでカケルはたおれた。

(BCCWJ, 速水彩 1990『青いブリンク』)

上記 (3.33b), (3.36-7) はすべて「この +1 人称」が焦点に当たる例であるが、1 人称が焦点ではないが、対比的焦点 (の一部) に該当する場合も、対比の「この」が用いられることがある。例えば、次の (3.38) では、下線部の「この私」は焦点には当たらないと考えられる。

- (3.38) ロッセンに会いたい、そしてもしその機会があったら彼女のためになにか大いに役立つことをやってあげたい、そんな気持を何カ月ものあいだ抱いて過ごしました。でもあまりにも内気な私はなかなか彼女に言い寄って行くことができなかったのです。私が一番彼女の近くにいると感ずるのは、実は彼女に会っていないときなのでした。あの人が優等生だったってことは申しあげましたかしら？そう、その年も、彼女はクラス中の優等賞を全部さらってしまいました。そのためにだけでも私は優等生になってみたいと思いました。けれども、お定まりの勉強に順応することは私にはできないことでした。ツンとした美人でありながら。一方では勉強家でもある彼女に私は感服しました。一体どんな将来があの人を待っているのかしら？きっと有名な学者か偉い芸術家になるに違いないわ。あの人のお美貌と才能が世間をアッといわせるかもしれない。一方この私は巷の深い闇にうずもれて、あの人のお最良の友、なんでも打ち明けてくれる腹心の友になってあげよう。で、今や私は彼女を愛しているということが得意なのでした。

(BCCWJ, ヴァレリー・ラルボー (著) 池田公麿 (訳) 1990
『わがひそかなる楽しみ』)

下線部の先行文脈では、話し手はロッシェンについて語っており、ロッシェンはとても優秀で勉強家であり、きっと素晴らしい未来が待っていると述べている。そこで、話し手は「この」を非制限的に用いることにより、自分自身をそのロッシェンと対比させていると考えられる。ここの「この私」は対比的トピック (contrastive topic) (Krifka 1998, Lee 1999, Umbach 2001, Büring 2003 など) として見なすことができる。対比的トピックは、話し手が話題に取り上げる個体として、他に上げたい個体も存在することを示すものであり (Umbach 2001: 177), 対比的焦点の一種として見なすことができる (Vallduví & Vilkuna 1998: 83-89). つまり、(3.38) の「この私」は焦点ではないが、対比的焦点には当てはまると解釈することができる。さらに、「この +1 人称」が焦点に当たる場面においては、対比の「この」は意外性に関係すると上記で説明したが、(3.38) のような場面に対しても同じことが言える。(3.38) では、話し手が下線部の前文において、自分の視点からロッシェンに対する見方や感情を語っている。特に、「あの人が優等生……」からの部分は話し手のロッシェンに関する追憶に入り、話し手が語り手として、自分自身がいきなり話題に登場することが、読み手にとっては唐突なことであると考えられる。よって、ここの「この」も意外性につながっていると考えられる。

次の (3.39) も同じである。

(3.39) 「[...] これは明らかに犯人が捜査を眩惑するために施した工作にちがいないのです」

[...] 喬木、それに、[...] 鹿島里美の五人が、[...] 浅見の能弁を聞いていた。

「この工作を施すチャンスは、発見の前日、こちらのお宅にいて僕の話盗み聴きすることのできた人々にしかありません。つまり、[...] 戸谷さんと三枝さんには犯人の資格がないということになります」

[...]

「それじゃ……」と、鹿島行雄が喉がつまったような声を出した。

[...]

「それじゃ……」と、行雄は息を溜めて、吐き出すように言った。

「私はどうかね、え？ この私は」

「資格は充分、あります」

浅見は冷ややかに言った。三枝も戸谷も喬木も里美も、一様にギョッとして行雄の反応を窺った。

(内田康夫 2014 『三州吉良殺人事件』)

(3.39) では、鹿島行雄と浅見が、ある殺人事件について会話しており、三枝、戸谷、喬木、里美もその場で聞いている。浅見は犯人について、ある程度見当がついているが、確証がないため、明確に誰を疑っているのかを言わない。そこで、話し手の鹿島行雄がいきなり

自分自身を犯人の候補として話題に取り上げることは、聞き手 (少なくとも三枝, 戸谷, 喬木, 里美の 4 人) にとっては、予期されにくいと考えられる。話し手は「この」を用いて、自分自身を他の (犯人になり得る) 人と対比させている。

したがって、1 人称が発話の焦点もしくは対比的焦点 (または両方) に当たる, なおかつ, (他の代替要素よりも) 話し手自身への言及が聞き手 (あるいは読み手) にとって, 何らかの意味で予期しにくいと話し手が想定する場合, 非制限的な「この」を加えることにより, 話し手自身を他の代替要素と対比させることができる。

なお, 対比用法においては, 上記 (3.36) に示すように, 非制限的な「この」が話し手の感情を表す内容と結びつく場合もあるが, (3.33b) に示すように, 中立・客観的な内容にも用いられるため, 情報追加の場合と同様, 非情意的用法に該当する。よって, 1 人称と共起する「この」は非制限的・非情意的であると見なすことができる。

3.2.2. 照応用法

照応用法において, 日本語の有標的指示詞の使用は非制限的・非情意的, 制限的・情意的, 非制限的・情意的な場合に観察される。それぞれについては以下の 3.2.2.1 節, 3.2.2.2 節, 3.2.2.3 節で詳しく説明する。

3.2.2.1. 非制限的・非情意的な場合

3.1.1 節で言及したように, 先行研究では, 照応用法において, 「その」は「先行詞をそのまま受けることになる」のに対して, 「この」は先行詞を「言い換えた形で受けること」が多いと指摘されている (庵 2002: 11)。この指摘は非制限的な「この」と「その」の機能を分析する際にも示唆的である。本稿では, 照応用法において, 非制限的・非情意的に用いられる指示詞は次の 3 つの機能を持つと指摘する。第 1 に, 先行文脈に現れた固有名詞をそのまま繰り返す際に, 非制限的指示詞が先行文脈との関連性をマークすることにより, 聞き手の理解を容易にする機能を持つ。繰り返し用法と呼ぶことにする。3.1.1 節で言及したように, 庵 (1994, 1995a, 2002) により指摘された「テキストの意味」を与える「その」の非制限的な用例もこれに当てはまる。会話の場面においては「その」, 新聞記事や論説文など書き言葉的な文脈においては「この」と「その」の両方が用いられる。第 2 に, 指示詞の共起する固有名詞が先行文脈に現れず, 先行詞がそれ以外の言語形式により実現された場合, 非制限的指示詞はその形式と固有名詞を結びつけ, 固有名詞に関する冗長的な説明を避ける機能を持つ。その結果として, 初めて用いられる固有名詞に対して, 聞き手の指示対象の解釈がより容易になる。言い換え用法と呼ぶことにする。この用法は「この」にしか見られない。以下の 3.2.2.1.1 節では繰り返し用法, 3.2.2.1.2 節では言い換え用法について説明する。第 3 に, 3.1.1.3 節で述べたように, 非制限的な「あの」は情報追加の機能を持つ。この用法は照応用法のみならず, 認識用法にも見られる (以下 3.2.3 節参照)。照応用法における「あの」の情報追加用法については, 3.2.2.1.3 節で説明する。

3.2.2.1.1. 繰り返し用法

繰り返し用法に関して、まず、会話の場面において、先行文脈に現れたある固有名詞に対して、聞き手もしくは話し手自身が指示対象の同定・解釈に困難があると、話し手が想定する場合、非制限的な「その」を加えることにより、その固有名詞と先行発話に提示された文脈情報を関連づけさせ、聞き手の理解をより容易にすることがある。例えば、次の(3.40)では、話し手と成見沢があるニワトリが消えたことについて話しているときに、吉野明里が会話に入り、「三太」と言う名前に言及した。話し手はその名前を全く知らないため、吉野に聞き、「三太」が消えたニワトリの名前であると分かったが、話し手はそのニワトリのことをよく知らず、指示対象を同定できないと考えられる。そこで、話し手は「その」を非制限的に用いることにより、「三太」という名前を繰り返し、先行発話に伝えられた「三太」というニワトリに関する情報と結びつけ、「あなたたち(成見沢と吉野)が言ったそのニワトリ」と解釈される。

(3.40) 放課後、僕と龍之介くんは探偵活動を再開した。次の聞き込みの相手は、成見沢めぐみだ。彼女は僕らのクラスの飼育係で、一羽しかいないニワトリの世話をしていた。そのニワトリがいなくなった。ニワトリ消失事件の細かい状況を僕は知らないから、それも聞いておこうと思って、帰り支度をしている成見沢に声をかけた。「あのさ、飼育小屋のニワトリがいなくなった時の話を聞きたいんだけど、いいかな。」[...]と、そこへもう一人、女子が近づいてきた。「どうしたの、例の三太の話？」ショートカットで少し小柄なその女子は、成見沢と仲がいい吉野明里だった。「三太はね、[...] 本当に消えちゃったの、煙みたいだね。私もナルちゃんから聞いた時には、なんだか狐につままれたみたいな気分だった。[...]」[...] どうでもいいけど、吉野の話の中によく判らない固有名詞が出てきた。「ナルちゃん」というのが成見沢のことだとは知っているけれど [...], 「三太」ってのは誰なんだ？僕がその疑問点を問い質してみると、吉野は軽くうなずいて、「あ、三太っていうのはニワトリの名前、[...]」[...]「ふうん、三太かーで、その三太は消えちゃったんだね、[...]」と、僕がうっかり口走ったことを、吉野は聞き逃さなかった。

(BCCWJ, 倉知淳 2004『ほうかご探偵隊』)

次の(3.41)も同様である。(3.41)では、話し手「理恵」が聞き手と電話で話している。聞き手と理恵は「新庄」が殺された事件について調べており、聞き手は「深作」という人から「新庄」が殺される前に「片桐道男」のケースに興味があったと聞き、その話を「理恵」に伝えた。「理恵」は「片桐道男」という人を全く知らない。そこで、話し手の「理恵」は「その」を非制限的に用いることにより、「片桐」という名前を繰り返し、聞き手に伝えられた「片桐道男」に関する内容と結び付け、「あなたが言ったその人」と解釈される。

- (3.41) 電話のベルが鳴っていた。[...]「起きた？」理恵からだ。[...]「昨夜遅かったの？」「ああ」「何度も電話をしたわ」「編集部に行って、新庄の遺した取材メモや資料を調べていた」「何か分かって？」「—どうやら、手がかりらしいものを見つけた」深作から聞いた片桐道男の話を理恵に伝えた。「その片桐さんに、あの人 [=新庄] は会ったのかしら？」「深作によれば、新庄はどこかで片桐に接触したらしい」「事件の鍵を握る人というわけね？」

(BCCWJ, 森詠 1986『北のレクイエム』)

次に、指示対象が談話参加者の一部であり、なおかつ、そのことをすべての談話参加者が知っているが、その名前をよく知らないまたは思い出せない者がいると話し手が想定する場合においては、非制限的な「その」を用いて、会話に導入された名前を繰り返すことがある。例えば、次の(3.42)では、話し手(安楽椅子)は聞き手と共に「ウィラード」という人物を知っている。そこで、話し手は非制限的な「その」を用いてその名前を繰り返すことにより、固有名「ウィラード」に照応性を付与し、固有名と先行文脈の「この前紹介した外人」や「イラン人美術商」など指示対象に関する内容との関連性をマークし、聞き手の指示対象の解釈を容易にする働きをしていると考えられる。

- (3.42) 「この前、きみに得体の知れぬ外人を紹介しただろう」安楽椅子の向うの蟹江は少し眼を細めた。「イラン人美術商のウィラード・シャヒーンさんですね」東湖はすぐに反応する。「そう、そのウィラードは問題の人物でね。イラン人であるのはたしかだが、イギリス国籍を持っている。したがって正式にはイギリス人だ。本名はテリー・サファイヤと聞いたが、なあに、当てにはならん。これだって偽名かも知れんよ。ヨーロッパの古狸だが、近頃はアメリカ、ドイツ、日本の金持層を狙ってしきりに暗躍しておる。超一流の贋作屋だ」

(BCCWJ, 山田智彦 1995『浮沈に賭ける』)

次の(3.43)も同様である。

- (3.43) (A, B, 山田は同じ会社の同僚である)
A: 今日は残業するの？
B: ええ、今回の企画にはちょっと問題があつてね、また担当の山田に確認しないと……
A: その山田はとっくに帰っちゃったぞ。

(3.43) では、話し手(A)と聞き手(B)は共に「山田」のことを知っており、指示対象を同定できる。話し手は聞き手により導入された固有名詞「山田」を繰り返す際に「その」を

付け加えることにより、「山田」を先行発話に提示された「山田に確認しないと」という文脈情報と結びつけ、「あなたが探したい山田がとっくに帰った」という意味を伝達している。第 2 章で説明したように、無標的な照応用法において、すべての談話参加者が指示対象を同定できる、また、すべての談話参加者がそのことを知っていると話し手が想定する場合、「あの」が用いられ、「その」は用いられないという指摘がある(久野 1973, 大島 2014, Oshima & McCready 2017 参照)。しかし、上記(3.42-43)から分かるように、非制限的な「その」にはこの制限がない。つまり、照応用法における非制限的な「その」は無標的な場合とは異なり、指示対象が談話参加者の共通知識に存在すると話し手が想定する場合においても用いられる。

上記(3.40-43)における「その」はすべて「この」には置き換えられない。しかし、新聞記事や論説文など、書き言葉的な文脈においては、「この」の使用も可能になり、「その」と置き換えられる場合が多い。例えば、次の(3.44)における「この」は先行文脈に現れた固有名詞「中村光夫」を繰り返すのに用いられている。非制限的な「この」は指示対象と前文の話題との関連性をマークすることにより、話題が「中村光夫」から「蓮實重彦」へ変わるときに生じる、読み手にとっての唐突感が緩和され、文章がより容易に理解される。

(3.44) 千九百三十年代に登場した批評家に、小林秀雄という大批評家の影響下に出発した中村光夫という、これも立派な批評家がありますが、彼は、何とか小林の批評の魔力を脱しようと、どうしても文体として力が入らない、風船でいうと穴のあいた、「です・ます体」の文体を自分の批評文用に発案しました。先にあげたポストモダンの代表的な批評家の一人である蓮實重彦は、この中村光夫を先人と仰いでいますが、彼も、一ページの中ですら一つの文章が終わらない、いってみれば「...で、...で、...」と続く、「空疎」で「だらだらした文体」をひっさげて批評の世界に現れます。

(BCCWJ, 加藤典洋・宮沢章夫 2002『一冊の本』)

(3.44)における「この」は「その」に置き換えられる。そして、指示詞の使用が必須ではなく、「この」や「その」を取り除いても(3.44)の文章が自然である。ここで語り手が非制限的指示詞を用いたのは、共起する固有名詞とそれが現れた先行文脈との照応関係を明示することにより、読み手の情報処理をより容易にするためであると考えられる。

なお、繰り返し用法においては、固有名詞のみならず、非制限的指示詞が総称名詞句や人称代名詞と共起する場合もある。次の(3.45)では、「この」が総称名詞「アームストロング砲」を非制限的に修飾している。固有名詞を伴う場合と同じように、「この」は冒頭の「アームストロング砲」と照応し、総称名詞句を、前文で紹介されたアームストロング砲の性質とリンクづけており、「このアームストロング砲」は「球形の弾丸をはじき出す旧式の青銅砲とちがい……命中率も抜群なアームストロング砲」と解釈することができる。

(3.45) アームストロング砲は、球形の弾丸をはじき出す旧式の青銅砲とちがい、砲身が鉄でできている。なかに螺旋がきってあって、細長い砲弾が螺旋にそって旋回しながら飛んで行く。射程も長いし、爆発力、命中率も抜群だ。ヨーロッパ人が発明したこのアームストロング砲を持っていた大名は、肥前佐賀藩だ。肥前兵がこれを二門ひっぱって江戸へはいつてきた。彰義隊攻撃がはじまった十五日の朝は、据えつけに手間どり、官軍が苦戦しているころには、まだ火を噴けなかったのである。

(BCCWJ, 古川薫 2001『勝海舟』)

また、非制限的指示詞が人称代名詞を修飾する例として、次の (3.46) では「その」が 3 人称、(3.47) では 2 人称代名詞と共起している。

(3.46) 「この子が生まれるまでは、わたしもあのひとのトラックに乗って、静岡や銚子や気仙沼あたりまで行ってたの」彼女は、短い髪を掻き上げるようにした。Tシャツにチノパン、ジョギングシューズ姿からは、母親とはとても想像がつかない。その彼女が遠い過去の話をするように言うのが、亜弓には不思議に響く。

(BCCWJ, 落合恵子 1993『バーバラが歌っている』)

(3.47) 自分の嫁さんのことを百分百信用できますか？してますか？私は、今、お金(借金)のことで嫁さんを疑っています。嫁さんを疑う私は悪い夫でしょうか？愛しているなら信じる。信じられないのは愛していない証拠だ。そんな事を言う人もいますが、信じる事と過信する事は違います。あらゆる面で絶対の信頼をおける人なんと、そういないのでは？恐らく、奥様の事はあなたが一番詳しいでしょう。そのあなたが疑ってしまうのなら、奥様が怪しいのは高確率です。ただ、止むを得ない事情、あなたの勘違い等もあるかも知れませんが、まずは落ち着いて奥様と話し合うのが得策かと思います。

(BCCWJ, 著者不明 2005 Yahoo!知恵袋)

(3.47) では、「その」は 2 人称「あなた」を、前文に述べられた、「夫として自分の妻のことをもっとも詳しく知っているはずである」といった情報と関連付けさせている。結果として、その「あなた」でさえ疑っているということから、聞き手の妻は確かに怪しいという話し手の判断に証拠付けている。よって、(3.47) における「その」の指示対象が会話の現場に存在する人物(聞き手)ではあるが、先行文脈による言及を必要とするため、1 人称を伴う「この」とは異なり、外部指示ではなく照応用法と見なされる。次の (3.48) に示すように、「その」が 1 人称を修飾する場合も同様である。

(3.48) ほとんどの人は既に承知していることであろうが、吉原博士の歿後二年たって、コンピューターを導入した言語比較研究がされ、その結果、吉原説は完全に否定された。つまり、英語と日本語は完全に、まるっきり、微塵も、関係がないことが証明されたのである。要するに、本書『英語語源日本語説』は、まったくのデタラメだったのである。この度、本書が発狂文庫の一冊として軽装で出版されることになったのは、その学問的価値によってではなく、面白い読み物＝エンタテイメントとしてである。しかしながら読者は必ずや本書から、ある人間の情熱を感じ取り、何事かを学ぶであろうと私は確信する。たとえ学問的には無価値でも、そういう何かは本書の中にはあるのだ。思えば、私の人生はこの吉原説とかかわり続けることによって成り立っていた。一度は絶交していたのにまたよりを戻したりして、損な選択をしたものだという気がしないでもない。しかし、その私が今、こうして文庫版の序文を書いているわけだ。人の一生はこのように完結するものであろうかという感慨にふけらざるを得ない。

(BCCWJ, 清水義範 1986『蕎麦ときしめん』)

(3.48) では、「その」が「私」を非制限的に修飾しており、前文で提示された「私の人生はこの吉原説とかかわり続けることによって成り立っていた。一度は絶交していたのにまたよりを戻したりして、損な選択をしたものだという気がしないでもない」という情報と結びつくことにより、「文庫版の序文を書いている」との事実と対比させ、皮肉を感じさせる。ここの「その」も上記 (3.46-47) と同じように、先行文脈なしでは用いられないため、照応用法と見なされる。

以上をまとめると、繰り返し用法において、非制限的な「その」もしくは「この」は基本的に共起する名詞句に照応性を付与することにより、先行文脈との関連性をマークし、聞き手または読み手の情報処理をより容易にする機能を持つと考えられる。

3.2.2.1.2. 言い換えの「この」

前述のように、庵 (2002) では、「この」は先行詞を「言い換えた形で受けること」が多く、「言い換えた形」によって、指示対象の新たな属性情報が付加的に読者に伝わる場合があると述べられている (庵 2002: 11-12)。庵 (2002) は、主として固有名詞を「この + 普通名詞」という形で言い換えられる用例となる「この」の制限的用法について議論しているが、この性質は非制限的用法にも認められる。本稿では、照応用法における非制限的指示詞のもう 1 つの機能として、指示詞が初めて現れる固有名詞を非制限的に修飾し、先行詞がそれ以外の言語形式により実現された場合、指示詞はその形式と固有名詞を結びつけることにより、指示対象に関する情報を増やすことがあると指摘する。次の (3.49) では、「この」と共起する固有名詞「ウィーン会議」は文脈に初めて現れ、先行文脈における「ヨーロッパの秩序を再建するための会議」と同一指示をしている。「この」は先行文脈に言及さ

れた会議と「ウィーン会議」という固有名のあいだに照応関係を付与することにより、指示対象に関する、「ヨーロッパの秩序を再建するための会議＝ウィーン会議」という新たな情報を聞き手または読み手に伝えている。その結果として、初めて用いられた「ウィーン会議」という名称に対して、冗長的な説明を避けることができる。この用法における「この」は「その」に置き換えることができない。

(3.49) ナポレオン戦争の終了後、千八百十四年十月から千八百十五年六月にかけて、ヨーロッパの秩序を再建するための会議がウィーンで開かれた。会議を主導したのは、オーストリアの外相メッテルニヒである（彼は千八百九年から千八百四十八年までのオーストリアの外相を務め、千八百二十一年からはオーストリアの宰相を兼務した）。このウィーン会議は、ナポレオンがエルバ島から脱出したことで一時中断されたが、その後またすぐに再開され、ヨーロッパの新秩序を構築するための話し合いが続けられた。

(BCCWJ, メアリー・フルブロック (著) 高田有現・高野淳 (訳) 2005
『ドイツの歴史』)

次の (3.50) と (3.51) も同様である。

(3.50) 千九百四十五年四月五日に日本との中立協定の破棄を宣言したソ連は、八月八日に対日宣戦を布告した。第一極東方面軍部隊（司令官カ・ヤ・メレツコフ元帥）と太平洋艦隊は、満州の関東軍を日本海をルートとする日本本土から孤立させるために、北部朝鮮の東海岸の諸港—雄基、羅南、清津、咸興、元山を占領し、内陸に進撃した。ソ連の対日参戦は、四十五年二月にソ連のクリミア半島のヤルタでおこなわれた三大国首脳会談（ルーズヴェルト、スターリン、チャーチル）の秘密協定によるものである。すなわちこのヤルタ会談で米英側は、第二次大戦を早急に終結するために、ドイツの敗北後二～三ヵ月以内のソ連の対日参戦を要求し、秘密協定が結ばれた。

(BCCWJ, 姜在彦 1986『朝鮮近代史』)

(3.51) 物心がつきはじめて小僧っ子のころから、ただ物を造ることだけに興味を感じて、育ってきたヘンリー・フォードは、まずこの戦争を「浪費の消耗戦争」と見たので、兵器生産の受注を拒否して、彼の身近にいたコウゼンス副社長を驚愕させた。激しい口論の果ての喧嘩別れで、コウゼンスを辞任に追いやってしまうようなことになったのであるが、このコウゼンス辞任事件と相次ぎ、フォードが不用意に口にした反戦的言辞が新聞にすっぱ抜かれたので騒ぎは大きくなった。

(BCCWJ, 大森実 1986『ザ・アメリカ勝者の歴史』)

(3.50) では、「四十五年二月にソ連のクリミア半島のヤルタでおこなわれた三大国首脳会談」を「このヤルタ会談」、(3.51) では、「激しい口論の果ての喧嘩別れで、コウゼンスを辞任に追いやってしまうようなこと」を「このコウゼンス辞任事件」と言い換えている。この用法に用いられる非制限的な「この」は 3.2.2.1.1 節で説明した繰り返し用法とは、名詞句に照応性を付与する点で類似していると考えられる。

3.2.2.1.3. 情報追加の「あの」

3.1.1.3 節で説明したように、「あの」が非制限的に用いられる際、談話参加者の共通記憶から、指示対象に関する特定の属性情報を活性化させ、名詞句に付加するという情報追加の機能を持つ。例えば、次の (3.52) では、非制限的な「あの」は先行発話に導入された「バクウ」を先行詞に受け、談話参加者の共通知識から指示対象に関する情報（「俺もお前も見殺しにしようとした奴だ。いや、わざと殺そうとしたんだぜ」など）を、聞き手に喚起させ、「バクウ」という固有名に付加していると考えられる。

(3.52) 「いいか。バクウは、俺もお前も見殺しにしようとした奴だ。いや、わざと殺そうとしたんだぜ。[...] もし、俺達が、生きて戻ってきて、こんなお宝を手に入れたと知ったら、どうなると思う [...] このお宝を取り上げるだけで、あのバクウが済ますと思うか? [...]

(BCCWJ, 河原よしえ 1995『ファラオを盗め!! 冥府の聖女 (上)』)

非制限的な「あの」の情報追加用法は照応用法だけではなく、認識用法にも観察されるが、後者については次の 3.2.3 節で説明する。

3.2.2.2. 制限的・情意的

第 2 章で述べたように、自然会話において、「この」は話し手が指示対象に対して「生き生きと叙述する時に用いられ」(久野 1973: 188)、感嘆的なニュアンスを生じさせる機能を持つ。次の (3.53) では、「この」により、指示対象の山田がまるで談話参加者の目の前にいるかのように感じられ、話し手の指示対象に対する感嘆や主観的評価が表されている。

(3.53) 僕の友達に山田という人がいるんですが、この男はなかなかの理論家で…

(久野 1973: 188, 一部表記を改変)

一方、(3.54) に示すような、話し手の感嘆・評価を表さない、客観的・(感情的に) 中立的な場面においては、「この」の使用は容認されにくくなる (第 2 章参照)。よって、会話的な場面において、照応用法における制限的な「この」は情意的であると見なすことができる。この性質は非制限的な場合にも見られる (以下 3.2.2.3 節参照)。

- (3.54) コンビニでレトルトのカレーを買って、うちで {??この/その} カレーをご飯にかけて食べた。

(孟・大島 2018, 下線は筆者による ; (2.20b) 再掲)

ただし、「この」の情意的な性質は新聞記事など書き言葉的な場面には見られない (2.2.1 節参照).

3.2.2.3. 非制限的・情意的な場合

会話的な場面において、非制限的に用いられる「この」は、制限的な場合と同様、発話に感嘆的なニュアンスを付け加える機能を持つ。次の (3.55) に示すように、「この」は (3.55a) では自然に用いられるが、事実を客観的に述べている (3.55b) の場合には不自然になる。

- (3.55) (2 人の大学生がパーティーで会話している)
- a. さっき森のぞみって女の子と話したんだけど、この森さんがすごいおしゃべりであきれちゃったよ。
 - b. さっき森のぞみって女の子と話したよ。(??この) 森さんは文学部の一年だそうだ。

(Meng & Oshima 2020, 一部改変, 下線は筆者による)

そのため、会話的な照応用法において、「この」は、制限的・非制限的用法のどちらの場合にも、情意的な特徴を持つと考えられる。

3.2.3. 認識用法

3.2.2 節で言及したように、「あの」の情報追加用法は照応用法のみならず、認識用法にも見られる。例えば、次の (3.56) における「あの」は、話し手と読み手との共通記憶から、指示対象の「ニューヨーク」と「パリ」に対して、「発達している」や「大都市である」などといった属性情報を活性化させ、追加していると考えられる。聞き手がその属性を確実に想起できるように、話し手は「日本人の多くが羨望のまなざしで見た」という説明を加えているが、その部分がなくても、類似の解釈が可能である。

- (3.56) 前述の会議の提言は、“チェンジング・コース”(進むべき新たな道) と題してまとめられている。進むべき新たな道の模索は、環境問題に限るものでなく、後世に引き継ぐ“企業経営 (マネジメント)” の仕組みを再構築することも含まれよう。日本人の多くが羨望のまなざしで見た、あのニューヨークやパリは、今、インフラの老朽化に悩まされている。巨大都市ならばこそその重い症状は、国家的レベルの

戦略的な施策の実行にしか救いの道はない。ここでいう戦略とは、制度体質を变革し、本質的に制度疲労を回復させる方策をいうのである。

(BCCWJ, 東海幹夫 2004『マネジメントの会計情報』)

次の (3.57) も同様である。(3.57) では、「あの鹿島隊長が」は話し手の心理活動か独り言として解釈される。そこで、「あの」により、話し手は自分の記憶から指示対象 (鹿島隊長) の「(飛行機を操縦する) 腕がとてもよい」などの属性情報を想起し、「鹿島隊長が強いのに撃墜された」という驚きを伝えている。

(3.57) 靖雄は鹿島のことを思い出した。鹿島機は敵機に囲まれながら、靖雄機から敵機を引き離すように遠ざかって行った。鹿島大尉のことだから、撃墜されるようなことはないだろう。[...] 神竜の後ろを、完全にやっつけたはずの P 三十八機が、まるで降って湧いたように飛んでいたのだ。「どこから来たのだ」靖雄は、思わず息を呑んだ。鹿島機を追撃して行った P 三十八より他には、考えられなかった。ということは、鹿島機は撃墜されてしまったのか。「あの鹿島隊長が」靖雄は生まれて初めて、背筋に冷たいものが流れるのを感じた。

(BCCWJ, 山本恵三 2002『ドッグファイター『神竜』』)

(3.57) から、認識用法における情報追加の「あの」は話し手の感情と結び付くことがあると言えるが、以下の (3.58) に示すように、客観的な記述にも観察されるため、非情意的用法に当てはまる。(3.58) では、話し手は非制限的な「あの」を用いて、聞き手 (息子) との共通知識から「高熱におそわれたことがある」などの属性情報を活性化させ、固有名詞「ヘレン・ケラー」に付加している解釈することができる。

(3.58) 母親「そう。だから体温もせいぜい四十℃どまり。四十一℃を超したら昏睡状態になることがあるし、四十二℃にもなれば自分自身が〈ゆで卵〉になって死んじゃう。とくにあぶないのは赤ちゃんね。運が悪いと、熱が出すぎたときに、病原体が死ぬだけじゃなく脳のタンパク質もやられて、あとあと障害が残ってしまう。あのヘレン・ケラーも犠牲者のひとりね」息子「だから熱さましを飲むんだね。熱さまして、どんなふうに効くの？」

(BCCWJ, 日本化学会 (編) 2001『化学・意表を突かれる身近な疑問』)

したがって、認識用法において、有標的な「あの」が非制限的・非情意的に用いられ、談話参加者の共通記憶から、指示対象に関する属性情報を活性化させ、名詞句に付加する、情報追加の機能を持つと考えられる。

3.3. 本章のまとめ

本章では、先行研究を踏まえ、日本語の指示詞「この」「その」「あの」の有標的用法を考察した。「この」「その」「あの」の有標的用法は、外部指示・照応・認識用法の3つに分け、それぞれ次の表 3.1-3 のようにまとめられる。該当例は、すべて本章であげられたものである。点線は該当する用法が容認されないか実例が存在しないことを意味する。

表 3.1. 外部指示用法における「この」「その」「あの」の有標的用法

有標的用法	外部指示的	例
非制限的・ 非情意的	(i) 固有名詞や総称名詞句に対して、発話の現場に関する指示対象の情報を付加する用法 (この・その・あの)	(3.15) など
	(ii) 情報追加用法 (1 人称を伴う「この」)	(3.27) など
	(iii) 対比用法 (1 人称を伴う「この」)	(3.33b) など
制限的・ 情意的	-----	-----
非制限的・ 情意的	-----	-----

表 3.2. 照応用法における「この」「その」「あの」の有標的用法

有標的用法	照応的	例
非制限的・非情意的	(i) 繰り返し用法 (話し言葉的な発話では「その」、書き言葉的な文脈では「この」「その」)	(3.40) など
	(ii) 言い換え用法 (この)	(3.49) など
	(iii) 情報追加用法 (あの)	(3.52) など
制限的・情意的	「この」(対話的な場面に限る)	(3.53)
非制限的・情意的	「この」(対話的な場面に限る)	(3.55a)

表 3.3. 認識用法における「この」「その」「あの」の有標的用法

有標的用法	照応的	例
非制限的・非情意的	情報追加用法 (あの)	(3.56) など
制限的・情意的	-----	-----
非制限的・情意的	-----	-----

考察の結果、日本語の有標的指示詞は外部指示・照応・認識の3用法に分布し、主として非制限的・非情意的に用いられるが、会話における照応的な「この」のみ、情意的な性

質を持ち、制限的・非制限的用法の両方に見られる。なお、日本語の非制限的・非情意的指示詞（この・あの）には情報追加用法という特殊な機能を持つ。すなわち、談話参加者の共通知識により、修飾する名詞句に対して、指示対象が備えた特定の属性情報を喚起させ、付加的に与える機能である。

まず、外部指示用法において、上記表 3.1 に示すように、「この」「その」「あの」の有標的用法は非制限的・非情意的な場合に限られる。第 1 に、固有名詞や総称名詞句を修飾する場合、非制限的指示詞は共起する名詞句に対して、指示対象に関する現場情報（談話参加者との距離など）を付加することにより、冗長的な言語的説明を回避する働きを持つ。第 2 に、1 人称を伴う「この」には情報追加用法と対比用法の機能を持つ。前者は談話参加者の共通知識から話し手自身に関するなんらかの属性情報を活性化させ、1 人称に追加する機能である。後者の場合、1 人称が発話の焦点もしくは対比的焦点（または両方）に相当し、なおかつ、（他の代替要素よりも）話し手自身への言及が聞き手（あるいは読み手）にとって、予期しにくいと話し手が想定する場合、非制限的な「この」を加えることにより、話し手自身を他者と対比させることができる。

次に、照応用法において、上記表 3.2 から分かるように、主として「この」と「その」が有標的に用いられ、非制限的・非情意的、制限的・情意的、非制限的・情意的な場合に観察される。非制限的・非情意的な場合において、有標的指示詞は繰り返し用法、言い換え用法、情報追加用法という 3 つの機能を持つ。第 1 に、繰り返し用法において、先行文脈に現れた名詞句をそのまま繰り返す際に、非制限的指示詞が先行文脈との関連性をマークすることにより、聞き手の理解を容易にする機能を持つ。会話の場面においては「その」、新聞記事など非対話的な書き言葉の文脈においては「この」と「その」の両方が用いられる。第 2 に、言い換え用法に関して、指示詞の共起する固有名詞が先行文脈に現れず、先行詞がそれ以外の言語形式により実現された場合、非制限的指示詞がその形式と固有名詞を結びつけ、指示対象に関する新たな情報を相手与えると同時に、冗長的な説明を避ける機能を果たす。その結果として、初めて用いられる固有名詞に対して、聞き手（もしくは読み手）の理解がより容易になる。この用法は「この」にしか見られない。繰り返し用法と言い換え用法は共に名詞句に照応性を付与することにより、聞き手の理解を容易にする点では、性質が類似する。第 3 に、非制限的な「あの」が修飾する名詞句に対して、談話参加者の共通知識から指示対象の属性情報を活性化させ、付加する機能である。つまり、情報追加用法の 1 種である。一方、情意的用法に関しては、会話的な場面における「この」にしか見られず、照応的な「この」は発話に感嘆的なニュアンスを付け加える機能を持つ。「この」のこの情意的な特徴は制限的・非制限的用法の両方に観察される。

最後に、認識用法において、非制限的・非情意的に用いられる「あの」は、照応用法における場合と同様に、情報追加の機能を持つ。上記表 3.3 に示すように、認識用法は、外部指示用法の場合と同様に、制限的・情意的、非制限的・情意的な用法は見られない。

4. 中国語の指示詞「这」「那」の有標的用法

本章において、まず、4.1 節では、中国語の指示詞「这」「那」が名詞句と共起する形式およびその意味と構造について説明する。次の 4.2 節では、第 1 章で述べた分類法に従い、外部指示・照応・認識用法のそれぞれにおける有標的な「这」「那」の機能を考察する。それぞれ 4.2.1 節、4.2.2 節、4.2.3 節で説明する。最後の 4.3 節は本章のまとめである。

4.1. 「这」「那」と名詞句との共起

第 1 章で述べたように、中国語指示詞が名詞句と共起する際、次の (4.1) に示すように、2 種類の構造が用いられる。便宜上、以下では (4.1a) の形式を a 型、(4.1b) の形式を b 型と呼ぶことにする。

- (4.1) a. 这・那 ((+数詞)+分類辞)+NP
b. NP₁+这・那 ((+数詞)+分類辞)+NP₂

a 型においては、指示詞が修飾する名詞句の前につけられ、日本語の「この／その／あの + NP」や英語の「this/that + NP」という構造と類似している。一方、(4.1b) のような形式に関しては、NP₁ の指示対象が名詞句全体と同一である場合とそうでない場合に分けられる (呂叔湘 1985: 209-212, 刘街生 2000: 12-17, 木村 2012: 30-33, 51-56)。例えば、次の (4.2) は前者、(4.3) は後者の例である。

- (4.2) 小张、小李 {这/那} 两个人
張さん 李さん Dem.P/Dem.D 二 Clf 人
「張さん、李さんという 2 人」
(4.3) 小王 {这/那} 本书
王さん Dem.P/Dem.D Clf 本
「王さんの {この／その／あの} の本」

いずれの形式でも、指示詞とそれが修飾する後の名詞句とのあいだに数詞・分類辞を入れるときと入れないときがある。以下の 4.1.1 節では、中国語における数詞・分類辞の基本的なつけかた、4.1.2 節では、a 型・b 型の両形式の意味と構造について説明する。

4.1.1 数詞と分類辞について

数詞と分類辞の使用に関して、中国語の先行研究では、分類辞は数詞か指示詞、もしくは特定の数量辞 (quantifier) と共起しなければならず (Li & Thompson 1981: 104)、数詞は一般的には分類辞を伴う (呂叔湘 2002: 132) と指摘されている。以下 4.1.1.1 節では単数、4.1.1.2 節では複数の対象を指示する場合において、中国語の数詞および分類辞の使い方に

ついて説明する。ただし、本稿では、「米 (メートル)」「千克 (キログラム)」のように距離、重量などを計る単位については触れない。

4.1.1.1. 指示対象が単数の場合

一般に、中国語においては、単数の指示対象を指示する場合、次の (4.4) に示すように、裸の名詞句または「一+分類辞+NP」の形式が用いられる。(4.4c, d) のように、数詞あるいは分類辞のみを名詞に付けることができない。

- (4.4) a. 书
本
「(1 冊の)本」
- b. 一 本 书
一 Clf 本
「1 冊の本」
- c. *本 书
Clf 本
「(1 冊の) 本」
- d. *一书⁹
Clf 本
「(1 冊の) 本」

ただし、不定の名詞句が目的語に当たる場合、上記 (4.4c) のような言い方が例外的に容認される。例えば、次の (4.5) において、「(一) 本书 ((一) 冊の本)」は動詞「拿 (取る)」の目的語にあたる。この場合、数詞「一」を省略し、分類辞のみで名詞「书 (本)」を修飾することが可能である。

- (4.5) 我 去 拿 了 (一) 本 书.
Pro.1.SG 行く 取る Pfv 一 Clf 本
「(1 冊の) 本を取りに行ってきました」

指示詞を加える場合、a型に関しては、次の (4.6a, b) に示すような、「指示詞 (+一) + 分類辞+NP」という形式を用いることができる。特に話し言葉では、数詞「一」を省略することが一般的ではあるが ((4.6a) 参照), 他者との区別を強調したい場合など、数詞「一」を入れるときもある ((4.6b) 参照)。さらに、ややくだけた言い方として、数詞と分類辞を

9. ただし、北京方言では、特にくだけた会話の場面において、(4.4d) のような言い方が容認される。

同時に省略し, (4.6c) のような「指示詞+NP」という形式も可能である. しかし, 分類辞を省略し, 数詞のみを指示詞と名詞のあいだに挿入することはできない ((4.6d) 参照).

- (4.6) a. {这/那} 本 书
 Dem.P/Dem.D Clf 本
 「{この/その/あの} 本」
- b. {这/那} 一 本 书
 Dem.P/Dem.D 一 Clf 本
 「{この/その/あの} 本」
- c. {这/那} 书
 Dem.P/Dem.D 本
 「{この/その/あの} 本」
- d. *{这/那} 一 书
 Dem.P/Dem.D 一 本
 「{この/その/あの} 本」

なお, 指示詞を用いる際に, 修飾する名詞句の指示対象のカテゴリに対して, 聞き手が分類辞だけで推測できると話し手が想定する場合, (4.7-8) に示すように, 主要部の名詞句を省略し, 「指示詞 (+1) + 分類辞」のみで指示することも可能である. (4.7) では「本」を表す名詞, (4.8) では「人」を表す名詞が省略されていると考えられる.

- (4.7) a. {这/那} 本
 Dem.P/Dem.D Clf
 「{この/その/あの} 本」
- b. {这/那} 一 本
 Dem.P/Dem.D 一 Clf
 「{この/その/あの} 本」
- (4.8) a. {这/那} 位
 Dem.P/Dem.D Clf.Hon
 「{この/その/あの} 方」
- b. {这/那} 一 位
 Dem.P/Dem.D 一 Clf.Hon
 「{この/その/あの} 方」

一方, b 型構造に関しては, 本節冒頭で言及したように, NP₁ と名詞句全体と同じ対象を指示する場合とそうでない場合がある. 後者において, 数詞・分類辞は上記 a 型とほぼ同

じように用いられる。例えば、次の (4.9) における「小王 (王さん)」は名詞句全体の指示対象の所有主と解釈される。(4.9a, b) に示すように、数詞・分類辞を全く使わないか、分類辞のみを用いることが可能ではあるが、分類辞なしで数詞のみを挿入することができない。あるいは、(4.9c) のように、主要部の「书 (本)」を略す言い方もできる。しかし、上記 a 型の (4.6b) と比べて、次の (4.9d) のように、指示詞に後接する名詞句を省略しない場合、数詞「一」と分類辞の併用が日常会話においてはやや不自然になる。

- (4.9) a. 小王 这 (本) 书
 王さん Dem.P Clf 本
 「王さんのこの本」
- b. 小王 这 (*一) 书
 王さん Dem.P 一 本
 「王さんのこの本」
- c. 小王 这 (一) 本
 王さん Dem.P 一 Clf
 「王さんのこの本」
- d. ?小王 这 一 本 书
 王さん Dem.P 一 Clf 本
 「王さんのこの本」

対して、NP₁の指示対象が名詞句全体と同じである場合、次の (4.10-11) に示すように、数詞「一」の挿入は許容されにくく、分類辞は任意である。この場合、指示詞が修飾する名詞を省略することができない。

- (4.10) 《我是猫》 {这/那} (??一) (本) *(书)
 『吾輩は猫である』 Dem.P/Dem.D 一 Clf 本
 『吾輩は猫である』という本」
- (4.11) 小王 {这/那} (??一) (个) *(人)
 王さん Dem.P/Dem.D 一 Clf 人
 「王さんって (人)」

したがって、先行研究に指摘されたように、中国語では、単数の指示対象を指すとき、一般に、分類辞の使用には指示詞 (もしくは他の限定詞) か数詞のうち、少なくともいずれかが必要とされる。ただし、日常会話では、指示詞・数詞「一」・分類辞の併用は避けられる傾向があり、特に b 型においては許容されにくいと考えられる。

数詞に関しては、呂叔湘 (2002: 132) に指摘されたように、数詞の使用は一般的には分

類辞の存在を前提とする。ただし、一部の名詞が例外となる。例えば、新聞報道・講演・政府の公式文書など正式な場面においては、指示詞「这」を用いて先行文脈における言語的要素（命題・発話など）を指し示す場合、「指示詞＋一＋NP」という形式が用いられることがある（(4.12) 参照）。

- (4.12) 这 一 问题
 Dem.P 一 問題
 「この問題」

この形式に用いられる名詞は「問題」「政策」「現象」「概念」「計画」「原則」など物理的な形を持たない抽象的概念を指示する、一部特定のものに限られ、遠称指示詞「那」はこの場合には用いられにくい。

なお、中国語においては、一般に、名詞句の指示対象の種類により分類辞が用いられるが、名詞自体が分類辞として、動作の回数を数えるのに用いられる場合、さらに分類辞や後に他の名詞を付けることはできない。例えば、次の (4.13) の「脚 (足)」は (1 回の) キック、(4.14) の「枪 (銃)」は銃で (1 回) 撃つ動作を表す。中国語の先行研究では、このような分類辞は「動量词 (動量詞)」と呼ばれることがある (李宇明 2000, 王汉卫 2004 など)。

- (4.13) {这/那} 一 脚
 Dem.P/Dem.D 一 足
 「{この/その/あの} キック」

- (4.14) {这/那} 一 枪
 Dem.P/Dem.D 一 銃
 「{この/その/あの} 撃ち」

4.1.1.2. 指示対象が複数の場合

複数の指示対象を指示する場合、単数とほぼ同じように、裸の名詞句または「数詞＋分類辞＋NP」の形式が用いられる（(4.15) 参照）。

- (4.15) a. 书
 本
 「本」
 b. 三 本 书
 三 Clf 本
 「3 冊の本」

なお、中国語では、分類辞のなかには単数・複数問わず用いられるものもあれば、複数の意味を含むものもある。上記 (4.15) における「本（「冊）」」は前者の例である。このような分類辞が用いられる際、さらに指示詞を加える場合、a型・b型にもかかわらず、数詞もしくは他の数量辞が義務的である。次の (4.16) は a 型、(4.17) は b 型の用例である。そして、単数を指し示す場合と同様に、数詞を分類辞なしで用いることができない。

- (4.16) {这/那} 三 *(本) 书
 Dem.P/Dem.D 三 Clf 本
 「{この／その／あの} 3 冊の本」
- (4.17) 小王、 小李 {这/那} 两 *(个) 人
 王さん 李さん Dem.P/Dem.D 二 Clf 人
 「王さん、李さんという 2 人」

ただし、具体的な数を表す数詞ではなく、次の (4.18-19) のように、概数の複数を表す数量辞「些 (xiē)」¹⁰が用いられる場合、分類辞と併用すると容認度が低下する。昔風の物語や特殊な場面においては用いられる場合もあるが、日常会話では分類辞なしで用いられるのが普通である。

- (4.18) {这/那} 些 书
 Dem.P/Dem.D Quant.PL 本
 「{これら／それら／あれら} の本」
- (4.19) 他-们 {这/那} 些 人
 Pro.3.Masc-Pro.PL Dem.P/Dem.D Quant.PL 人
 「彼ら (って)」

一方、複数の意味を含む分類辞を用いる場合、指示対象が単数の場合と同様に、数詞「一」を用いることができる。例えば、複数の人物を指すのに用いられる「帮 (bāng)」「伙 (huǒ)」(それぞれ (4.20), (4.22) 参照) や、ものに用いられる「堆 (duī)」((4.21), (4.23) 参照) などがあげられる。次の (4.20-21) に示すように、数詞が「一」である場合は省略可能であるが、それ以外の数詞は省略不可となる ((4.22-23) 参照)。

10. 《现代汉语量词手册》(『現代中国語量詞ハンドブック』) では、「些」を分類辞 (中国語では「量詞 (量詞)」という用語が用いられている) として見なされているが、本稿では、「些」は場面が限られても「个 (個)」「本 (冊)」などの分類辞と共起することができるため、分類辞ではなく、英語の *some* と類似する数量辞として見なすことにする。

- (4.20) 他-们 {这/那} (一) 帮 人
 Pro.3.SG.Masc-Pro.PL Dem.P/Dem.D 一 Clf.PL 人
 「(ひとつのグループとして) 彼ら (って)」
- (4.21) 仓库里 {这/那} (一) 堆 东西
 倉庫中 Dem.P/Dem.D 一 Clf.PL もの
 「倉庫の中の {これら/それら/あれら} のもの」
- (4.22) 他-们 {这/那} 两 伙 人
 Pro.3.SG.Masc-Pro.PL Dem.P/Dem.D 二 Clf.PL 人
 「(2 つのグループに分かれた) 彼ら (って)」
- (4.23) 仓库里 {这/那} 两 堆 书
 倉庫中 Dem.P/Dem.D 二 Clf.PL 本
 「倉庫の中の {この/その/あの} 2 つの本の山」

したがって、複数の指示対象を指すとき、単数の場合と同様に、一般的には、分類辞の使用には指示詞 (もしくは他の限定詞) か数詞のうち、少なくともいずれかが必要とされ、数詞の使用は分類辞の存在を要求すると考えられる。

4.1.2. a 型・b 型の意味と構造について

本節では、中国語の指示詞「这」「那」が用いられる 2 形式、a 型と b 型について、それぞれ以下の 4.1.2.1 節、4.1.2.2 節で説明する。

4.1.2.1. a 型について

a 型の「这・那 ((+数詞)+分類辞)+NP」という形式は統語構造上、日本語の「この/その/あの+NP」、英語の「this/that + NP」と類似し、後ろの NP を主要部、「这・那 ((+数詞)+分類辞)」を修飾部として見なすことができる。そして、この形式において、指示詞「这」「那」は英語の場合と似ており、一般的には人称代名詞とは共起しにくい ((4.24) 参照)¹¹。この点では、人称代名詞を直接修飾できる日本語の指示詞とは異なる (第 3 章参照)。

- (4.24) *{这/那} (个) 他
 Dem.P/Dem.D Clf Pro.3.SG.Masc
 「{この/その/あの} 彼」

11. ただし、場面により、中国語の指示詞「这」「那」が人称代名詞を制限的に修飾することが可能である。たとえば、指示対象の人物が多重人格者である場合、話し手が (4.24) のような言い方を用いて、異なる人格を区別することができる。その場合、指示詞は制限的な解釈を受けると考えられる。

(非) 制限性の観点から見ると、a 型における指示詞は後ろの名詞句を制限的に修飾する場合も、非制限的に修飾する場合もある。以下の (4.25a) は制限的、(4.25b) は非制限的な用例である。

- (4.25) a. (本棚にある本を指して)
 {这/那} (本) 书 怎么样?
 Dem.P/Dem.D Clf 本 どう
 「{この/その/あの} 本どうですか?」
- b. (聞き手との共通の知人、王先生についてコメントする)
 那 位 王-老师 能力 很 强.
 Dem.D Clf.Hon 王-先生 能力 とても つよい
 「その/あの王先生って、とても有能です」

4.1.2.2. b 型について

4.1 節の冒頭で言及したように、b 型の「NP₁+这・那 ((+数詞)+分類辞)+NP₂」という形式に関しては、NP₁ の指示対象が名詞句全体と同一である場合とそうでない場合に分けられる。次の 4.1.2.2.1 節では前者、4.1.2.2.2 節では後者について説明する。

4.1.2.2.1. NP₁ の指示対象が名詞句全体と同一である場合

例えば、次の (4.26) における NP₁ (「小王 (王さん)」) の指示対象が名詞句全体と同じく、王さんという人物であると解釈される。

- (4.26) 小王 {这/那} (个) 人
 王さん Dem.P/Dem.D Clf 人
 「王さんって (人)」

この場合、NP₁ の後の部分 (便宜上、以下ではこの部分を「指示詞を含む句」という意味で指示詞句と呼ぶことにする)、「{这/那} 个人 ({この/その/あの} 人)」は NP₁ と照応し、同一指示を行っていると考えられる。一般的には、このような形式において NP₁ には固有名詞 ((4.26-27) 参照)、人称代名詞 ((4.28-29) 参照)、総称名詞句 ((4.30-31) 参照) などが現れることができる。一方、NP₂ は NP₁ の属す上位カテゴリーを表す普通名詞により実現され、固有名詞や人称代名詞は用いられない。

- (4.27) 小张、小李 {这/那} 两 个 人
 張さん 李さん Dem.P/Dem.D 二 Clf 人

- 「張さん，李さんという 2 人」
- (4.28) {他/她} {这/那} (个) 人
 Pro.3.SG.Masc/Pro.3.SG.F Dem.P/Dem.D Clf 人
 「彼／彼女って (人)」
- (4.29) {他/她} -们 {这/那} 些 人
 Pro.3.SG.Masc/Pro.3.SG.F -Pro.PL Dem.P/Dem.D Quant.PL 人
 「彼／彼女たち (って)」
- (4.30) 猫 {这/那} (种) 动物
 ネコ Dem.P/Dem.D Clf 動物
 「ネコって (動物)」
- (4.31) 猫，狗 这 两 种 动物
 ネコ イヌ Dem.P 二 Clf 動物
 「ネコ，イヌという 2 種類の動物」

なお，NP₁ が人称代名詞の場合，上記 (4.28-29) に示すように，指示詞が 3 人称 (単数・複数) と共起する場合は「这」「那」のいずれも用いられる。しかし，1・2 人称の場合，次の (4.32) に示すように，指示詞が 1・2 人称単数と共起する際には，近称の「这」しか用いられず，遠称の「那」は容認されないが，(4.33) のように，1・2 人称複数と共起する際には，「那」が容認される場合もある (徐丹 1988: 129，小野 2016 参照)。

- (4.32) {我/你} {这/*那} (个) 人
 Pro.1.SG/Pro.2.SG Dem.P/Dem.D Clf 人
 「{私／あなた} って (人)」
- (4.33) {我/你} -们 {这/那} 些 人
 Pro.1.SG/Pro.2.SG -Pro.PL Dem.P/Dem.D Quant.PL 人
 「{私／あなた} たち (って)」

中国語の先行研究では，上記 (4.26-33) におけるような，b 型構造の表現は同格 (apposition) の一種として一般的に認められている (黎錦熙 1957: 68，吕叔湘・朱德熙 1979: 22，叶南薰 1985，徐丹 1988，黄河 1992，刘街生 2000: 1 など)。同格という用語が指す範疇は研究により異なるが，典型的な同格として，次の (4.34) における Anna と my best friend のように，2 つの名詞句が同一指示を行うのが一般的である (Quirk et al. 1985: 1301)。

- (4.34) *Anna, my best friend, was here last night.*

(Quirk et al. 1985: 1301)

上記中国語の (4.26-33) における b 型形式もこの点から見ると、同格の 1 種として見なすことができる。すると、このような b 型は、実質的には a 型形式が NP に後接することにより同格を構成すると考えることができる。便宜上、以下では同格をなす b 型を b-同格型、そうでない b 型を b-非同格型と呼ぶことにする。b-同格型において、指示詞句が直前の名詞句と同一指示を行うため、常に照応的であると考えられる。よって、本稿では、b-同格型における指示詞をすべて照応的指示詞と見なすことにする。

次に、b-同格型の統語構造について考えたい。同格を構成する 2 つの名詞句間の統語関係について、両者が構造的に独立している、すなわち、等位的なものであるかどうかを判断する際、Meyer (1992) は、以下の基準を提案している。

- (4.35) a. The first unit of the apposition can be optionally deleted.
b. The second unit of the apposition can be optionally deleted.
c. The units of the apposition can be interchanged.

(Meyer 1992: 41)

Meyer (1992) では、(4.35) のすべての基準を満たす同格構造は中心的な同格 (central apposition) と呼ばれ、中心的な同格を構成する 2 つの名詞句が構造的には互いに独立しており、等位的であるという (Meyer 1992: 41)。例えば、上記 (4.34) における Anna と my best friend はこの 3 つの基準を満たしている。つまり、(4.34) では、Anna と my best friend のいずれかを除いても、文が依然として自然であり、両者の順番を変えても意味が変わらないため、Meyer (1992) の基準によると、Anna と my best friend は等位的なものであり、両者が中心的な同格をなしていると見なされる。対して、(4.35) の基準を一部しか満たさない同格構造は、周辺的な同格 (peripheral apposition) と呼ばれ、周辺的な同格をなす名詞句は従属的な関係を持つとされている (Meyer 1992: 41)。

Meyer (1992) の判断基準に従うと、上記 (4.26-33) に示すような中国語の b-同格型構造は周辺的な同格に当たることになる。例えば、次の (4.36) では、「《哈姆雷特》这本书 (『ハムレット』という本)」の部分から、「《哈姆雷特》 (『ハムレット』)」と「这本书 (この本)」のいずれかを除いても文が統語的に成立する ((4.37) 参照) が、両者の順番を変えることができない。つまり、中国語の b-同格型構造は、(4.35a, b) の基準を満たすが、(4.35c) の条件を満たさない。そして、(4.36) では、指示詞句「这本书 (この本)」の解釈は「《哈姆雷特》 (『ハムレット』)」に依存するため、「《哈姆雷特》 (『ハムレット』)」がより中心的で、独立したものとして考えることができる。よって、本稿では、b-同格型の統語関係に関して、NP₁ を主要部、後の指示詞句を修飾部と見なすことにする (cf. 吕叔湘 1985: 211)。

- (4.36) [《ハムレット》]; [这本书]; 写 于
『ハムレット』 Dem.P Clf 本 書く に
1599 至 1602 年 間.
1599 まで 1602 年 あいだ
『ハムレット』という本は 1599 年から 1602 年頃に書かれた」
- (4.37) a. 《ハムレット》 写 于 1599 至 1602 年 間.
『ハムレット』 書く に 1599 まで 1602 年 あいだ
『ハムレット』という本は 1599 年から 1602 年頃に書かれた」
- b. 这本书 写 于 1599 至 1602 年 間.
Dem.P Clf 本 書く に 1599 まで 1602 年 あいだ
「この本は 1599 年から 1602 年頃に書かれた」

すると、b-同格型の統語構造を以下の (4.38) のように分析することができる。

- (4.38) [NP₁]_{主要部} + [[这・那 ((+数詞)+分類辞)] + [NP₂]]_{修飾部}

さらに、修飾部の指示詞句内において、指示詞が後の NP₂ を主要部に取り、修飾していると考えられる。

以上を踏まえて、b-同格型における指示詞の (非) 制限性について考えたい。上記 (4.26-33), (4.36) から分かるように、b-同格型において、指示詞句自体は a 型構造をなしており、指示詞が後の名詞の指示対象を、NP₁ の指示するものに限定していると考えられる。つまり、b-同格型における指示詞は常に制限的な解釈を受けると言える。よって、b-同格型における指示詞はすべて照応的・制限的であると見なすことができる。

情意性に関して、b-同格型の指示詞が単数の人物を指示する場合、話し手の感情・感嘆などを表す場面でしか用いられず、情意的解釈を受けていると見なされる。次の (4.39 b) のように、(単数の) 指示対象の人物に対して、客観的な事実を中立的な態度で述べる際には、b-同格型構造の使用がやや不自然となる。

- (4.39) a. 小王 {这/那} (个) 人 真 有-意思.
王さん Dem.P/Dem.D Clf 人 実に ある-面白み
「王さんって、本当に面白いよね」
- b. ?小王 {这/那} (个) 人 生 于 1999 年.
王さん Dem.P/Dem.D Clf 人 生まれる に 1999 年
「王さんって、1999 年に生まれた」

この点に関して、史 (2012: 47-57) は b 型における指示詞はすべて、指示対象に対する話し手の「主観的な感情、評価」を表すと主張しているが、上記 (4.36) に示すように、b-同格型の指示詞が人物以外の対象を指す場合、または、次の (4.40) のように、複数の人物を指示する場合、客観的・中立的な陳述にも用いられるため、すべて情意的とは言にくい。

- (4.40) 这 (个) 项目 是 由 小张、 小李 {这/那}
 Dem.P Clf プロジェクト Cop Ag 張さん 李さん Dem.P/Dem.D
 两 个 人 负责 的。
 二 Clf 人 責任を負う DP
 「このプロジェクトは張さん、李さんの 2 人が担当者です」

また、b 型の中で、b-同格型でない場合、つまり、NP₁ の指示対象が名詞句全体と同一でない場合においても、指示詞が客観的・中立的な解釈を受けることが可能であり、情意的とは見なされない (以下 4.1.2.2.2 節参照)。

4.1.2.2.2. NP₁ と名詞句全体の指示対象が同一でない場合

NP₁ の指示対象が名詞句全体と同一でない、つまり、b-非同格型の場合に関しては、例えば、NP₁ が名詞句全体の指示対象の存在するまたは存在した時間・場所などを表す場合 ((4.41-42) 参照)、NP₁ が名詞句全体の指示対象の所有主に当たる場合 ((4.43-44) 参照) が挙げられる (呂叔湘 1985: 209-212, 徐丹 1988: 129, 木村 2012: 30-33, 51-56)。次の (4.41)、(4.43) は単数、(4.42)、(4.44) は複数の指示対象を指し示す例である。

- (4.41) a. 公司 那 (个) 人
 会社 Dem.D Clf 人
 「会社のその／あの人」
 b. 今天 这 (个) 人
 今日 Dem.P Clf 人
 「今日のこの人」
- (4.42) a. 公司 那 些 人
 会社 Dem.D Quant.PL 人
 「会社のその／あの人たち」
 b. 今天 这 三 个 人
 今日 Dem.P 三 Clf 人
 「今日のこの 3 人」
- (4.43) 小王 {这/那} (本) 书
 王さん Dem.P/Dem.D Clf 本

- 「王さんの {この/その/あの} の本」
 (4.44) 小王 {这/那} 几 本 书
 王さん Dem.P/Dem.D いくつ Clf 本
 「王さんの {この/その/あの} いくつかの本」

いずれにせよ, NP₂ を主要部と見なすことができる (呂叔湘 1985: 209-211). また, 次の (4.45) のように, NP₁ が (ひとつまたはそれ以上の) 固有名詞により構成され, 指示詞句において明確な数の代わりに, 複数を表す数量辞 (「些」など) あるいは分類辞 (「帮」「伙」など) が用いられる場合, NP₁ の指示対象が名詞句全体の指示対象に含まれていると解釈することがある. つまり, (4.45-46) の名詞句が NP₁ 「小张 (張さん)」を含む複数の人物を指示しており, NP₁ の指示対象の集合が名詞句全体の真部分集合になると考えられる. 上記 (4.41-44) の場合と同様に, NP₂ を主要部, 残りの部分を指示対象を限定する修飾部として見なすことができる

- (4.45) 小张 {这/那} 些 人
 張さん Dem.P/Dem.D Quant.PL 人
 「張さんたち」
 (4.46) 小张 {这/那} (一) {帮/伙} 人
 張さん Dem.P/Dem.D 一 Clf.PL 人
 「(ひとつのグループとして) 張さんたち」

以上を踏まえると, 非同格型の b 型形式の統語構造を以下の (4.47) のように分析することができる.

- (4.47) [NP₁]_{修飾部} + [这・那 ((+数詞)+分類辞)]_{修飾部} + [NP₂]_{主要部}

b-非同格型における指示詞が主要部の前に置かれ, 修飾している点では, a 型とは変わらない. そして, a 型と同様に, 一般的には人称代名詞を主要部 (NP₂) にとることができない. また, 前節で説明したように, b-同格型構造は a 型形式が名詞句に後接することにより同格を構成していると考えられるため, a 型を指示詞が共起するプロトタイプの形式とすると, b-同格型でも b-非同格型でも実質的にはその変種と見なすことができる. すなわち, 中国語において, 名詞修飾型の指示詞「这」「那」は日本語・英語の場合と同様に, 名詞句の前に置かれ, 名詞句を修飾するということである. すると, これまで説明してきた中国語指示詞の共起形式は以下の表 4.1 のように整理することができる.

表 4.1. 中国語の指示詞「这」「那」の共起形式

这／那		名詞句と共起するときの構造	例
a 型 (プロトタイプ)		[指示詞 ((+数詞)+分類辞)] _{修飾部} + [NP] _{主要部}	[<u>这</u> (本)] _{修飾部} [书] _{主要部} Dem.P Clf 本 「この本」
b 型 (a 型 の変 種)	b-非同 格型	[NP ₁] _{修飾部} + [指示詞 ((+数詞)+分類辞)] _{修飾部} + [NP ₂] _{主要部}	[她] _{修飾部} [<u>这</u> (本)] _{修飾部} [书] _{主要部} Pro.3.SG.F Dem.P Clf 本 「彼女のこの本」
	b-同格 型	[NP ₁] _{主要部} + [[指示詞 ((+数詞)+分類辞)] + [NP ₂]] _{修飾部}	[她] _{主要部} [<u>那</u> (个) 人] _{修飾部} Pro.3.SG.F Dem.D Clf 人 「彼女って (人)」

b-非同格型における指示詞の(非)制限性については、NP₁が時間・場所を表す場合、NP₂が普通名詞にせよ、固有名詞にせよ、指示詞を含む修飾部はNP₂、つまり、主要部の指示対象の集合から、特定の時間・場所に現れるものに限定する働きをしている。つまり、この場合における指示詞は常に制限的解釈を受けていると考えられる。例えば、次の(4.48)では、指示詞が固有名詞を修飾しているにもかかわらず、世の中に存在するすべての「小王(王さん)」の中でも、「昨日現れた」特定のひとりに指示対象が限定され、他の者は除外されると解釈することができる。

- (4.48) [昨天]_{修飾部} [那 (个)]_{修飾部} [小王]_{主要部}, 你 认识 吗?
 昨日 Dem.D Clf 王さん Pro.2.SG 知る DP
 「昨日の {その/あの} 王さんって、あなたは知っていますか？」

また、NP₁の指示対象の集合が名詞句全体の真部分集合に当たる場合も同様に、指示詞が常に制限的であると見なすことができる。次の(4.49)に示すように、指示詞を含む修飾部(「小张(張さん)」および「这/那些(これら/それら/あれら)」)は主要部(「人」)の指示対象から、有数の(張さんを含む複数の)対象に限定する働きを果たし、制限的な解釈を受けている。

- (4.49) [小张]_{修飾部} [[这/那 些]]_{修飾部} [人]_{主要部}
 張さん Dem.P/Dem.D Quant.PL 人
 「張さんたち」

一方、NP₁が名詞句全体の指示対象を所有する場合、指示詞がNP₂を制限的に修飾する場

合もあれば (上記 (4.43-44) 参照), 次の (4.50) に示すように, 非制限的な修飾に用いられる場合もある.

- (4.50) 莎士比亚 这 本 《哈姆雷特》 写 于
シェイクスピア Dem.P Clf 『ハムレット』 書く に
1599 至 1602 年 間.
1599 まで 1602 年 あいだ
「シェイクスピアのこの『ハムレット』は 1599 年から 1602 年頃に書かれた」

したがって, b-非同格型に用いられる際, NP₁ が名詞句全体の指示対象の所有主に当たる場合を除き, 指示詞がすべて制限的であると考えられる.

4.2. 「这」「那」の有標的用法の考察

本節では, 中国語の指示詞「这」「那」の有標的用法を考察する. 以下の 4.2.1 節では外部指示用法, 4.2.2 節では照応用法, 4.2.3 節では認識用法の場合について分析する. なお, 「这」「那」は日本語の「この野郎!」のように, 感嘆・間投表現に用いられる用法を持つが, 日本語の場合と共に次の第 6 章「その他の有標的用法」で検討する.

4.2.1. 外部指示用法

外部指示用法において, 中国語の指示詞「这」「那」の有標的用法は, 非制限的・非情意的な場合に限られ, 非制限的・情意的および制限的・情意的な用法は見られない. 外部指示用法における非制限的な「这」「那」は日本語の「この」「その」「あの」と同様に, 共起する名詞句に対して, 指示対象に関する発話現場の情報 (話し手からの距離の遠近など) を付加することにより, 冗長的な言語的説明を回避する機能を持つ. 以下の 4.2.1.1 節では固有名詞を伴う場合, 4.2.1.2 節では総称表現に用いられる場合について説明する. なお, 4.1 節で言及したように, 一般に, 中国語の指示詞「这」「那」は直接人称代名詞を主要部にとることができない.

4.2.1.1. 固有名詞を伴う場合

次の (4.51) における「这」は固有名詞「明先生 (明さん)」を非制限的に修飾している. (4.51) において, 話し手 (梁の奥さん) は「明先生 (明さん)」が迷子になった自分の子供を連れてきてくれたのを見て, 「明先生 (明さん)」に感謝している. そのあと, 話し手の夫の梁さんも会話に入り, 事情を聞いている. そこで, 話し手は非制限的な「这」を用いることにより, 指示対象に関する現場情報を「明先生 (明さん)」という名前と結びつけ, 「今私が指しているこの人物=明さん」と伝えていると考えられる. 結果, 話し手は指示対象を全く知らない聞き手に対して, 指示対象 (「明先生 (明さん)」) に関する紹介・説明を

簡潔に行うことができる。

- (4.51) (梁とその奥さんと息子はパーティーにいる。3人は明誠に会ったことがない。梁が同僚と話し合っているとき、梁の息子がひとりで遊びに行き、両親のそばから離れた。梁の奥さんは息子がいないのに気付いて、ひとりで焦って探しているところ、明誠が迷子になった梁の息子を持ってきた。)

梁の奥さん： 谢谢 先生 啊， 您 贵姓 啊？

ありがとう Voc.Masc.Hon DP Pro.2.SG.Hon Hon.姓 DP

「ありがとうございます。お名前をお伺いしてもよろしいでしょうか？」

明誠： 我 姓 明。

Pro.1.SG 姓 明

「私は明といいます」

梁の奥さん： 啊， 明-先生， 谢谢 你 啊，

DP 明-さん.Masc ありがとう Pro.2.SG DP

明-先生。

明-さん.Masc

「あ、明さん。ありがとうございます、明さん」

(そのとき、梁が来て、どうしたと聞いて、梁の奥さんは事情を簡単に説明したあと、梁に言う)

梁の奥さん： 多-亏 这 位 明-先生。

多い-おかげだ Dem-P Clf.Hon 明-さん.Masc

「この明さんのおかげです」

(《伪装者》第5話、一部改変、丸括弧は筆者による)

次の(4.52)に示すように、遠称の「那」も同じ用法を持つ。

- (4.52) (話し手からやや離れている人物を指して)

那 位 王-老师 带 我 来 的。

Dem.D Clf.Hon 王-先生 連れる Pro.1.SG 来る DP

「その／あの王先生が私を連れてきてくれました」

この用法における「这」「那」の選択は、無標的な外部指示用法の場合と同じく、話し手が指示対象に対する遠近の認識により決められる。

4.2.1.2. 総称表現に用いられる場合

中国語は日本語と同様に、名詞の単数・複数の屈折変化もなく、冠詞も持たないが、数詞と分類辞との組み合わせにより、指示対象の単数・複数を表すことができる。以下の(4.53)は単数、(4.54)は複数の例である。

(4.53) 有 (一) 个 学生 在 外头 等 你 呢。

ある 一 Clf 学生 Loc 外 待つ Pro.2.SG DP

「(ひとりの) 学生が外で待っていますよ」

(4.54) 有 几 个 学生 来 了。

ある いくつ Clf 学生 来る Pfv

「数人の学生が来ました」

種を指し示す際に、裸の名詞句、あるいは上記(4.53)におけるような「一 + 分類辞 + NP」の形式を用いることがある。前者は(4.55)、後者は(4.56)に示される。

(4.55) 学生 就 该 好-好 学习。

学生 まさに すべき よく-よく 勉強する

「学生はちゃんと勉強するべきだ」

(刘丹青 2002: 411, 下線・グロス・翻訳は筆者による)

(4.56) 一 个 学生, 就 应当 刻苦 学习。

一 Clf 学生 まさに すべき 一生懸命 勉強する

「学生は一生懸命勉強するべきだ」

(ibid.: 418)

さらに、指示詞による「这・那 (+些)+総称 NP」という形を用いて種を指示することもある(方梅 2002: 348, 刘丹青 2002, 劉 2013 参照)。例えば、次の(4.57)において、「那些吉娃娃 (あのチワワ)」は「チワワ」という種を指示している。遠称指示詞「那」は総称名詞「吉娃娃 (チワワ)」を非制限的に修飾していると解釈することができる。

(4.57) A: 我 的 同事 上星期 买 了 一 条 吉娃娃。

Pro.1.SG の 同僚 先週 買う Pfv 一 Clf チワワ

「私の同僚は先週チワワを買った。」

B: 那 些 吉娃娃 真 是 可爱 呢!

Dem.D Quant.PL チワワ 実に Cop かわいい DP

「あのチワワって本当にかわいいよね。」

(劉 2013: 180-181, グロスは筆者による)

そして、次の (4.58) に示すように、「这」「那」が総称表現に用いられる際に、複数の数量辞「些」を省略することがある。

(4.58) 这 蛇 是 挺 可怕 的。

Dem.P ヘビ Cop とても 怖い DP

「ヘビって、確かに怖いよね」

(刘丹青 2002: 416, 下線・グロス・翻訳は筆者による)

しかし、以下の (4.59) に示すように、「お金」など英語の不可算名詞のように、ひとつひとつ数えることが難しい対象に対して、指示詞と総称名詞とのあいだに「些」を入れることはできない。「些」を用いた「这些钱 (このお金)」は総称的な解釈ができず、特定のお金を指すという制限的な解釈を受けることになる。

(4.59) 这 (*些) 钱 啊, 可 是 (个) 好 东西!

Dem.P Quant.PL 金 DP 確かに Cop Clf よい もの

「金って、本当にいいものだ!」

上記 (4.57-59) から分かるように、「这」「那」は日本語の「この」「その」「あの」と同様に、総称名詞句を非制限的に修飾することができる。なお、上記 (4.57-59) はすべて感嘆・評価的な内容に用いられる例であるが、総称表現に用いる非制限的な「这」「那」は述語が評価的でないものでも用いられる (劉 2013: 179-180)。例えば、次の (4.60) において、「那」は「電動自転車」という種を非制限的に修飾し、「郷鎮企業が製造している」という事実を客観的に述べるのに用いられている。よって、このような非制限的指示詞は非情意的と見なすことができる。

(4.60) A: 我 的 同事 最近 买 了 一 辆 电动自行车。

Pro.1.SG の 同僚 最近 買う Pfv 一 Clf 電動自転車

「私の同僚は最近電動自転車を買った。」

B: 你 知道, 那 些 电动自行车 都 是

Pro.2.SG 知る Dem.D Quant.PL 電動自転車 すべて Cop

乡镇企业 制造 的。

郷鎮企業 製造する DP

「あの電動自転車って全部郷鎮企業が製造しているのだよ。」

(劉 2013: 179-180, 一部改変, グロスは筆者による)

上記 (4.60) は照応的な用例であるが, 外部指示用法にも, 総称表現に用いる非制限的な「这」「那」が見られる. その場合, 固有名詞を伴うときと同様に, 指示詞は指示対象に関する現場情報を共起する名詞句と関連づける機能を持つと考えられる. 例えば, 以下の (4.61) では, 話し手は非制限的指示詞を用いて, 現場に見える特定の宅配便のバイクを通じてそれが属す「宅配便のバイク」という種を指示している.

(4.61) (町に走っている宅配便のバイクを見て)

{这/那} (些) 快递-车 现在 真 是 到处
Dem.P/Dem.D Quant.PL 宅配便-車 现在 実に Cop あっちこっち
都 能 看见.
すべて できる 見かける
「宅配便のバイクって, 今のところあっちこちに見えるよね」

次の (4.62) も同様である. (4.62) では, 話し手は非制限的な「这」により, 自分の指さしているミドリガメを通して, ミドリガメという種を指示している. 第 3 章で述べたように, 日本語の「この」「その」「あの」が総称名詞を伴う場合, 非制限的解釈と下位分類を指し示すような制限的解釈に曖昧性が生じることがある. この点に関しては, (4.62) における中国語の指示詞は下位分類, つまり, 特定の種類のミドリガメを指示する解釈を受けることができない. 下位分類のミドリガメを指示するためには, 種類を表す分類辞「种 (種)」を入れる必要がある.

(4.62) (A と B は友人であり, A の家で話している. A はミドリガメを飼っている. A がそのミドリガメを指さして, B に言う)

A: 这 巴西龟 据说 是
Dem.P ミドリガメ (ミシシippアカミミガメ) らしい Cop
外来種, 中国 原本 是 没有 的.
外来種 中国 もともと Cop ない DP
「このミドリガメって, 外来種で, 中国語ではもともいなかったらしい」

そして, (4.62) に示すように, 外部指示用法において, 中国語の指示詞が総称表現を非制限的に修飾する際, 客観的な記述においても容認されるため, 非情意的と見なすことができる. なお, このような場面における指示詞「这」「那」の選択は, 話し手が現場で指して

いる個体 ((4.61) では話し手が現場で見かける特定の宅配便のバイク, (4.62) では話し手が指さしている特定のミドリガメ) に対する遠近の認識による。

4.2.2. 照応用法

照応用法において、日本語の場合と同様に、中国語の有標的指示詞の使用も非制限的・非情意的、非制限的・情意的、制限的・情意的という 3 つの場合に観察され、それぞれ以下の 4.2.2.1 節, 4.2.2.2 節, 4.2.2.3 節で詳しく説明する。

4.2.2.1. 非制限・非情意的な場合

照応用法において、日本語と似ていて、中国語の「这」「那」も非制限的・非情意的に用いられることがある。以下の 4.2.2.1.1 節では固有名詞を伴う場合, 4.2.2.1.2 節では総称表現に用いられる場合について説明する。

4.2.2.1.1. 固有名詞を伴う場合

固有名詞を非制限的に修飾する場合、「这」「那」は、第 3 章で述べた日本語の繰り返し用法と類似した機能を持つ。すなわち、共起する固有名詞と先行文脈との関連性をマークすることにより、相手の理解を容易にする機能である。例えば、次の (4.63) では、話し手の梁仲春は先行発話において「孤狼」というスパイに言及している。聞き手の阿誠が「孤狼」のことを聞いたことがなかったため、話し手は「孤狼」を話題として取り立てる際に、非制限的な「这」を用いることにより、「孤狼」と先行文脈との関連性をマークし、「さっき言及した『孤狼』と聞き手に提示していると考えられる。その結果として、聞き手の指示対象に対する解釈が容易になる。

(4.63) (阿誠と梁仲春が話している。談話中、梁仲春が最近「孤狼」というスパイが現れたという情報を阿誠に伝えた。阿誠はそのスパイのことを全く知らない。)

阿誠 惊-疑 道：“ ‘孤狼’? ! ”

阿誠 驚く-疑う 言う 孤狼

「阿誠が驚いて、聞く『孤狼?』」

梁仲春 点点头, 轻-声 道：“ 这 个 ‘孤狼’

梁仲春 頷く 軽い-声 言う Dem.P Clf 孤狼

曾经 在 远东战役 中 服役, 立-过 军-功。 [...]

かつて Loc ソ連対日戦争 なか 服役する 立てる-Exp 軍-功績

「梁仲春は頷いて、小声で言う『この「孤狼」はソ連対日戦争に参加して、功績のあった者だ。 [...]』」

(张勇 2015 《伪装者》, 丸括弧は筆者による ; (1.32) 再掲)

ここの「这」は「那」に置き換えることができない。すなわち、話し手は自分自身が指示対象を同定できるが、聞き手は同定できないと想定する場合、「这」は問題なく用いられるのに対して、「那」の使用は比較的容認されにくい。この点では、無標的な場合とは異なる。第 2 章で説明したように、無標的な照応用法においては、話し手が自分のみ指示対象を同定できると想定する場合、「这」「那」のいずれも用いられる (以下表 4.2 参照)。

表 4.2. 会話的な照応用法における「这」「那」(1)

話し手は指示対象を同定できるが、聞き手は指示対象を同定できないと話し手が想定する場合	指示詞
制限的・非情意的 (無標的) な場合	这, 那
非制限的・非情意的な場合	这

一方、話し手は指示対象を同定できないが、聞き手は同定できると話し手が想定する場合、次の (4.64) に示すように、「这」「那」の両方が非制限的に用いられる。

(4.64) (B は派遣社員であり、A の会社に派遣された。B は会社に入ったばかりで、関連手続きに問題が生じたため、先輩の A に相談に乗ってもらう。)

A: 这 (个) 事儿 你 得 去 找
 Dem.P Clf こと Pro.2.SG しなければならない 行く さがす
 人事 的 王-部长, 他 是 负责人.
 人事 の 王-部長 Pro.3.SG.Masc Cop 責任者
 「このことに関しては、人事の王部長に聞かないと、彼が担当者だから」

(B は王部長のことを全く知らず、A に聞く)

B: {这/那} 位 王-部长 怎么 联系 啊?
 {Dem.P/Dem.D} Clf.Hon 王-部長 どう 連絡する DP
 「{この/その} 王部長にはどう連絡すればいいですか?」

(4.64) では、A により会話に導入された王部長に関して、話し手 B は全く知らない。そこで、話し手は自分が全く知らない対象を非制限的指示詞で指示するとき、「这」「那」のいずれも容認される。

また、聞き手は指示対象を知っており、話し手は指示対象を直接知らず、何らかの事情により名前を知っている場合も同様に、非制限的な「这」「那」を用いることができる。例えば、次の (4.65) では、話し手の警察官は王梅という女性の行方を調べている。話し手はその女性を直接知らないが、名前などの個人情報のある程度把握している。ここで、話し手は聞き手 B の答えにより、聞き手が「王梅」に会ったことがあり、指示対象を同定できると理解したうえで、非制限的指示詞を用いてその名前を繰り返している。この場面にお

いても、「这」「那」のいずれも自然である。

(4.65) (A は警察官であり、「王梅」という女性の行方を調べるために B の経営している店を訪ねる。)

A: 昨天 是-不-是 有 个 女孩子 来 过?
 昨日 Cop-Neg-Cop ある Clf 女の子 来る Pfv
 「昨日、女の子が来ましたでしょう？」

B: 对, 叫 王梅.
 正しい 呼ぶ 王梅
 「ええ、王梅っています」

A: {这/那} (个) 王梅 是 几点 来 的?
 {Dem.P/Dem.D} Clf 王梅 Cop 何時 来る DP
 「{この/その} 王梅は何時に来ましたか？」

よって、聞き手は指示対象を同定できるが、話し手は同定できない、または確定できないと話し手が想定する場合、「这」「那」のいずれも非制限的・非情意的に用いられる。第 2 章で説明したように、同じような場面において、無標的な指示詞を用いる際には、近称の「这」は容認されにくく、遠称の「那」しか用いられない。非制限的・非情意的な場合と無標の場合における「这」「那」の分布の違いは次の表 4.3 に示される。

表 4.3. 会話的な照応用法における「这」「那」(2)

聞き手は指示対象を同定できるが、話し手は指示対象を同定できないまたは確定できないと話し手が想定する場合	指示詞
制限的・非情意的(無標的)な場合	那
非制限的・非情意的な場合	这, 那

他方、指示詞が非制限的に修飾する固有名詞に対して、話し手も聞き手もその指示対象を知っていると話し手が想定する場合、無標的な場合と同様に、遠称の「那」を用いるのが一般的である。例えば、以下の(4.66)において、話し手と聞き手は共に指示対象の王教授を知っている。話し手 B が A により導入された「王教授」という固有名を繰り返す際、非制限的な「那」を用いることができる。ここでは、近称の「这」が用いられにくい。

(4.66) (A と B は同じ学校の先生である。2 人とも王教授のことを知っており、面識がある。王教授は去年 A と B の学校で講演を行ったことがある。B はその講演を聴いたが、A は出張中で聴けなかった。)

A: 去年 王-教授 来 我-们 这儿 时
 去年 王-教授 来る Pro.1.SG-Pro.PL Dem.P とき

我 正好 在 出差, 真 可惜.

Pro.1.SG ちょうど Prog 出張する 実に 惜しい

「去年, 王教授がうちの学校に来たとき, 私がちょうど出張中で, (講演を聴けなくて) 惜しかったな」

B: 你 不-知道 么? {*这/那} 位 王教授

Pro.2.SG Neg-知る DP Dem.P/Dem.D Clf.Hon 王-教授

下 个 月 又 要 来 我-们

次 Clf 月 また もうじき 来る Pro.1.SG-Pro.PL

学校 做 演讲 了.

学校 する 演説 DP

「知らないの? {*この/その/あの} 王教授が来月またうちの学校に来て演説をするのよ」

また, 先行文脈に導入された名前に対して, すべての談話参加者がその指示対象を同定できると想定されるが, 話し手がその名前をよく知らないまたは覚えていない場合も同様, 照応的・非制限的な「那」が用いられ, 近称の「这」が容認されにくい. 例えば, 次の (4.67) では, 話し手が夫の B の同僚が電話してきたことを話している. その同僚が前に B を家に送ってくれたことがあるため, A は指示対象を知っており, 同定できるが, 名前をよく覚えておらず, 最初の発話では「那个同事 (あの同僚)」で指示している. そこで, B に同僚の名前を提示されたあと, A は非制限的指示詞を用いてその名前を繰り返している. この「那」も, 上記 (4.66) の場合と同様に, 「这」には置き換えられない.

(4.67) (A と B は夫婦である. B が前に酔っ払ったときに, 同僚に家まで送ってもらったことがある. その同僚が今日電話してきたことについて, A が B に言う)

A: 上回 送 你 回来 那 (个) 同事——

前回 送る Pro.2.SG 帰る Dem.D Clf 同僚

「前回あなたを送ってくれたあの同僚」

B: 王立?

王立

「王立?」

A: 对, 那 (个) 王立 今天 打 电话 找

正しい Dem.D Clf 王立 今日 打つ 電話 さがす

你 来着.

Pro.2.SG Pfv

「そう, その/あの王立は今日あなたに電話してきたの」

ただし、先行文脈に導入された名前に関して、すべての談話参加者がその指示対象を知っている場合でも、話し手のなんらかの感嘆・感情を表すなど、情意的な場面においては、近称の「这」が例外的に容認される。例えば、上記 (4.66) の B の発話を次の (4.68) のように、評価・感嘆を表すような内容に変えると、非制限的な「这」が自然に用いられるようになる。すなわち、非制限的・情意的用法に当てはまる。この用法に関しては、次の 4.2.2.2 節で具体的に説明する。

(4.68) (A と B は同じ学校の先生である。2 人とも王教授のことを知っており、面識がある。王教授は去年 A と B の学校で講演を行ったことがある。B はその講演を聴いたが、A は出張中で聴けなかった。)

A: 去年 王-教授 来 我-们 这儿 时
 去年 王-教授 来 我-们 这儿 时
 我 正好 在 出差, 真 可惜.
 Pro.1.SG ちょうど Prog 出張する 実に 惜しい

「去年、王教授がうちの学校にきたとき、私がちょうど出張中で、(講演を聴けなくて) 惜しかったな」

B: 是 挺 可惜 的, {这/那} 位 王教授
 Cop とても 惜しい DP Dem.P/Dem.D Clf.Hon 王-教授
 确实 很 厉害.
 確かに とても すごい

「確かに惜しかったな。{この/その/あの} 王教授は確かにすごい」

したがって、会話的な照応用法において、非制限的・非情意的な「这」「那」の使用は無標的な場合とは異なる分布を示している。これを次の表 4.4 に整理することができる。

表 4.4. 会話的な照応用法における「这」「那」(3)

話し手の想定における指示対象の同定可能性	制限的・非情意的 (無標的)	非制限的・ 非情意的
話し手は指示対象を同定できるが、聞き手は指示対象を同定できないと話し手が想定する場合	这, 那	这
聞き手は指示対象を同定できるが、話し手は指示対象を同定できないまたは確定できないと話し手が想定する場合	那	这, 那
話し手・聞き手は共に指示対象を同定できると話し手が想定する場合	那	那

すなわち、非制限的・非情意的な「这」は、話し手・聞き手の片方のみ指示対象を同定できると話し手が想定する場合に限り、用いられる。言い換えると、非制限的・非情意的用法では、照応的な「这」は、談話参加者のあいだに指示対象に対する知識の有無に関して、非対称性があることをマークすると考えられる¹²。一方、非制限的・非情意的用法において、「那」は、聞き手が指示対象を同定できると話し手が想定する場合であるなら、話し手が同定可能かどうかにかかわらず、容認される。全体的には、上記表 4.4 から分かるように、非制限的・非情意的用法においては、近称の「这」は無標的な場合と比べて、選好される傾向があると考えられる。この傾向は情意的用法にも見られる（以下 4.2.2.2 節、4.2.2.3 節参照）。

以上は対話的な場面における非制限的・非情意的な「这」「那」の使用について見てきたが、聞き手の代わりに読み手が想定されるような書き言葉的な場面では、無標的な場合と同様に、「这」のほうが一般的である（第 2 章参照）。例えば、次の (4.69) のような書き言葉的な文脈では、「这」は自然に用いられるが、「那」は容認されにくい。

(4.69) 巴甫洛夫 [...] 震惊 了。 {这/?那} 位 号称
 パブロフ 驚く Pfv Dem.P/Dem.D Clf.Hon と称する
 “[...] 坦克-战 专家” -的 巴甫洛夫, 将 整个
 戦車-戦い 専門家 -Attr パブロフ Acc すべての
 西方面軍 都 送-入 诺沃格鲁多克 “口袋” 地区。
 西部方面軍 すべて 送る-入る ナヴァフルダク ポケット 地域
 「パヴロフは [...] 驚いた。『[...] 戦車戦専門家』と称された {この/?その} パヴ
 ロフは、西部方面軍全軍をナヴァフルダクの（ドイツ軍の）包囲網に送ってしまった」

（思不群 2011 《二战全史》，一部改変）

しかし、限られてはいるが、非制限的・照応的な「那」が自然に用いられる場面として、次の (4.70) のように、時間に沿って事件を語る際に、発話時点（あるいは、物語において「現在」に相当する基準点）から過去の時間における指示対象を指示する場合、遠称の「那」が選好されることがある。「那」のこの「過去」をマークする性質は無標的な照応用法にも見られる（第 2 章参照）。

(4.70) 高崇德 始终 不 了解 王-先生 的 真实 身份,
 高崇德 ずっと Neg よく知る 王-さん.Masc の 本当 身分

12. この点に関して、中国語の「这」は、第 2 章で説明した、無標的な照応用法における英語の指示詞 this の性質とは異なる。後者は、すべての談話参加者が指示対象を同定できる場合における、話し手・聞き手のあいだの、指示対象に対する知識に非対称性をマークすることもできる。

但 她 [...] 相信 这 位 王-先生
 しかし Pro.3.SG.F 信じる Dem.P Clf.Hon 王-さん.Masc
 一定 是 一 位 爱-国-人士。
 きっと Cop 一 Clf.Hon 愛する-国-人士
 1937年 下-半年-的 一天, 那 位 王-先生
 1937年 下-半年-の ある日 Dem.D Clf.Hon 王-さん.Masc
 对 高崇德 说: [...]。
 Dat 高崇德 言う

「高崇徳は王さんの正体をずっと知らなかったが、この王さんはきっと愛国者だと信じていた。1937年後半のある日、その王さんは高崇徳に [...] と言った」

(CCL, 《作家文摘》1996)

4.2.2.1.2. 総称表現に用いられる場合

日本語と同様に、中国語においても、照応的指示詞が総称表現を非制限的に修飾する場合が観察される。次の (4.71) の先行文脈では、作者が原子力空母には多くのメリットがあることについて述べている。(4.71) における「这」は、総称名詞「核动力航母 (原子力空母)」を非制限的に修飾している。固有名詞と共起する場合と同様に、ここの非制限的指示詞「这」は先行文脈で説明された原子力空母に関する情報を、総称名詞「核动力航母 (原子力空母)」にリンクづけ、「(前文で紹介された) それらのメリットを持つ『核动力航母 (原子力空母)』」と解釈することができる。結果、読み手の理解がより容易になる。

(4.71) 虽然 核动力 具有 很 多 优点, 但 问题 是
 Conc 原子力 持つ とても 多い メリット しかし 問題 Cop
 建造 核动力-航母 必然 会 耗费 巨-资。 在
 建造する 原子力-空母 必然に であろう 費やす 巨大な-資金 Loc
 常规-动力-航母 方面 美国 已经 独步 全球 了,
 通常-動力-空母 方面 アメリカ 既に 並ぶものがない 全世界 Pfv
 还 有 必要 发展 这 种 核动力-航母 吗?
 まだ ある 必要 発展させる Dem.P Clf 原子力-空母 DP

「原子力には多くのメリットがあるが、原子力空母を建造するためには巨大なコストがかかることが問題である。アメリカは通常空母では既に全世界で並ぶものがないなかで、さらにこの原子力空母を開発する必要があるのだろうか?」

(房兵 2011 《大国航母 第1部》)

なお、中国語の「这」「那」は、先行文脈に現れた特定の人やものを先行詞として、その

個体の属す種について述べる場合にも用いられる (张伯江・方梅 1996: 156). この点では、中国語の「这」「那」は、先行文脈に現れた総称表現をそのまま受ける日本語の指示詞 (第3章参照) とは異なる。例えば、次の (4.72) の先行発話では、聞き手 B が自分の夫について話している。話し手 A は B の夫を指示する表現を先行詞に受け、非制限的な「这」を用いて「男」という種を指示し、コメントしている。(4.72) における「这」は指示対象の種と先行文脈に現れた聞き手の夫という人物に照応関係を付与する機能を持つと考えられる。結果、話題が聞き手の夫から男性という種へ変わる際に生じる、聞き手への唐突感が緩和され、聞き手の情報処理を容易にすることができる。この場合における「这」は「那」に置き換えることも可能である。しかし、「那」を用いると、話し手と指示対象の種との心理的疎遠が感じられる。よって、(4.72) の話し手を指示対象の種 (男性) に属すとすると、「这」は依然として自然に言えるのに対し、「那」の使用はやや不自然になる。

(4.72) (A と B は共に女性である。B は自分の夫の文句を言っている。A はそれを聞いてコメントする。)

A: 没-错, 这 男-的 呀, 稍微 长 点 本事,
 ない-間違い Dem.P 男-Nomz DP ちょっと 増やす すこし 能力
 就 跟着 长 脾气。
 すぐに 引き続き 増やす 気性

「そうそう、この男ってさ、ちょっと能力があつたら、すぐ偉そうになっちゃうよね」

(方梅 2002: 348, 一部改変, 丸括弧・下線・グロス・翻訳は筆者による)

次の (4.73) も同様である。(4.73) では、「这」の先行詞は前文の「T-34 型坦克群 (T-34 型戦車群)」であり、ソ連軍が手に入れた大量の T-34 戦車のことを指していると考えられる。それを先行詞に受け、非制限的な「这」がそれらの戦車の属す、T-34 戦車という種を指示している。

(4.73) [...] 他-们 [=ソ連軍] 得到 大量 威力 强大-的 T-34 型 坦克 群
 Pro.3.SG.Masc-Pro.PL もらう 大量の 威力 強大-Attr T-34 型 戦車 群
 的 支援, 这 种 T-34 型 坦克 正 是 为 在 严寒 条件
 の 支援 Dem.P Clf T-34 型 戦車 まさに Cop ために Loc 严寒 条件
 下 作战 而 特地 设计 制造 的。
 もとで 戦う Conj わざわざ 設計する 製造する DP

「彼たち (ソ連軍) は大量の、強力な T-34 戦車群の支援を受けた。この T-34 戦車はまさに厳寒下で戦争をするために、特別に設計、製造されたものである」

(思不群 2011 《二战全史》)

このように、非制限的指示詞が先行文脈で現れた、特定の人やものを表す名詞を先行詞に受け、その指示対象が属す種を指示する用法は英語にも観察される（以下第 5 章参照）。ただし、英語の **this/that** が総称名詞句を非制限的に修飾する場合、「ラブラドル」「スポーツカー」などのような、(そのカテゴリーに属す個体が皆類似していると見なされる) 比較的特定のカテゴリーしか指示することができず、下位カテゴリーを多く持つ「男」「犬」「車」のような種を指すことができない (Bowdle & Ward 1995: 35-36)。この点に関しては、日本語の指示詞も類似している (第 3 章参照)。対して、中国語の非制限的指示詞の使用は上記 (4.72) に示すように、「男」のような種を指示することができるため、英語・日本語の場合と比べて、比較的自由に用いられると考えられる。英語の場合に関しては、次の第 5 章で具体的に説明する。

4.2.2.2. 非制限・情意的な場合

4.2.2.1 節で説明したように、対話的な文脈では、非制限的な照応用法において、すべての談話参加者が指示対象を同定できると話し手が想定する場合、遠称の「那」を用いるのが一般的であるが、話し手の感嘆・評価を表すなど情意的な場面に限り、近称の「这」も容認されるようになる。つまり、非制限的・情意的用法に当てはまる。例えば、次の (4.74) では、話し手 A と聞き手 B は共に「小王 (王さん)」のことをよく知っているため、代名詞や遠称指示詞「那」を用いて指示するのが一般的であるが、下線部の発話のように、話し手の感嘆・評価を表す内容に用いられる場合にのみ、非制限的な「这」も容認され、非制限的・情意的指示詞と見なすことができる。

(4.74) (A と B は共に「小王 (王さん)」のことをよく知っている。)

A: 今天 小王 又 被 领导 训 了。

今日 王さん また Pass 上司 叱る Pfv

「今日、王さんがまた上司に叱られたの」

B: 嗯, 听-说 了. {这/那} (个) 小王 也

うん 聞く-言う Pfv Dem.P/Dem.D Clf 王さん DP

太 马虎 了, 总 犯错.

あまりに いい加減だ DP いつも 犯す-間違い

「うん、聞いたの。{この/その/あの} 王さんって、いい加減すぎるのよ、しょっちゅう間違えたりして」

したがって、会話的な場面において、談話参加者の共通知識に存在すると想定されるような対象を指示する際には、照応的な「那」は無標的、または非制限的・非情意的に用いられるのに対して、照応的な「这」は情意的にしか用いられない。「这」のこの情意的な性

質は非制限的用法のみならず、制限的な照応用法にも見られる (第 2 章参照). ただし、日本語のコと同様、近称指示詞「这」のこの特徴は書き言葉的文脈においては見られない。

なお、「这」の非制限的・情意的用法は照応用法にしか見られず、認識用法には用いられない。すなわち、上記 (4.74) に示すような情意的な「这」は先行詞なしでは用いられにくい。第 2 章で言及したように、制限的な「这」にも同じ制限が課されており、(外部指示用法でない場合) 先行詞の明示化が必要とされる。

4.2.2.3. 制限・情意的な場合

照応用法において、中国語の「这」「那」が制限的・情意的に用いられることがある。以下では、b-同格型とそれ以外の場合に分けて検討する。

まず、b-同格型でない場合、「这」「那」のいずれも制限的・情意的に用いられることがあるが、それぞれが用いられる場面や果たす機能は異なる。近称の「这」に関しては、第 2 章で述べたように、対話的な場面において、照応的な「这」が日本語のコと似ており、発話に情意的なニュアンスを加える機能を持つと考えられる。一般に、会話において、制限的な「这」が選好されるのは、話し手が指示対象に関する知識に対して、聞き手より何らかの優越を持つと話し手が想定する場合であり、その条件が満たされていない場合、遠称の「那」が用いられる。例えば、次の (4.75) に示すように、話し手自身は指示対象を同定できないが、聞き手は指示対象を同定できると話し手が想定する場合、近称の「这」が用いられない。

(4.75) (A が映画館でカバンをなくしたあと、サービスカウンターに行って、その従業員 B に言う)

A: 我 包 没 了.

Pro.1.SG カバン ない Pfv

「私のカバンがなくなってしまいました」

B: { *这/那 } 包 什么 颜色?

Dem.P/Dem.D カバン なに 色

「{*この/その} カバンはなに色ですか?」

((2.39) 再掲)

しかし、次の (4.76) のように、指示対象の同定とは関係なく、話し手が先行発話で確立された指示対象の属性情報だけに基づいて主観的なコメントを述べる場合においては、情意的な「这」が容認されるようになる。すなわち、制限的・情意的用法である。

(4.76) (A と B は友人同士であり，異なる会社で働いている．A が自分のある同僚について話している．B はその同僚のことを全く知らない．)

A: 我 一 同事，经常 迟到 早退，

Pro.1.SG ある 同僚 しょっちゅう 遅刻する 早退する

但是 领导 从来 不 说 他．

しかし 上司 いつも Neg 言う Pro.3.SG.Masc

「ある同僚が頻繁に遅刻や早退をするんだけど，1 度も上司に叱られたことがないんだよね」

B: {这/那} 人 是 关系户 吧?

Dem.P/Dem.D 人 Cop コネのある人 DP

「{この/その} 人，コネでもつかって入ってきたんじゃない？」

((2.41) 再掲)

また，すべての談話参加者が指示対象を同定できる，なおかつ，すべての談話参加者がそのことを知っている場合，および，すべての談話参加者が指示対象を同定できない場合においても，制限的・情意的な「这」が用いられる (第 2 章参照)．ただし，日本語のコと同様に，「这」のこの用法は対話的な照応用法に限られ，書き言葉的な文脈には見られない．

一方，遠称の「那」が後方照応に用いられ，話し手の感嘆・感情を表す機能を持つ．一般に，中国語において，後方照応には「这」しか用いられず，遠称の「那」は容認されない (第 2 章参照)．しかし，次の (4.77) においては，「那」が後続する文 (「地球生命 [...] 蚂蚁」) と照応関係を持つ．ここで，照応する内容を中立・客観的なものに変えると，「那」の使用は不自然になり，近称指示詞「这」が義務的となる．よって，(4.77) における「那」は制限的・情意的解釈を受けると見なすことができる．この場面で，「那」を近称の「这」に置き換えると，感嘆的なニュアンスがなくなり，語用論的にはやや不自然になる．

(4.77) 我 有 那 种 感觉： 地球-生命 真的 是

Pro.1.SG ある Dem-D Clf 感じ 地球-生命 本当に Cop

宇宙 中 偶然 里 的 偶然， 宇宙 是 个

宇宙 なか 偶然 なか の 偶然 宇宙 Cop Clf

空荡荡-的 大-宫殿， 人类 是 这 宫殿 中

空っぽ-Attr 大きい-宫殿 人類 Cop Dem.P 宫殿 なか

唯一-的 一 只 小-蚂蚁。

唯一-Attr 一 Clf 小さい-蟻

「私は思った．地球の生き物って，本当に宇宙の中では，偶然の中の偶然だ．宇宙は空っぽの宮殿で，そして人間はその中のただ一匹の蟻だ，と」

(刘慈欣 2015 《三体全集》)

次に，b-同格型の場合に関しては，4.1.2 節で述べたように，指示対象が単数の人物である場合，「这」「那」は客観的・中立な文脈には用いられにくく，制限的・情意的な解釈を受けると考えられる．なお，b-同格型における指示詞はすべて照応的指示詞に該当する．例えば，以下の (4.78) における指示詞が照応的・制限的・情意的と見なされる．

(4.78) (「小王 (王さん)」は話し手・聞き手の共通の知人である．)

我 刚才 看见 小王 了．

Pro.1.SG たったいま 見かける 王さん Pfv

他 {这/那} (个) 人，真 不-错．

Pro.3.SG.Masc Dem.P/Dem.D Clf 人 実に Neg-悪い

「さっき王さんに会ったの．彼って，本当にいい人だよね」

ただし，指示対象が複数の人物，あるいは，人物でない場合，b-同格型構造は評価的な内容に限らず，客観的・中立的な文脈にも用いられるため，本稿では制限的・非情意的，つまり，無標的用法に該当することになる (4.1.2 節参照)．

上記 (4.78) のように，指示対象が 3 人称に当たる際，同格構造においては「这」「那」のいずれも用いられるが，一般に，遠称の「那」を用いると，話し手の指示対象に対する心理的な距離感が伝えられる．ただし，次の (4.79) に示すように，「那」が日本語の「あの」と似たように，話し手と指示対象とが親しい関係になっているときに用いられることもある．

(4.79) (話し手は自分の夫について話している．聞き手も話し手の夫のことを知っている．)

他 那 (个) 人，特别 固执．

Pro.3.SG.Masc Dem.D Clf 人 とても 頑固

「彼って，とても頑固なの」

(4.79) では，話し手が遠称の「那」を用いて自分の夫を指示している．ここの「那」は「这」に置き換えることも可能であるが，「那」のほうからは話し手と夫の親密・親近が感じられる．

なお，b-同格型における指示詞がすべて同格をなす名詞句と照応していると言えるが，

NP₁が1・2人称に当たる場合、1人称と共起する「この」と似たように、外部指示的な性質も同時に持つと考えられる。次の(4.80a)は「这」が2人称を伴う例である。そこで、「这」が制限的な解釈を受け、話し手の指示対象(聞き手)に対する感嘆・評価を表していると考えられる。(4.80b)に示すように、客観的な事実を中立的な態度で述べる際には、このような同格構造が用いられない。

- (4.80) a. 你 这 (个) 人 太 较真!
 Pro.2.SG Dem.P Clf 人 あまりに まじめ
 「君って、まじめすぎだよ!」
- b. ??你 这 (个) 人 是 学生.
 Pro.2.SG Dem.P Clf 人 Cop 学生
 「君って、学生だ」

1人称の場合も同様である。次の(4.81a)では、「这」が1人称を修飾しており、話し手が自分自身に対する(ネガティブな)評価を表している。

- (4.81) a. 我 这 (个) 人 比较 无聊.
 Pro.1.SG Dem.P Clf 人 わりと 面白くない
 「私って、あまり面白くない」
- b. ??我 这 (个) 人 是 学生.
 Pro.1.SG Dem.P Clf 人 Cop 学生
 「私って、学生だ」

しかし、日本語とは異なり、中国語の「这」は談話参加者の共通知識から特定の属性を喚起させるような働きを持たない。例えば、上記(4.81a)において、話し手は、自分は性格がつまらないと述べているが、その情報が談話参加者のあいだに共有されているかどうかにかかわらず、b-同格型の指示詞が用いられる。つまり、1人称を伴う「この」とは違って、中国語の場合、1人称と共起するb-同格型の「这」は、聞き手が全く知らない、話し手自身に関する新しい情報を導入する際に用いられることもあり得る。なお、4.1.2節で説明したように、1・2人称単数と共起する際には、「这」の使用が義務的であり、「那」は用いられない。

以上を踏まえると、制限的・情意的用法においては、「这」「那」のいずれも用いられることがあるが、無標的な場合と比べると、近称の「这」のほうを多用する傾向が見られる。この傾向は会話的な場面における非制限的・非情意的用法にも観察され(4.2.2.1節参照)、さらに、非制限的・情意的用法においては、近称の「这」しか用いられない(4.2.2.2節参照)。したがって、中国語指示詞の照応用法においては、無標的な場合と比べて、遠称指示

詞より，近称の「这」のほうが選好される傾向があると考えられる。

4.2.3. 認識用法

中国語において，認識用法に用いられる有標的な指示詞は非制限的・非情意的な場合に限られる。具体的には，「那」のみが非制限的・非情意的に用いられ，指示対象が談話参加者の共通知識に存在することをマークする機能を持つ。例えば，次の (4.82) において，話し手は聞き手に対して，共通の友人「小王 (王さん)」について話している。そこで，話し手は非制限的な「那」を先行詞なしで用いることにより，談話参加者の共通知識から指示対象に関する情報を活性化させ，聞き手に「あなたも知っている王さん」と提示していると考えられる。なお，(4.82) の発話が「あの王さんが喧嘩するなんて驚いた」などのような感嘆的な解釈も，話し手がただ単に自分が見た事実を客観的に述べているという解釈も可能であるため，本稿の定義によると，非情意的用法に当てはまる。

(4.82) (「小王 (王さん)」は話し手・聞き手の共通の知人である。3 人は同じ会社の同僚であり，話し手と聞き手は同じ部門，王さんは別の部門に属している。話し手は王さんの部門に書類を取りに行くとき，そこで王さんが他の人と喧嘩しているのを見た。話し手が自分の部門に戻ったあと，聞き手に言う)

我 刚才 看见 那 (个) 小王
Pro.1.SG たったいま 見かける Dem.D Clf 王さん
和 人 吵架 呢。
と 人 ケンカする DP

「さっき，あの王さんが人とケンカしているところを見たよ」

この場合においては，「这」が用いられない。第 2 章で言及したように，「这」の使用には，文脈や発話現場の状況などにより，指示対象に対する活性化が要求されるため，認識用法には用いられない。ただし，日本語の「このバカ！」のように，感嘆・間投表現に用いられる場合，この制限がなくなる。つまり，「这」とそれが修飾する名詞句とがひとつの全体として，感嘆・間投表現を構成する場合，先行詞なしで用いられることもできる。感嘆・間投表現に用いられる指示詞の用法については，次の第 6 章で説明する。

4.3. 本章のまとめ

本章では，中国語の指示詞「这」「那」の有標的な用法を考察した。考察の結果，「这」「那」の有標的な用法は外部指示・照応・認識の 3 つに分け，それぞれ次の表 4.5-7 のように整理することができる。表における該当例はすべて本章であげられたものであり，点線は該当する用法は容認されないまたは実例が存在しないことを意味する。すなわち，中国語において，「这」「那」の有標的な用法は外部指示・照応・認識用法に分布しており，非制限的・

非情意的，非制限的・情意的，制限的・情意的用法が見られる。そのうち，外部指示・認識の 2 用法における有標的指示詞は非制限的・非情意的な場合に限られ，照応用法にのみ，非制限的・非情意的指示詞だけではなく，非制限的・情意的，制限的・情意的な指示詞も観察される。この分布は日本語の場合と同じである（第 3 章参照）。

表 4.5. 外部指示用法における「这」「那」の有標的用法

有標的用法	外部指示的	例
非制限的・非情意的	固有名詞や総称名詞句に対して，発話の現場に関する指示対象の情報を付加する用法（这・那）	(4.51) など
非制限的・情意的	-----	-----
制限的・情意的	-----	-----

表 4.6. 照応用法における「这」「那」の有標的用法

有標的用法	照応的	例
非制限的・非情意的	共起する固有名詞や総称名詞句と先行文脈との関連性をマークする用法（这・那）	(4.63) など
非制限的・情意的	「这」（対話的な場面に限る）	(4.74) など
制限的・情意的	(i) 対話的な場面において，指示対象の同定が問題とはならず，先行発話で提示された属性情報に基づき，指示対象に対する主観的な感嘆・評価を表す用法（这）	(4.76)
	(ii) b-同格型の「这」「那」（単数の人物を指示する場合に限る）	(4.78) など
	(iii) 後方照応の「那」	(4.77)

表 4.7. 認識用法における「这」「那」の有標的用法

有標的用法	照応的	例
非制限的・非情意的	指示対象が談話参加者の共通知識に存在することをマークする用法（那）	(4.82)
非制限的・情意的	-----	-----
制限的・情意的	-----	-----

まず，外部指示用法において，上記表 4.5 に示すように，有標的な「这」「那」は非制限的・非情意的に用いられ，日本語の「この」「その」「あの」と類似した機能を持つ。すなわち，共起する名詞句に対して，指示対象に関する現場情報（話し手との距離など）を付加することにより，冗長的な言語的説明を回避する機能である。

次に、照応用法においては、上記表 4.6 から分かるように、非制限的・非情意的、非制限的・情意的、制限的・情意的な用法が観察される。第 1 に、非制限的・非情意的指示詞として、「这」「那」は日本語の有標的指示詞に見られる繰り返し用法と近い機能を持つ。すなわち、共起する名詞句と先行文脈との関連性をマークすることにより、聞き手の理解を容易にする機能である。第 2 に、すべての談話参加者が指示対象を同定できると話し手が想定する場合、「这」の非制限的な使用は話し手の感嘆や感情などを表す、情意的な場面に限られ、つまり、非制限的・情意的用法に当てはまる。第 3 に、「这」「那」がそれぞれ制限的・情意的に用いられることがある。前者に関しては、一般に、対話的な場面において、制限的な「这」が選好されるのは、話し手のみが指示対象を同定できる、または、すべての談話参加者が指示対象を同定できるが、聞き手がそのことをよく知らないと言手手が想定する場合であるが、その条件が満たされていない場合、制限的な「这」の使用は日本語のコと類似し、発話に情意的な意味を加えることができる。ただし、「这」のこの用法は、指示対象の同定可能性が問題とはならず、先行発話で確立された指示対象の属性情報だけに基づいてコメントする場合に限られる。そして、日本語のコと同様、新聞記事、論説文など書き言葉的な場面においては、「这」のこの情意的な性質は見られない。一方、遠称の「那」の制限的・情意的用法は後方照応に見られ、話し手の感嘆・感情を表す機能を持つ。最後に、中国語においては、日本語・英語には見られない、b-同格型構造を持っている（以下 (4.83) 参照）。

(4.83) [NP₁]同格 1(主要部) + [[这・那 ((+数詞)+分類辞)] + [NP₂]]同格 2(修飾部)

NP₁ の指示対象が単数の人物に当たる場合、b-同格型に用いられる指示詞は必然的に情意的な意味を表し、制限的・情意的指示詞に該当する。

認識用法において、「那」は非制限的・非情意的に用いられ、指示対象が談話参加者の共通知識に存在することをマークする機能を持つ。近称の「这」は認識用法には用いられない。

なお、有標的用法における近称指示詞「这」、遠称指示詞「那」の使用・選択に関して、外部指示・認識の 2 用法においては無標的な場合とはほぼ同じであると考えられる。すなわち、外部指示用法では、有標的な「这」「那」の選択は無標的な場合と同様に、話し手の指示対象（総称表現に用いられる場合は話し手が現場で指している個体）に対する遠近の認識により決められる。認識用法では、有標・無標的用法にもかかわらず、遠称の「那」しか用いられない。対して、照応用法における有標的（特に情意的）指示詞の使用に関しては、無標的な場合とは異なる分布が観察され、特に近称の「这」が選好される傾向がある。

5. 英語の指示詞 *this*・*that* の有標的用法

第 1 章で言及したように、英語の指示詞 *this*・*that* の情意的用法を考察する先行研究が近年増えてきた。そのなかで、Lakoff (1974), Bowdle & Ward (1995), Potts & Schwarz (2010) などがあげられる。これらの研究では、指示詞の制限的・非制限的用法の区別は扱われていないが、議論された用例のなかの多くは、本稿の非制限的・情意的なものに該当する。しかし、非情意的な非制限的用法に関しては、対象として議論する研究は管見の限り見当たらない。しかし、第 1 章で説明したように、英語の非制限的指示詞が非情意的に用いられる例も実際観察される。本章では、英語における有標的指示詞に関する先行研究を概観したうえで、*this*・*that* の有標的用法を考察する。

5.1. 先行研究

Lakoff (1974) を始め、先行研究に検討された情意的用法は大まかに 2 種類に分かれる。第 1 に、冠詞 (*the*, *a/an*) など他の限定詞と並行的に置き換えられる場合、指示詞は情意的な意味を伝達すると指摘されている (Lakoff 1974, Acton & Potts 2014)。具体的には、*this* は談話参加者に臨場感 (*vividness*) を与え、話し手と聞き手との連帯感を引き起こすことができる (Lakoff 1974: 347, Acton & Potts 2014: 6)。例えば、次の (5.1) において、指示詞 *this* と不定冠詞の両方が用いられるが、*this* のほうが発話を生き生きと描いていると指摘されている (Lakoff 1974: 347)。

(5.1) He kissed her with { this unbelievable passion
 { an
 { *the

(Lakoff 1974: 347, 下線は筆者による)

一方、*that* は話し手と聞き手との親近 (*closeness*)・仲間意識 (*camaraderie* or *solidarity*) をマークする機能を持つ (Lakoff 1974: 351)。例えば、(5.2) は男性の話し手が男性の運転手に対する発話であり、*that* は男性間の仲間意識を示すために用いられていると考えられる。しかし、男性の話し手が女性の運転手に対して発話する場合には、(5.2) における *that* の使用が難しくなる。(5.3) における *that* も類似している。ここの *that* は *your* に置き換えることもできるが、*that* を用いたほうが、話し手の聞き手に対する関心・同情が感じられるという (Lakoff 1974: 351)。

(5.2) Check that oil? (ibid.: 351, 下線は筆者による)

(5.3) How's that throat? (ibid.)

しかし、このような用法は指示詞の有標的用法というより、Grice の *conversational*

implicature (会話の推意) の理論によって説明される。Grice (1975: 45) によると、談話参加者は互いに何らかの原則に従ってコミュニケーションを行うように期待されている。すなわち、参与している会話において、暗黙の目的や方向に基づき、その場面に求められたように貢献 (発話) するということである。Grice はそれを協調の原理 (Cooperative Principle) と定義している。協調の原理はさらに Quality, Quantity, Relation, Manner という 4 つの格律に分けられ、特定の格律に従うあるいは意図的に違反することによって、特定の推意が生じる。

Levinson (2000) はこの 4 つの格律をさらに (5.4) の 3 つに整理した。

(5.4) *Heuristic 1*

What isn't said, isn't.

Heuristic 2

What is simply described is stereotypically exemplified.

Heuristic 3

What's said in an abnormal way, isn't normal; or Marked message indicates marked situation.

(Levinson 2000: 31-33)

(5.4) を踏まえると、(5.1-3) における指示詞の解釈は上記 Heuristic 3 により説明される。すなわち、(5.1-3) のような場面において、冠詞や *your* などの限定詞は普通の言い方、指示詞は有標的な言い方として見なされる。話し手が有標的な言い方 (*this/that*) を用いることにより、有標的な意味 (談話参加者間の親近・仲間意識) を伝達していると考えられる。

同じ現象が指示詞に限らず、他の名詞句にも観察される。例えば、次の (5.5) は Fillmore (1997: 119) であげられた用例であり、夫が妻に対して、娘が何か立派なことをしたあとの発話である。そこで、指示対象が話し手の娘であることが談話参加者のあいだに明らかであるため、一般的には *my daughter* で指し示す必要がない。話し手が故意に *my daughter* という普通でない言い方を用いることにより、自分と娘の親近を強調し、娘が立派なことをしたのは自分のおかげであるなどのメッセージを伝達していると考えられる。逆に、同じ話し手が、娘が何か悪いことをしたあとに、(5.6) に示すように、*your daughter* を意図的に用いることにより、自分ではなく聞き手の妻と娘の関係を強調し、娘のしたことは妻の責任であり、自分とは関係ないという態度を示すことができる。

(5.5) Look at what my daughter did. (Fillmore 1997: 119, 下線は筆者による)

(5.6) Look at what your daughter did. (ibid.)

中国語の場合も同様である。上記 (5.5-6) のような場面において、中国語もほぼ同じよ

うな言い方ができる ((5.7) 参照).

- (5.7) a. (娘が賞を受けた. 父親が母親に言う)
你 看-看 我 _____ 姑娘, 多 厉害!
Pro.2.SG 見る-見る Pro.1.SG 娘 なんと すごい
「見ろよ, 俺の娘だけ, すごいだろう!」
- b. (娘が入学試験で不合格になった. 父親が母親に言う)
你 看-看 你 _____ 姑娘!
Pro.2.SG 見る-見る Pro.2.SG 娘
「お前の娘を見ろよ!」

日本語にも類似した現象が見られる. 次の (5.8) における「この人」の解釈は同じ原理により説明される.

- (5.8) A: [手嶋の企画が] 成功するかどうかはわからない.
B: いや……けど……
A: 手嶋に朝倉屋を任せることにしたのは, リノベーションってものがそう甘いものじゃないってことを知ってもらうためでもある.
(C が B に向かって)
C: この人 [=A] さ, 結構冷たい人間だよ.
(『ホタルノヒカリ』第2話. 丸括弧は筆者による)

(5.8) の B と C は同じ会社の同僚であり, A は課長で, この 2 人の上司である. そして, A と C は長年の友人でもあり, 親しい関係にある. 3 人は居酒屋で一緒に座って, 飲みながら手嶋という新人のことについて話している. 会社では, C は A のことを「課長」と呼ぶことが多いが, ここでは, あえて「この人」で指示することにより, 2 人の親しみ, あるいは仲間意識が示されていると考えられる.

なお, 「あれ」「これ」が人称詞として用いられる場合も似た用法が見られる. 「あれ」「これ」は一般的にはものを指示するため, 人に用いられると, その人をもののように表す, 軽蔑的なニュアンスが感じられる. しかし, 次の (5.9-10) においては, 「あれ」「これ」が軽蔑的な意味を表すとは考えにくく, むしろ, 話し手が意図的に有標的な形式「これ」「あれ」を用いて指示対象の人物への親密・親近を示していると解釈することができる. (5.9) の「あれ」は話し手の娘「サキさん」, (5.10) の「これ」は話し手の友人 B を指示している.

- (5.9) A: サキさんをご存じないんですね。
 B: 彼女には黙っててもらいたいなあ。 あれの母親と俺だけの秘密でね。
 (『古畑任三郎 2nd season』, 第 8 話)
- (5.10) (A, B, C は友人同士である。 A はずっとふざけている B を指して, 笑いながら C に言う)
これ, どうにかしてくれ!

したがって, 本稿では, 上記 (5.1-3), (5.8-10) におけるような指示詞を有標的指示詞とは認めない。

英語の先行研究において議論されてきた, 情意的指示詞の第 2 の用法として, 固有名詞などそれ自体で指示を完結する名詞句にさらに指示詞を付ける場合, 指示詞 (this/that) は話し手の指示対象に対する感情・評価を表すと指摘されている (Lakoff 1974 ; (5.11), (5.12) 参照).

- (5.11) I see there's going to be peace in the mideast.
This Henry Kissinger really is something!
 (Lakoff 1974: 347, 下線は筆者による ; (1.22) 再掲)
- (5.12) That Henry Kissinger sure knows his way around Hollywood! (ibid.: 352 ; (1.28) 再掲)

この用法において, 指示詞の使用には以下の 2 つの制限が課されている。ひとつは (感情的に) 中立・客観的な解釈を受ける場合には用いられないことである (Lakoff 1974: 353, Bowdle & Ward 1995: 33-34, Potts & Schwarz 2010: 5-7, Wolter 2006: 82)。第 1 章で述べたように, (5.13) のように, 中立的な解釈を受ける場合, 非制限的な that は容認されない。ただし, 指示対象 (Henry Kissinger) の身長が高くて羨ましいなど話し手が何らかの感情をこめて言う場面なら, (5.13) が言えるようになる。

- (5.13) *That Henry Kissinger is 5'8" tall. (ibid. 353 ; (1.29) 再掲)

もうひとつの制限は指示対象が談話参加者のあいだによく知られていると話し手が想定する場合に限られるということである (Wolter 2006: 83)。例えば, 次の (5.14) に示すように, 聞き手の A が John Smith を知らない場合では, 情意的な that を用いると発話は不自然になる。

- (5.14) A: Who is John Smith?
 B: #That John Smith is a really great guy!
 (Wolter 2006: 83)

つまり、このように用いられる情意的指示詞は談話参加者の共通記憶から指示対象を活性化させるため、先行詞を必要としない。むしろ、先行詞を持たない場合が多いという (Potts & Schwarz 2010: 4)。上記 (5.11-12) における指示詞も先行詞を持たない例である。よって、本稿の分類によると、上記 (5.11-12) に示すような指示詞は認知的・非制限的・情意的であると見なすことができる。しかし、この制限は指示対象が会話の現場に存在する場面ではなく。つまり、外部指示用法における情意的な指示詞は聞き手が指示対象をよく知らない場面でも用いられる。具体的には次の 5.2.1 節で説明する。

また、Bowdle & Ward (1995) では、(5.15) における *those* のように、英語の指示詞が非制限的に用いられ、種 (*kind*) を総称的に指し示す用法があると指摘されている。英語において、種 (*kind*) を指示する際、一般的には裸の複数名詞句 (*bare plural NPs*)、不定冠詞あるいは定冠詞を伴う単数名詞句 (*singular NPs*) が用いられるが、Bowdle & Ward (1995) は、以下 (5.15-16) に示されるように、指示詞が非制限的に用いられ、種を指示する用法があると指摘している。Bowdle & Ward (1995) は総称名詞句を非制限的に修飾する指示詞を総称指示詞 (*generic demonstratives*) と呼んでいる。

(5.15) A: My cousin just returned from Canada with an adorable Labrador retriever puppy.

B: Those Labradors are extremely loyal, you know.

(Bowdle & Ward 1995: 34)

(5.16) [in front of a computer] This IBM Thinkpad is amazing!

(ibid.: 33)

上記 (5.15-16) に示すように、総称的指示詞は名詞句の指示対象の理解に影響を与えていないため、非制限的と見なされる。さらに、Bowdle & Ward (1995) では、英語の総称的指示詞の使用は以下の 3 つの制約を受けていると述べられている。第 1 に、総称的指示詞は評価的述語を要求する (Bowdle & Ward 1995: 33 ; (5.17) 参照)。

(5.17) A: My cousin just returned from Canada with an adorable Labrador retriever puppy.

B: #Those Labradors were first bred in Newfoundland, you know.

(ibid.: 34)

したがって、Bowdle & Ward (1995) の議論する総称的指示詞はこの制約によると、本稿における情意的指示詞の特徴と一致するため、非制限的・情意的であると見なすことができる。この点では、日本語・中国語の場合とは異なる。第 3, 4 章で説明したように、日本語・中国語の非制限的指示詞が総称表現に用いられる場合、情意的な解釈を受ける必要がなく、非制限的・非情意的用法に当てはまる。第 2 に、総称的指示詞の指示対象が談話参加者のあいだによく知られている種でなければならない (Bowdle & Ward 1995: 34)。劉 (2013: 179) はさらに、総称指示詞の指示対象は談話参加者のみならず、「社会・文化的に

確立された類でなければならない」と指摘している。第3に、第4章で言及したように、英語の総称的指示詞は指示対象の種における個体間のある程度の同一性を要求する (Bowdle & Ward 1995: 34, 37, 41)。すなわち、「犬」「車」など、下位カテゴリーを多く持ち、個体間の差異が比較的大きいと見なされる種に対して、総称指示詞の使用が容認されにくい。特に、単数の総称的指示詞は複数よりさらなる同一性を要求すると指摘されている (Bowdle & Ward 1995: 38)。この点に関しては、日本語の指示詞も類似している (第3章参照)。対して、中国語の場合、非制限的指示詞は「男」のような、比較的大きい種を修飾することもできる点で、英語・日本語の非制限的指示詞とは性質が異なる (第4章参照)。

5.2. 考察

日本語・中国語の場合と同様に、英語の *this*・*that* およびその複数形 *these*・*those* の有標的用法は外部指示・照応・認識の3用法に分布している。しかし、前者とは異なり、英語の有標的指示詞は非制限的な使用に限られ、制限的・情意的用法に該当するものは見当たらない。以下の5.2.1節では外部指示、5.2.2節では照応、5.2.3節では認識用法における英語指示詞の有標的用法を考察する。

5.2.1. 外部指示

外部指示において、*this*・*that* の有標的用法は非制限的・情意的な場合に限られる。具体的には、固有名詞を修飾する場合および総称表現に用いられる場合に分けて考えたい。まず、外部指示的な *this*・*that* が固有名詞を非制限的に修飾する際、必ず何らかの感情・感嘆的ニュアンスを加える機能を持っており、(感情的に) 中立的・客観的な解釈には用いられない。5.1節で説明したように、次の(5.18-19)の発話は先行研究においては認識的な用例としてあげられているが、(5.20)に示すように、指示詞の指示対象 (Henry Kissinger) が発話の現場にいる場合においても、似たような発話と言える。

(5.18) I see there's going to be peace in the mideast.

This Henry Kissinger really is something!

(Lakoff 1974: 347, 下線は筆者による ; (1.22) 再掲)

(5.19) That Henry Kissinger sure knows his way around Hollywood!

(ibid.: 352 ; (1.28) 再掲)

(5.20) (seeing Henry Kissinger)

{This/That} Henry Kissinger really is something!

(ibid.: 347, 一部改変)

なお、(5.20)においては、聞き手が指示対象 (Henry Kissinger) を知っている想定する場合もそうでない場合も、非制限的指示詞の使用が容認される。すなわち、外部指示におけ

る非制限的・情意的指示詞は聞き手の指示対象に対する知識の有無にもかかわらず用いられる。ただし、認識用法 ((5.18-19) 参照) と比べると、(5.20) におけるような外部指示的指示詞の非制限的な使用に関しては、容認度に個人差が見られ、やや不自然と判断する人もいる¹³。

次に、外部指示用法において、非制限的な **this・that** が総称表現に用いられる場合、Bowdle & Ward (1995) に指摘されたとおり、情意的な場面にしか許容されず、話し手の指示対象の種に対するなんらかの感情・評価を表す働きをする。

(5.21) [in front of a computer] This IBM ThinkPad is amazing!

(Bowdle & Ward 1995: 33)

(5.22) [in front of a computer] These IBM ThinkPads are amazing!

(ibid.)

(5.21) において、**this IBM ThinkPad** は現場に存在するひとつの特定のパソコンを通じて、**IBM ThinkPad** という種を指示している。非制限的な **this** が話し手の感嘆・評価を表していると考えられる。(5.22) における **these IBM ThinkPads** も同様である。**that/those** も同じように用いられることができる ((5.23-24) 参照)。

(5.23) (pointing to a computer at a distant place) That IBM ThinkPad is amazing!

(5.24) (pointing to a computer at a distant place) Those IBM ThinkPads are amazing!

Bowdle & Ward (1995: 33) では、現場のその特定のパソコンが話し手の近くにある場合は **this/these**、そうでない場合は **that/those** が選択されると述べられている。しかし、(5.23-24) のような場面において、話し手から比較的遠い場所にあるパソコンを見て **IBM ThinkPad** を総称的に指示する際、(5.24) の複数形 **those IBM ThinkPads** が問題なく容認される一方、(5.23) の単数形 **that IBM ThinkPad** の容認度に関しては揺れが見られ¹⁴、容認度がやや下がると考えられる。

5.2.2. 照応用法

照応用法において、有標的に用いられる **this・that** は非制限的・情意的な場合および非制限的・非情意的な場合に分かれる。前者においては、**this・that** の両方が用いられ、話し手の指示対象に対するなんらかの感情・感嘆を表す。一方、後者においては、**this** のみが容認され、**that** が用いられない。

13. 英語母語話者のインフォーマント 3 人 (アメリカ出身) のうち、ひとりが不自然と判断した。

14. 英語母語話者のインフォーマント 3 人 (アメリカ出身) のうち、2 人が不自然と判断した。

5.2.2.1. 非制限的・情意的な場合

非制限的・情意的に用いられる照応的指示詞に関しては、固有名詞を修飾する場合と総称表現に用いられる場合に分けて考えたい。前者において、指示詞 **this**・**that** が非制限的・情意的に用いられ、話し手の指示対象に対する何らかの感情・感嘆・評価を表す機能を持つ。例えば、次の (5.25) において、**this** が固有名詞 **Robert** を非制限的に修飾し、話し手の感嘆を表していると考えられる。ここの **this** は **that** に置き換えることができない。

- (5.25) Robert says when they get overseas there won't be any more Yankees and Southerners, just Americans. [...] He's watching out the window and reciting a poem to himself. He's a great one for poems, this Robert. He has poems for running and poems for drill and poems for going to sleep, and poems for when the corn-pones start getting him down.

(COCA, *Harper's Magazine*, 1992 (Dec), vol. 285)

一方、非制限的な **that** は、照応用法において、**this** と同じように情意的に用いられ、話し手の指示対象への感情・感嘆を表すと同時に、修飾する名詞句と先行文脈に提示された、指示対象に関する属性情報と結び付け、非制限関係節と似たような働きを果たす。例えば、次の (5.26) における **that Danny** は先行詞 (**Danny, he**) と同一指示を行うと同時に、以下の (5.27) に示すような非制限関係節と解釈することができる。そのような属性を持った **Danny** が後ろの **showing wear and tear** との内容と対比され、結果、話し手の驚きが表されている。この用法における **that** は **this** には置き換えられない。

- (5.26) [...] Danny was still trying to be in two places at once. He was racing between USC and Gramercy Tavern [...] and running himself into the ground as well. Danny, the perfectionist. Danny, the stickler for detail. Danny, the quintessential host. That Danny was showing wear and tear for the first time.

(COCA, *Town and Country*, 1998 (Nov), vol. 152)

- (5.27) *That Danny* = Danny, who is characterized by the previous context [= Danny was still trying to be in two places at once. He was racing between USC and Gramercy Tavern [...] and running himself into the ground as well. Danny, the perfectionist. Danny, the stickler for detail. Danny, the quintessential host].

(5.25-26) に示すような、非制限的・情意的に用いられる照応的な **this**・**that** は雑誌、物語など感性をこめたエッセイなどにおいて見られる。一方、英語母語話者のインフォーマントによると、話し言葉的な対話においては、先行詞を受ける非制限的な **this**・**that** の使用は比較的容認されにくいという。

次に、照応用法において、非制限的な **this**・**that** が総称表現に用いられる際に、先行研究

に指摘されたように、情意的な解釈を受ける場合に限られ、話し手の指示対象への感情・感嘆を表す。次の (5.28) においては *that*, (5.29) においては *this* が非制限的・情意的に用いられている。

(5.28) A: My roommate owns an IBM ThinkPad.

B: That IBM ThinkPad is quite popular.

(Bowdle & Ward 1995: 33)

(5.29) My roommate owns an IBM ThinkPad. This IBM ThinkPad is quite popular.

(ibid. 一部改変)

なお、上記 (5.28-29) に示すように、英語の非制限的指示詞は中国語の場合と同様に、特定の個体を指す名詞句を受けて、その個体の属す種を指示することができる (第 4 章参照)。

5.2.2.2. 非制限的・非情意的な場合

照応用法において、非制限的・非情意的に用いられるのは *this* のみであり、*that* は用いられない。具体的には、聞き手は指示対象を同定できるが、話し手自身は指示対象を特定不可または特定しにくいと話し手が想定する場合、照応的な *this* を非制限的に用いる場合がある。次の (5.30) において、話し手 (Mrs Hayes) が子供を病院に連れ、医者 George に見てもらったあとの対話である。George により会話に導入された Dr. Shepherd という新しい人物に対して、話し手は非制限的な *this* を用いて指示している。話し手の Mrs. Hayes は指示対象の Dr. Shepherd に対して全く知らず、特定することができない。

(5.30) George: [...], Mr. and Mrs. Hayes. [...] I'm gonna bring Dr. Shepherd to see you, [...]. He's the brain specialist.

Mrs. Hayes: Doctor? Is he good, this Dr. Shepherd?

(*Grey's Anatomy: Season 1 Episode 7: The Self-Destruct Button* ; (1.30) 再掲)

この用法における *this* は、無標的な場合と同様、話し手と聞き手の指示対象に対する知識の非対称性をマークしていると考えられる。第 2 章で説明したように、対話的な照応用法において、無標的な *this* の使用は話し手と聞き手のあいだに、指示対象に対する知識の非対称性があると想定される場合に限られる。ただし、非制限的な場合、指示対象に対して、話し手は知っているが、聞き手はよく知らず、指示対象を特定不可または特定しにくいと話し手が想定する場合においては、*this* の非制限的・非情意的な使用は、上記 (5.30) の場合と比べて、容認度がやや下がる。例えば、次の (5.31) では、話し手は聞き手に対して新しく入ってきた同僚 Clair Ming を紹介している。聞き手は Clair Ming のことを全く知らな

い。そこで、話し手のみが知っている対象を指示するのに、非制限的な **this** の挿入に関しては、自然であると判断するインフォーマントもいるが、やや不自然、または容認できないと判断するインフォーマントもあり、ばらつきが見られる¹⁵。

(5.31) A new faculty member has just joined our department. Her name is Clair Ming. (?This)
Clair Ming is a phonetician.

that はこの用法には用いられない。つまり、照応用法において、有標的に用いられる **that** は非制限的・情意的な場合に限られる。

5.2.3. 認識用法

認識用法における有標的な **this**・**that** に関しては、非制限的・情意的な場合にのみ観察される。まず、固有名詞を伴う場合、既に先行研究に指摘されたように、非制限的な **this**・**that** は情意的にしか用いられず、話し手の指示対象への何らかの感情・感嘆を表す機能を持つ ((5.32-33) 参照)。

(5.32) I see there's going to be peace in the mideast.

This Henry Kissinger really is something!

(Lakoff 1974: 347, 下線は筆者による ; (1.22) 再掲)

(5.33) That Henry Kissinger sure knows his way around Hollywood! (ibid. 352 ; (1.28) 再掲)

さらに、Lakoff (1974: 347) では、(5.32) の **this** は話し手の指示対象に関する考え・感情などを表す一方、(5.33) の **that** は談話参加者のあいだに共感 (emotional solidarity) を確立し、2 人が指示対象に対して同じ見方をしていることを表すとされている (Lakoff 1974: 352)。

次に、認識用法において、非制限的な **this**・**that** が総称表現に用いられる場合もある。外部指示・照応用法の場合と同様、総称表現に用いられる有標的な **this**・**that** は情意的にしか用いられない。(5.34) において、話し手は非制限的な **those** を用いて、聞き手に指示対象の種族 (Japanese people) を共通知識から活性化させ、指示している。指示詞 **those** は話し手の指示対象への感嘆・評価を表していると考えられる。(5.35) に示すように、**these** も同じように用いられる。

15. (5.31) の容認度に関して、6人のインフォーマントのうち、言える、言えない、やや不自然と判断する人がそれぞれ 2 人いる。なお、やや不自然と判断するインフォーマントのひとり (オーストラリア出身) が、(5.31) のような言い方は日常会話では普通しないが、話し手が語り手として、Clair Ming という人物に関する物語を語っている場合には自然に言えると指摘している。

(5.34) (without any Japanese people in the room, one foreign student to another foreign student)
I have lived in Japan for many years, you know. Those Japanese people are really hard-working.

(5.35) (without any Japanese people in the room, one foreign student to another foreign student)
I have lived in Japan for many years, you know. These Japanese people are really hard-working.

5.3. 本章のまとめ

本章では、英語指示詞 *this*・*that* の有標的用法に関する先行研究を概観したうえで、外部指示・照応・認識用法における有標的な *this*・*that* の機能を考察し、日本語・中国語の場合と同様に、英語の *this*・*that* およびその複数形 *these*・*those* の有標的用法は外部指示・照応・認識の3用法に分布していると述べた。しかし、英語の場合、非制限的・非情意的、非制限的・情意的、制限的・情意的な用法のうち、非制限的・非情意的、非制限的・情意的という2つの場合にのみ観察され、制限的・情意的用法に該当する用例は見られない点で、日本語・中国語の場合とは異なる。すなわち、英語の有標的指示詞は非制限的用法に限られる。具体的には、固有名詞を修飾する場合および総称表現に用いられる場合に分けられ、それぞれ以下の表 5.1, 表 5.2 のように整理することができる。

表 5.1. 固有名詞を伴う非制限的な *this/that* の用法

有標的用法	情意的	非情意的
外部指示的	<i>this</i> : (5.20)	-----
	<i>that</i> : (5.20)	-----
照応的	<i>this</i> : (5.25)	<i>this</i> : (5.30)
	<i>that</i> : (5.26)	-----
認識的	<i>this</i> : (5.18) など	-----
	<i>that</i> : (5.19) など	-----

表 5.2. 総称表現に用いられる *this/that* の用法

有標的用法	情意的	非情意的
外部指示的	<i>this/these</i> : (5.21) など	-----
	<i>that/those</i> : (5.23) など	-----
照応的	<i>this/these</i> : (5.29)	-----
	<i>that/those</i> : (5.28)	-----
認識的	<i>this/these</i> : (5.35)	-----
	<i>that/those</i> : (5.34)	-----

上記表 5.1-2 における用例はすべて 5.2 節によるものであり、点線は該当する用法が容認されないまたは実例が存在しないことを意味する。

上記表 5.2 から分かるように、総称表現に用いられる場合、非制限的な **this・that** は外部指示用法・照応用法・認識用法に分布し、非制限的・情意的にしか用いられず、話し手の指示対象の種に対する感嘆・評価を表す働きを果たす。

一方、固有名詞を伴う有標的な **this・that** に関しては、第 1 に、外部指示用法において、**this・that** の有標的用法は非制限的・情意的な場合に限られる。いずれにおいても、**this・that** の両方が用いられ、話し手の指示対象への感嘆・評価を表す機能を持つ。この場合において、聞き手が指示対象を同定できないと話し手が想定する場合でも、非制限的・情意的な指示詞を用いることができる。第 2 に、照応用法において、有標的指示詞は非制限的・情意的な場合および非制限的・非情意的な場合に分かれる。前者においては、**this・that** の両方が用いられる。**this** は話し手の指示対象に対するなんらかの感嘆・評価を表すのに対して、**that** は、話し手の何らかの感情・感嘆を表すと同時に、先行文脈で提示された指示対象の属性情報を固有名詞と結び付け、非制限関係節と類似した機能を持つ。ただし、**this/that** のこの用法は話し言葉的な会話においてはやや容認されにくい。後者の非制限的・非情意的な場合においては、**this** のみが容認され、聞き手は指示対象を同定できるが、話し手は指示対象を同定できないまたはしにくいと話し手が想定する場合、指示対象の名前を繰り返すときに用いられる。この用法における **that** の使用は許容されない。第 3 に、認識用法における有標的な **this・that** に関しては、非制限的・情意的な場合にのみ観察される。既に先行研究に指摘されたように、**this・that** は談話参加者の共通知識に存在する対象を活性化させ、話し手の指示対象への何らかの感情・感嘆を表す機能を持つ。

6. その他の有標的用法

これまでは日中英指示詞の有標的用法を第 1 章で述べた分類に従い、考察してきた。しかし、指示詞の周地的、有標的な用法はすべてこの分類には収まるわけではない。例えば、第 3 章で言及したように、日本語の「この」「あの」が一部特定の表現（主に「女」「バカ」などの軽蔑表現）と共起し、ひとつの全体をなして感嘆・間投表現として用いられることができる。このような用法は話し手の感嘆・感情につながる点では、情意的な性質を持つと考えられるが、指示詞と修飾する名詞句がひとつの感嘆・間投表現をなして単独で用いられる点では、これまで検討してきた有標的指示詞の用法とは区別される。中国語の指示詞にも感嘆・間投表現に用いられる用法を持つ。以下の 6.1 節では、感嘆・間投表現に用いられる指示詞について説明する。また、もうひとつ特殊な用法として、6.2 節では、日本語の先行研究で指摘された「カテゴリー転換」という用法について説明する。

6.1. 感嘆・間投表現に用いられる有標的指示詞

日本語と中国語の指示詞には、修飾する名詞句とひとつの全体をなして、感嘆・間投表現として用いられる用法が観察される。以下の 6.1.1 節では日本語、6.1.2 節では中国語の場合について説明する。英語の指示詞にはこのような用法を持たない。

6.1.1. 日本語の場合

以下の (6.1) に示すように、日本語において、「この」と「あの」は「女」「バカ」など、軽蔑・侮蔑のような意味を表す名詞句と共起し、名詞句全体が間投詞的に用いられ、話し手の感嘆・感情を伝える機能を持つ。

(6.1) {この／あの} {女／野郎／バカ (が) ／恩知らずめ}！

この用法では、「この」と「あの」が用いられ、「その」はこの用法を持たない。そして、「この」は現場にいる人物を指示する場合にしか用いられず、外部指示に該当する。一方、「あの」の使用は、照応・認識の 2 用法に見られる。例えば、話し手が目に見えない人物を思い出し、「あの女／バカ！」のような発話を産出することがあり得る。または、次の (6.2) に示すように、話し手が先行発話に導入された人物に対して、「あのばか野郎」と感嘆することもできる。すなわち、感嘆・間投表現に用いられる場合、「この」は外部指示、「あの」は外部指示以外の場面に用いられ、「その」は用いられないということである。

(6.2) マキシーは近づいてきて、言った。「上院議員、あんたにはちょっと不愉快なニュースが入りましたよ。おれはいまメキシコへ電話して戻ってきたところなんだが、ミゲルのおふくろは元気でぴんぴんしているそうだ。実際元気いっぱい、今日の午前中、明らかに裕福になって帰ってきたばかりの息子といっしょに宝石店へ出かけ

た。息子は非常に高価なブレスレットを母親に買ってやったという話だ」突然グレインジャーの顔からユーモアが消えた。彼はテーブルを見つめて、呟いた。「あのばか野郎...あんなによくしてやったのに」

(BCCWJ, A. J. クィネル (著), 大熊栄 (訳) 1994, 『パーフェクト・キル』)

6.1.2. 中国語の場合

日本語の「このバカ！」と似ていて、中国語の指示詞も感嘆・間投表現に用いられ、話し手の感嘆・感情を表す場合がある。しかし、第3章で述べたように、「この」「あの」は限られた表現としか共起できず、生産性が低く、指示詞より、名詞句とひとつの慣用表現として見なすことができる。対して、中国語の指示詞は軽蔑表現のみならず、「人」や「学生」などのような普通名詞や固有名詞と共起することもできる。以下では、非制限的な場合と制限的な場合に分けて検討する。

6.1.2.1. 非制限的な場合

非制限的な場合において、中国語の指示詞が固有名詞と感嘆・間投表現を構成し、話し手の感嘆・感情を伝える機能を持つ。次の(6.3)が外部指示、(6.4)では照応、(6.5)では認識的な用例である。

(6.3) (話し手は好きなサッカー選手「小王 (王さん)」の試合を見ている。王さんは調子がよくないようで、何回かミスをした。話し手はミスした王さんを見て、嘆く)

{这/??那} (个) 小王!

Dem.P/Dem.D Clf 王さん

「{この/??あの} 王さん！」

(6.4) («小王 (王さん)」は話し手と聞き手の共通の友人である。王さんはとてもお人好しで、人を拒絶することが全くできないため、同僚に仕事を押しつけられることでは毎日残業している。話し手と聞き手はそのことについて話している。談話の最後に、話し手は心配そうに嘆く)

唉, {这/??那} (个) 小王!

DP Dem.P/Dem.D Clf 王さん

「{この/??あの} 王さん！」

(6.5) («小王 (王さん)」は話し手の部下である。前日、王さんの間違いで、話し手が上司に叱られた。話し手はいきなりそのことを思い出して、腹が立って、呟く)

{这/??那} (个) 小王!

Dem.P/Dem.D Clf 王さん

「{この/??あの} 王さん！」

上記 (6.3-5) に示すように、中国語において、非制限的指示詞が感嘆・間投表現に用いられる場合、「这」は一般的に用いられ、「那」の使用はやや不自然になる。

6.1.2.2. 制限的な場合

制限的・情意的な場合に関しては、a型とb型に分けて考えたい。まず、a型の場合において、指示詞が感嘆・間投表現に用いられる用法は外部指示・照応・認識の3用法に用いられることがある。それぞれ以下の(6.6)、(6.7)、(6.8)に示されている。

(6.6) (現場に見える王さんを指して)

{这/那} (个) 笨蛋!

Dem.P/Dem.D Clf バカ

「{この/あの} バカ!」

(6.7) (王さんは話し手と聞き手の共通の友人である。聞き手は、王さんがとてもお人好しで、人を拒絶することが全くできないため、同僚に仕事を押しつけられることで、最近ほぼ毎日残業しているということについて話している。話し手はそれを聞いて、心配そうに嘆く)

唉, {这/那} (个) 笨蛋!

DP Dem.P/Dem.D Clf バカ

「{この/あの} バカ!」

(6.8) (王さんは話し手の部下である。前日、王さんの間違いで、話し手が上司に叱られた。話し手はいきなりそのことを思い出して、腹が立って、呟く)

{这/那} (个) 马大哈!

Dem.P/Dem.D Clf うっかりもの

「{この/あの} うっかりもの!」

上記 (6.6-8) に示すように、指示詞が罵り言葉など軽蔑・侮蔑の意味を表す名詞と共起する際、外部指示・照応・認識用法において、「这」「那」のいずれも用いられる。しかし、「人」のような、軽蔑・侮蔑などネガティブな意味を含まない普通名詞と共起する場合、次の(6.9)に示すように、a型においては「这」のみが自然であり、「那」は容認されにくい。

(6.9) (話し手がコーヒーを持ってタクシーを待っているとき、いきなりぶつかられて、コーヒーをこぼした。その人は何も言わずに行ってしまった。話し手はその人を見て、怒りっぽく言う)

{这/??那} (*个) 人!

Dem.P/Dem.D Clf 人

「{この／??あの} 人！」

(6.9) では、指示詞は話し手の指示対象に対する怒りを表していると考えられる。ここで、話し手と指示対象との距離が遠い場合でも、「那」を用いることはできない。なお、(6.9) のように、制限的指示詞が「人」のような、軽蔑的な意味を含まない普通名詞と共起し、間投詞的に用いられる場合、分類辞の挿入が不可となる。(6.9) のような言い方は照応用法・認識用法の場面においても容認される。

次に、b型においては、b-同格型における指示詞も軽蔑表現と共起し、感嘆・間投表現に用いられることがある(以下(6.10-12)参照)。第4章で述べたように、b-同格型における指示詞は前の名詞句と照応しているため、すべて照応用法に当てはまる。そして、b-同格型において、1・2人称単数と同格をなす場合には「这」、それ以外の場合には「这」「那」の両方が用いられる。

(6.10) 我 {这/*那} (个) 笨蛋!
Pro.1.SG Dem.P/Dem.D Clf バカ
「私ってバカ！」

(6.11) 你 {这/*那} (个) 笨蛋!
Pro.2.SG Dem.P/Dem.D Clf バカ
「あなたってバカ！」

(6.12) 小王 {这/那} (个) 笨蛋!
王先生 Dem.P/Dem.D Clf バカ
「王先生ってバカ！」

なお、次の(6.13)に示すように、NP₁が2人称単数の場合にのみ、NP₂は罵り言葉など軽蔑・侮蔑の意味を表す名詞のみならず、「人」「子供」などのような普通名詞も許容する。それ以外の場合、NP₂には「バカ」などの軽蔑表現しか容認されない。

(6.13) (母親が子供を叱っている。)
你 {这/*那} (*个) 孩子!
Pro.2.SG Dem.P/Dem.D Clf 子供
「あなたって(子)！」

そして、a型の場合と同じように、b-同格型における指示詞が「人」のような普通名詞と共起し、間投詞的に用いられる場合も、分類辞の使用が容認されない((6.9), (6.13)参照)。

以上をまとめると、感嘆・間投表現に用いられる制限的な「这」「那」の用法は、次の表6.1のように整理することができる。すなわち、中国語においては、制限的指示詞が感嘆・

間投表現に用いられる場合、外部指示・照応・認識の 3 用法に観察され、罵り言葉など軽蔑・侮蔑の意味を表す名詞と比較的共起しやすい。ただし、近称の「这」のみ、「人」のような、軽蔑的な意味を含まない普通名詞と共起することもできる。

表 6.1. 感嘆・間投表現に用いられる制限的な「这」「那」

共起する表現	軽蔑表現	軽蔑的な意味を含まない表現
外部指示用法	a 型：这，那	a 型：这
照応用法	a 型：这，那 b 型：这，那	a 型：这 (2 人称単数を指示する) b 型：这
認識用法	a 型：这，那	a 型：这

前節で説明したように、非制限的指示詞がこの用法に用いられる場合、一般に、近称の「这」が用いられ、遠称の「那」が容認されにくい。これを表 6.1 に示す制限的指示詞の使用と合わせて見ると、中国語では、指示詞が感嘆・間投表現に用いられる場合、近称指示詞のほうが一般的に用いられると考えられる。この点では、外部指示用法では近称指示詞（この）、照応・認識用法では遠称指示詞（あの）を用いる日本語とは異なる。

6.1.3. まとめ

以上 6.1.1 節、6.1.2 節ではそれぞれ日本語、中国語の指示詞が感嘆・間投表現に用いられる用法を考察してきた。このような用法においては、指示詞が話し手の感嘆・感情を表していると考えられるため、すべて情意的な性質を持つと言える。日本語においては、外部指示用法の場合は「この」、照応・認識用法の場合は「あの」が用いられ、「その」はこの用法を持たない。そして、感嘆・間投表現を構成する際、日本語の指示詞は限られた表現としか共起できず、「人」や「先生」など軽蔑的な意味を含まない名詞とは共起しにくい。対して、中国語の指示詞が感嘆・間投表現に用いられる場合、外部指示・照応・認識の 3 用法において、近称の「这」が一般的に用いられ、軽蔑表現のみならず、「人」のような普通名詞、もしくは固有名詞と共起することもできる。一方、遠称の「那」の使用は日本語の指示詞と類似し、罵り言葉など、軽蔑的な意味を含む表現としか共起できず、固有名詞や「人」のような普通名詞との共起が容認されにくい。

6.2. 「カテゴリー変換」について

指示詞には、もうひとつ特殊な用法が先行研究に指摘されている。坂原 (1996: 45) は、指示詞が名詞句と共起し、先行詞と同一指示をする際に、指示対象は「常識的意味では」、主要部の指示対象の種類に属さない場合があると指摘している。例えば、次の (6.14a) では、「ぬいぐるみ」と「友人」とは全く異なるカテゴリーに属すが、指示詞「この」を用いることにより、「熊のぬいぐるみ」と「この友人」が同一指示を行っていることが分かる。

- (6.14) a. 五歳の誕生日に真智子は両親に熊のぬいぐるみを買ってもらった。この友人を，真智子は一生大切にした。
 b. 五歳の誕生日に真智子は両親に熊のぬいぐるみを買ってもらった。??その友人を，真智子は一生大切にした。

(金水 1999: 80)

金水 (1999: 80-81) はこのような用法をカテゴリー転換と呼び，日本語においては，上記 (6.14b) に示すように，ソ系列の使用が難しいと指摘している。この用法は，第 3 章で述べた「この」の言い換え用法とは，先行詞を異なる言語形式により言い換えている点で類似しているが，言い換えの「この」は修飾する固有名詞が先行詞と同じカテゴリーに属す点では，カテゴリー転換の用法から区別される。

カテゴリー転換の用法は日本語のみならず，英語・フランス語にも見られる (坂原 1996 参照)。例えば，次の (6.15) は英語の例である。ここで，*this little street hustler* は前の *the regular Chevy sprint* と同一指示を行っているが，それぞれ人，車という異なるカテゴリーに属している。

- (6.15) New Chevy Sprint Turbo. A fast course in street smarts. The regular Chevy sprint is already a secret weapon in the car wars. So imagine what happens when *this little street hustler* gets fortified with a megadose of Vitamin T, turbocharger. There is a piranha loose in the goldfish bowl, that's what.

(坂原 1996: 45)

中国語にも同じ用法がある。例えば，上記 (6.14a) の日本語と似たような場面で，以下 (6.16) のような中国語が言える。

- (6.16) 小红 在 生日 这 天 得到 了
 紅ちゃん Loc 誕生日 Dem.P 日 もらう Pfv
 她 人生 中 第 一 个 生日-礼物——
 Pro.3.SG.F 人生 なか 第 一 Clf 誕生日-プレゼント
 一 只 很 可爱-的 维尼熊. 小红 非常
 一 Clf とても かわいい-Attr プーさん-熊 紅ちゃん とても
 喜欢 它, 不管 做 什么 都 一定
 すきだ Pro.3.SG.NH にかかわらず する なに すべて 必ず
 要 抱-着 这 个 好-朋友 一起
 したい 抱く -Dur Dem.P Clf よい-友達 一緒に

「紅ちゃんは誕生日の日に、人生初めての誕生日プレゼントをもらいました。とてもかわいいプーさんのぬいぐるみでした。紅ちゃんはとても気に入って、なにをするときもこの友達を抱いて、一緒にしなければなりませんでした」

(6.16) では、下線部の「这个好朋友 (このいい友達)」は前文の「维尼熊 (プーさんのぬいぐるみ)」, (人物以外の対象を指す) 3 人称「它 (tā)」と照応し、同一指示をしている。なお、中国語 (特に書き言葉) では、下線部の「好朋友 (いい友達)」を引用符で囲むことにより、一般的な場合とは異なる解釈をすることを明示する場合がある。実際に、中国語母語話者のインフォーマントにより、(6.16) の作例に対して、引用符を付けたほうがわかりやすいと指摘されている。

(6.16) における指示詞は典型的な a 型形式になっているが、b-同格型にもカテゴリー転換の用法が観察される。例えば、次の (6.17) において、「这个柠檬 (このレモン)」は直前の「摩尔定律 (ムーアの法則)」と照応し、同格構造をなしている。上記 (6.15-16) の場合と同様に、「レモン」と「法則」とは異なるカテゴリーに属すが、(6.17) では、b-同格型構造の使用により、「这个柠檬 (このレモン)」と「摩尔定律 (ムーアの法則)」が同一指示を行っていることが分かる。つまり、話し手はムーアの法則をレモンに喩え、ムーアの法則を利用してこれほどを成果出せるなんて、コンピューター科学界が驚いたと述べている。

(6.17) “[...], 能 从 摩尔定律 这 个 柠檬
 できる から ムーアの法則 Dem.P Clf レモン
 里 又 榨出 这么多 汁 来,
 なか また しぼる-出る Dem.P 多い 汁 DP
 计算机 科学界 都 很 吃惊……[...]”
 コンピューター 科学界 すべて とても 驚く

「ムーアの法則というレモンから、またこれほどの汁を搾り出せるなんて、コンピューター科学界が驚いたわ」

(刘慈欣 2015 《三体全集》)

7. 結論

本章では、第 3 章から第 5 章の内容を踏まえ、日中英における有標的指示詞の比較対照を行い、結論をまとめる。第 6 章で説明した、感嘆・間投表現に用いられる用法、および、カテゴリー転換の用法に関しては、本稿第 1 章で述べた分類の体系には収まりにくいいため、本章では比較しない。以下の 7.1 節では日中英 3 言語における有標的用法を比較し、それぞれの異同について整理する。7.2 節では本論の内容をまとめ、今後の展望について述べる。

7.1. 比較

以下の 7.1.1 節では、日中英 3 言語における有標的用法の分布を整理し、指示詞の非制限性と情意性の関連について分析する。7.1.2 節では、外部指示・照応・認識用法のそれぞれにおける日中英指示詞の有標的用法の異同について整理する。最後の 7.1.3 節は本節のまとめである。

7.1.1. 有標的指示詞の分布について

第 3 章から第 5 章の考察によると、日中英 3 言語における有標的用法の具体的な分布は次の表 7.1 のようにまとめられる。

表 7.1. 日中英 3 言語における有標的な指示詞

	非制限的・ 非情意的	制限的・ 情意的	非制限的・ 情意的
外部指示	日中		英
照応	日中英	日中	日中英
認識	日中		英

全体的な分布を見ると、日本語と中国語の有標的指示詞は全く同じ分布をしており、英語とは異なる使用傾向を示している。まず、表 7.1 に示されるように、日中英 3 言語の有標的指示詞に共通して非制限的用法が観察される。さらに言うと、日中英指示詞の共通点として、固有名詞や総称名詞句を非制限的に修飾することが可能である。しかし、代名詞との共起に関して、中国語・英語および日本語のあいだに違いが見られる。つまり、前者は一般的には直接人称代名詞を主要部に取り、非制限的に修飾することができないのに対して、日本語の指示詞は比較的自由に人称代名詞を修飾することができる。これは人称代名詞の性質の相違に起因していると考えられる。一般に、代名詞は限定詞等による文法的な修飾を受けられない (Li & Thompson 1981: 133-134, Bhat 2004: 54)。対して、日本語における人称代名詞は形容詞・限定詞などによる文法的な修飾を許容するが、これは日本語における人称代名詞が一般名詞に近い性質を持っていることの反映であるとみなすことができる (Sugamoto 1989)。

次に、指示詞の情意的用法も日中英 3 言語に共通して見られる。ただし、英語の有標的指示詞はほとんど情意的な性質を持つものに対して、日中指示詞の情意的用法はすべて照応用法に限られ、外部指示・認識用法には見られない。

さらに、(非) 制限性と情意性の関連性から見ると、英語の非制限的指示詞は特に情意性の特徴を伴う傾向が強い。上記表 7.1 から分かるように、英語指示詞の有標的用法のうち、非制限的・情意的用法が特に発達していると考えられる。対して、日中両言語の指示詞が非制限的に用いられる場合は必ずしも話し手の感嘆・評価につながる、情意的な解釈を受けるとは限らない。むしろ、非情意的な解釈を受けるのが一般的である。非制限的・情意的用法も、日中両言語の指示詞には観察されるが、会話的な照応用法に用いられる近称指示詞(この・这)にしか見られない点で、英語の場合とは異なる。なお、日本語の非制限的・非情意的指示詞は情報追加用法という特殊な機能を持つ。すなわち、談話参加者の共通知識から、修飾する名詞句に対して、指示対象が備えた特定の属性情報を活性化させ、付加的に与える機能である。この用法は中国語と英語の有標的指示詞には見られない。

一方、制限的に用いられる有標的指示詞、すなわち、制限的・情意的な指示詞に関して、日中両言語においては観察されるが、英語には見られない。日本語・中国語に共通した用法として、照応的な近称指示詞(この・这)は会話において、話し手の発話に感嘆的なニュアンスを付け加える、情意的な機能を持つ。なお、中国語にしか見られない、2 つの制限的・情意的用法がある。第 1 に、中国語では、遠称指示詞「那」は一般的には前方照応にしか用いられないが、後方照応に用いられる場合は制限的・情意的な性質を持っており、話し手の感嘆や感情を表す機能を果たす。第 2 に、中国語の指示詞には特有の b-同格型構造がある。すなわち、「NP₁+这・那 ((+数詞)+分類辞)+NP₂」という形式において、NP₁と後接の「这・那 ((+数詞)+分類辞)+NP₂」とが同格関係をなす場合である。b-同格型構造において、名詞句全体の指示対象が単数の人物に当たる際には、指示詞が必然的に話し手の感嘆・評価に結びつき、情意的であると見なすことができる。この b-同格型における指示詞はすべて照応的・制限的と見なされる。日中指示詞に観察される制限的・情意的用法は、非制限的・情意的用法と同様、すべて照応用法に限り、外部指示・認識用法には見られない。

7.1.2. 外部指示・照応・認識用法における日中英有標的指示詞の異同について

外部指示・照応・認識用法における有標的指示詞の分布(表 7.1 参照)を見ると、日中英 3 言語において、照応的な有標的指示詞は外部指示・認識的な場合と比べて、特に発達していると考えられる。具体的には、日中英の有標的指示詞は外部指示・認識の 2 用法においては、非制限的・非情意的もしくは非制限的・情意的のいずれかひとつにのみ分布しているが、照応用法では、非制限的・非情意的、制限的・情意的、非制限的・情意的の 3 用法のうち、2 つ(以上)の用法が観察される。具体的には、日本語と中国語の場合においては、外部指示・認識用法に用いられる有標的指示詞は非制限的・非情意的、英語の場合に

においては非制限的・情意的な場合にしか見られない。一方、照応的な有標的指示詞に関して、英語は非制限的・非情意的および非制限的・情意的の 2 種類、日本語と中国語の場合は非制限的・非情意的、制限的・情意的、非制限的・情意的の 3 種類に分布している。以下の 7.1.2.1 節では、外部指示用法および認識用法、7.1.2.2 節では、照応用法における日中英の有標的指示詞の異同を整理する。

7.1.2.1. 外部指示・認識用法の場合

外部指示・認識の 2 用法においては、日中英 3 言語に共通した用法は見られない。表 7.1 に示されるように、この 2 用法においては、日本語と中国語の有標的指示詞は同様に非制限的・非情意的用法に限られる一方、英語の有標的指示詞は非制限的・情意的な場合にしか用いられない。以下では、日中両言語の、外部指示用法と認識用法のそれぞれにおける非制限的・非情意的指示詞の機能を比較する。

まず、外部指示用法において、日本語・中国語の非制限的指示詞は、修飾する名詞句に対して、指示対象に関する現場情報を付加する機能を持つ点で、類似している。ただし、中国語では、話し手と指示対象との距離により、近称 (这) と遠称 (那) のいずれも自然に用いられることがあるが、日本語では、近称の「この」は問題なく容認される一方、非近称指示詞 (その・あの) の容認性に関しては揺れが見られ、容認度が比較的低いと言える。なお、外部指示用法において、日本語では、「この私」のように、「この」が 1 人称と共起する特殊な用法もあり、情報追加と対比を表す機能を持つ。中国語では、このような用法は見られない。

次に、認識用法において、日本語と中国語の遠称指示詞 (あの・那) は共に談話参加者の共通知識に存在する対象を活性化させる機能を持つ。ただし、ただ単に指示対象の情報が談話参加者の共通知識の一部であることをマークする中国語の非制限的指示詞とは違い、日本語の場合、非制限的指示詞は談話参加者の共通知識から、指示対象に関する特定の属性情報を喚起させ、名詞句に付与する、情報追加用法の機能を持つ。この情報追加用法は照応用法にも見られる。

7.1.2.2. 照応用法の場合

表 7.1 に示されるように、本稿における有標的指示詞の 9 分類において、日中英指示詞に共通して見られる用法は、照応的・非制限的・非情意的、および、照応的・非制限的・情意的という 2 つの用法である。前者に関して、先行発話に導入された固有名詞に対し、聞き手は指示対象を同定できるが、話し手は同定できないまたはしにくいと話し手が想定する場合、日中英の照応的指示詞を非制限的に用いることにより、共起する名詞句と先行文脈との関連性をマークし、聞き手の理解を容易にする機能を果たす。次の (7.1) では日本語、(7.2) では中国語、(7.3) では英語の用例である。

- (7.1) 電話のベルが鳴っていた。[...]「起きた？」理恵からだった。[...]「昨夜遅かったの？」「ああ」「何度も電話をしたわ」「編集部に行って、新庄の遺した取材メモや資料を調べていた」「何か分かって？」「—どうやら、手がかりらしいものを見付けた」深作から聞いた片桐道男の話を理恵に伝えた。「その片桐さんに、あの人 [=新庄] は会ったのかしら？」「深作によれば、新庄はどこかで片桐に接触したらしい」「事件の鍵を握る人というわけね？」

(BCCWJ, 森詠 1986『北のレクイエム』; (3.41) 再掲)

- (7.2) (B は派遣社員であり、A の会社に派遣された。B は会社に入ったばかりで、関連手続きに問題が生じたため、先輩の A に相談に乗ってもらう。)

A: 这 (个) 事儿 你 得 去 找
Dem.P Clf こと Pro.2.SG しなければならない 行く さがす
人事 的 王-部長, 他 是 负责人
人事 の 王-部長 Pro.3.SG.Masc Cop 責任者

「このことに関しては、人事の王部長に聞かないと、彼が担当者だから」

(B は王部長のことを全く知らず、A に聞く)

B: {这/那} 位 王-部長 怎么 联系 啊?
{Dem.P/Dem.D} Clf.Hon 王-部長 どう 連絡する DP

「{この/その} 王部長にはどう連絡すればいいですか？」

((4.64) 再掲)

- (7.3) George: [...], Mr. and Mrs. Hayes. [...] I'm gonna bring Dr. Shepherd to see you,
[...] He's the brain specialist.

Mrs. Hayes: Doctor? Is he good, this Dr. Shepherd?

(*Grey's Anatomy: Season 1 Episode 7: The Self-Destruct Button* ; (1.30) 再掲)

(7.1-3) に示すように、会話において、日本語では「その」、中国語では「这」と「那」、英語では近称の **this** が用いられる。上記以外の場面では、英語の有標的指示詞の使用はすべて情意性につながる点で、日本語と中国語ほど自由に用いられることができない。このような違いは、3 言語における個体指示のストラテジーの違いを反映し、特に冠詞の有無および 3 人称代名詞の用法の相違に関連していると考えられる。周知の通り、英語は定冠詞・不定冠詞の体系を持つのに対して、日本語と中国語は冠詞という文法的カテゴリーを持たない。この違いは指示詞の使用に影響している可能性がある。例えば、第 5 章で説明したように、英語では、総称を表すのに、複数の名詞句以外、不定冠詞や冠詞を伴う単数の名詞句も用いられる。よって、さらに指示詞を付け加える場合は何らかの特別な意味 (情意的な意味) を表すためであると考えられる。対して、中国語では単数・複数の屈折変化もなく、冠詞も持たないため、裸の名詞句や「一个 (ひとつの)+NP」の形式を用いるか、非制限的指示詞を用いることになる (第 4 章参照)。中国語の「一个」は不定を表す点で、

英語の不定冠詞と近い働きを果たす (刘丹青 2002: 418-419) 一方、総称表現に用いられる非制限的指示詞は英語の定冠詞と類似していると考えられる。方梅 (2002: 348-349) では、このような指示詞の非制限的な使用を定冠詞へ文法化するひとつの兆しと見なされている。日本語も単数・複数の屈折変化や冠詞を持たない点で中国語と似ている。次に、3 人称代名詞の使用に関して、一般に、既に先行文脈に導入された固有名詞と同一指示を行う際には、英語では 3 人称代名詞が好まれ、固有名詞の繰り返しが避けられる傾向がある (Halliday & Hasan 1976: 281)。それに対し、日本語と中国語では、3 人称代名詞が発達しておらず (中国語の場合、特に人物以外を指し示す 3 人称代名詞の使用は一般的ではない (Li & Thompson 1981: 134))、ゼロ代名詞か固有名詞を繰り返す手段が多く用いられる (Hinds 1978: 145-147, 神崎 1994: 31, Li & Thompson 1979: 322, 潘国文 1997: 350)。よって、繰り返された固有名詞に照応性を付与するためのストラテジーとして、照応的指示詞による非制限的修飾が許容されていると見なすことができる。なお、日中両言語の有標的指示詞の相違点に関して、7.1.1 節で言及したように、日本語では特有の情報追加用法が見られる。

また、照応的・非制限的・情意的用法も日中英指示詞に共通して観察される。ただし、日本語と中国語の非制限的・情意的用法は、会話的な場面における照応的な近称指示詞 (この・这) にしか見られない。対して、英語の非制限的・情意的用法においては、近称 (this)・遠称 (that) のいずれも容認される。

最後に、制限的・情意的な場合については、7.1.1 節で言及したように、日本語と中国語の近称指示詞が共に制限的・情意的に用いられ、発話に情意的な意味を付け加える機能を持つ一方、英語にはこの用法が見られない。また、中国語にしか見られない用法として、後方照応に用いられる遠称指示詞「那」、および、単数の人物を指し示す b-同格型形式における指示詞も制限的・情意的な性質を持つ。

7.1.3. まとめ

以上で見てきたように、日本語と中国語の有標的指示詞は英語の場合より比較的自由に用いられ、後者は主に情意的に用いられる傾向がある。また、日中英の 3 言語において、外部指示・照応・認識用法のうち、照応的な有標的用法が特に発達していると考えられる。日中英に共有された 2 つの有標的用法も照応用法に観察される。ひとつは、聞き手は指示対象を同定できるが、話し手は同定できないまたは同定しにくいと話し手が想定する場合、照応的指示詞を非制限的・非情意的に用いることにより、共起する名詞句と先行文脈と関連づけさせる用法である。もうひとつは、非制限的・情意的用法である。なお、日本語と中国語の指示詞にはそれぞれ特有の有標的用法が見られる。日本語の場合、非制限的指示詞が談話参加者の共通知識から、修飾する名詞句に対して、指示対象が備えた特定の属性情報を喚起させ、付与する、情報追加用法を持つ。この用法は外部指示・照応・認識用法に分布している。中国語の場合、特有の b-同格型構造が観察され、単数の人物を指示する

場合に限り，指示詞が有標的と見なされ，照応的・制限的・情意的用法に当てはまる．なお，中国語の遠称指示詞が後方照応に用いられる場合も制限的・情意的な解釈を受けると考えられる．

7.2. 本論のまとめおよび今後の展望

本研究では，① 外部指示的・照応的・認識的，② 情意的・非情意的，③ 制限的・非制限的という 3 次元のタクソノミーによって，日中英指示詞の用法を分類し，外部指示・照応・認識用法のそれぞれにおける有標的指示詞の機能を考察し，比較対照を行った．考察の結果，日中英 3 言語における有標的な指示詞の用法は次の表 7.2 のように整理することができる．

表 7.2. 日中英 3 言語における有標的な指示詞

	非制限的・ 非情意的	制限的・ 情意的	非制限的・ 情意的
外部指示	日中		英
照応	日中英	日中	中英
認識	日中		英

(表 7.1 再掲)

第 1 に，外部指示用法の場合，日中両言語の指示詞は共に非制限的・非情意的の用法を持ち，固有名詞や総称名詞を修飾する際に，共起する名詞句に対して，指示対象に関する現場情報を付加することにより，冗長的な言語的説明を回避する機能を持つ．対して，英語の外部指示的指示詞が非制限的修飾を行う際には，情意的な解釈を受ける場合にしか用いられない．

第 2 に，照応用法においては，英語の有標的指示詞は非制限的・非情的および非制限的・情意的，日本語・中国語の場合は非制限的・非情意，制限的・情意的，非制限的・情意的の 3 つに分布している．そのうち，非制限的・非情意的の用法および非制限的・情意的の用法は日中英 3 言語に共通して観察される．前者に関して，指示詞が非制限的・非情意的に用いられ，共起する名詞句と先行文脈との関連性をマークすることにより，聞き手の理解を容易にする機能を持つ．後者に関して，英語の近称・遠称のいずれも非制限的・情意的に用いられるのに対して，日本語と中国語の場合は会話的な場面における照応的な近称指示詞しか，非制限的・情意的に用いられない．また，日本語と中国語の指示詞は共に制限的・情意的に用いられるが，両者の共通点として，会話における照応的な近称指示詞が感嘆的なニュアンスを伝える機能を持つ．一方，制限的・情意的な場合において，中国語には 2 つ特有の有標的用法が見られる．ひとつは後方照応に用いられる遠称指示詞が話し手の感情・感嘆などを表す用法である．もうひとつの用法に関しては，中国語の指示詞には，日本語と英語には見られない b-同格型構造を持っており，指示対象が単数の人物に当たる場

合に限り，指示詞が制限的・情意的な性質を持つと考えられる。

第 3 に，認識用法の場合，日本語と中国語は同様に，遠称指示詞が非制限的・非情意的に用いられるのに対して，英語の認識的指示詞の有標的用法は外部指示用法の場合と同様に，非制限的・情意的用法に限られ，近称・遠称指示詞の両方が用いられる。

最後に，日本語指示詞の有標的用法においては，中国語・英語の指示詞には見られない，情報追加用法が観察される。すなわち，(1 人称と共起する)「この」と「あの」には，談話参加者の共通知識から，修飾する名詞句に対して，指示対象が備えた特定の属性情報を喚起させ，付与する機能がある。この用法は外部指示・照応・認識の 3 用法に観察される。

しかし，本稿における無標・有標的用法の分類の体系は日中英の 3 言語に限らず，他の言語における指示詞の用法にも適用できると考えられるが，すべての言語が上記表 7.2 に示すような有標的用法を持つとは限らない。例えば，日中英指示詞に見られる非制限的な使用は，韓国語では，極めて限られているように思われる。金 (2006: 108) であげられた (7.4) の例では，遠称指示詞 *ce* (あの) が非制限的に用いられているが，韓国語母語話者のインフォーマントによると，(7.5) に示すように，指示詞と固有名詞のあいだに修飾語が介在しない場合，指示詞の非制限的な修飾は一般的には容認されないという。

(7.4) *ce yumyengha-n alleyksante taywangto ile-n sachi-nun*
あの 有名だ-連体 アレキサンダー 大王も こんな 贅沢-は
kyenghem-hay poci mosha-yess-ul kes-ita.
経験-して みて ない-過去-未来連体 もの-である
「あの有名なアレキサンダー大王すら、これほどの贅沢は経験したことがないであらう。」

(金 2006: 108)

(7.5) {**i/*ku/*ce*} I-sensayng-nim un hullyungha-n pun i-ney.
{Dem.P/Dem.M/Dem.D} 李-先生-Hon Top 優秀-Attr 方 Cop-DP
「{この/その/あの} 李先生は優秀な方だよね」

(孟・大島 2018: 120)

なお，日中英 3 言語における有標的指示詞の用法のうち，表 7.2 の分類には収めにくいものが存在する。第 6 章では，その例として，日中指示詞が感嘆・間投表現に用いられる用法，および，先行研究で指摘された「カテゴリー転換」の用法を取り上げ，説明した。前者は日中指示詞には見られるが，英語の指示詞には見られない用法，後者は日中英指示詞に共通して観察される用法である。したがって，今後の課題として，より多くの言語データを考慮に入れ，指示詞のさまざまな周辺の用法を収集・分析することにより，「有標的指示詞の類型論」を確立することが期待される。

謝辞

本論文は筆者が名古屋大学国際開発研究科国際コミュニケーション専攻博士後期課程に在籍中の研究成果をまとめたものである。本論の作成に当たり、多くの方々からご指導・ご支援をいただいた。ここに深謝の意を表する。

まず、直接ご指導をいただいた指導教官、大島義和先生に心よりお礼申し上げます。研究生の時期から、大島先生には、研究の方向性から論文形式や日本語表現など細かいところに至るまで、長年のご指導をいただいた。ここに深謝の意を表する。

また、副指導教官として、大名力先生、加藤高志先生には、本研究の遂行に当たり、有益なご助言・ご指導をいただいた。ここに深謝申し上げます。そして、木下徹先生には、審査過程において、親切なご指摘・ご指導をいただいた。ここに深謝の意を表する。

同専攻の先輩方、山内昇さん、佐藤翔馬さん、新實葉子さん、郭世豪さんには、ゼミや研究会などの場において有益なご討論、ご助言をいただいた。特に、山内さん、新實さんには、本論文の要旨および本文の日本語を校閲していただいた。ここに感謝の意を表する。

略語

1	first person
2	second person
3	third person
Acc	accusative
Ag	agentive
Attr	attributive
Clf	classifier
Conc	concessive
Conj	conjunction
Cop	copula
D	distal
Dat	dative
Dem	demonstrative
DP	discourse particle
Dur	durative
Exp	experiential
F	feminine
Hon	honorific
Loc	locative
M	medial
Man	manner
Masc	masculine
Neg	negative
NH	non-human
Nomz	nominalizer
P	proximal
Pass	passive
Pfv	perfective
PL	plural
Pro	pronoun
Prog	progressive
Quant	quantifier
SG	singular
Top	topic
Voc	vocative

参照文献

英語文献

- Acton, Eric K. & Potts, Christopher. 2014. That straight talk: Sarah Palin and the sociolinguistics of demonstratives. *Journal of Sociolinguistics*, 18(1): 3-31
- Bhat, Darbhe Narayana Shankara. 2004. *Pronouns*. Oxford: Oxford University Press.
- Bowdle, Brian F. & Ward, Gregory. 1995. Generic demonstratives. Jocelyn Ahlers, Leela Bilmes, Joshua S. Guenter, Barbara A. Kaiser and Ju Namkung (eds.) *Proceedings of the Twenty-First Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society, February 17-20, 1995: General Session and Parasession on Historical Issues in Sociolinguistics/Social Issues in Historical Linguistics*. Berkeley: Berkeley Linguistics Society. pp.32-43.
- Büring, Daniel. 2003. On D-Trees, Beans, and B-Accents. *Linguistics & Philosophy*, 26 (5): 511-545.
- Davis, Christopher & Potts, Christopher. 2010. Affective demonstratives and the division of pragmatic labor. Maria Aloni, Harald Bastiaanse, Tiki de Jager and Katrin Schulz (eds.) *Logic, Language and Meaning: 17th Amsterdam Colloquium Revised Selected Papers*. Berlin: Springer. pp.32-41.
- Diessel, Holger. 1999. *Demonstratives: Form, Function, and Grammaticalization*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Diessel, Holger. 2006. Demonstratives, joint attention, and the emergence of grammar. *Cognitive Linguistics*, 17: 463-489.
- Dixon, R. M. W. 2003. Demonstratives: A cross-linguistic typology. *Studies in Language*, 27: 61-112.
- Evans, Gareth. 1977. Pronouns, Quantifiers, and Relative Clauses (I), *Canadian Journal of Philosophy*, 7(3): 467-536.
- Fan, Cunying. 2013. Anaphoric Demonstratives and Their Antecedents in English Academic Discourse. *International Journal of English Linguistics*, 3(6): 73-83.
- Fillmore, Charles. J. 1997. *Lectures on Deixis*. Stanford: CSLI Publications.
- Givón, Talmy. 2001. *Syntax: An Introduction, Volume II*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Grice, H. P. 1975. Logic and Conversation. Peter Cole and Jerry L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech Arts*. New York: Academic Press. pp.41-58.
- Halliday, M. A. K. & Hasan, Ruqaiya. 1976. *Cohesion in English*. London : Longman Group Limited.
- Higginbotham, James. 1980. Pronouns and Bound Variables. *Linguistic Inquiry*, 11(4): 679-708.
- Himmelman, Nikolaus P. 1996. Demonstratives in Narrative Discourse: A taxonomy of universal uses. Barbara Fox (ed.) *Studies in Anaphora (Typological Studies in Language*

- Volume 33*). Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp.205–254.
- Hinds, John. 1978. Anaphora in Japanese conversation. John Hinds (ed.) *Anaphora in Discourse*. Alberta: Linguistic Research Inc. pp.136-179.
- Hoji, Hajime, Kinsui, Satoshi, Takubo, Yukinori & Ueyama, Ayumi. 2000. Demonstratives, bound variables, and reconstruction effects. *The Proceedings of Glow in Asia 2nd Conference at Nanzan Univerisity, Nagoya*. pp.141-158.
- Hoji, Hajime, Kinsui, Satoshi, Takubo, Yukinori & Ueyama, Ayumi,. 2003. The Demonstratives in Modern Japanese. Yen-hui Audrey Li and Andrew Simpson (eds.) *Functional Structure(s), Form, and Interaction: Perspective from East Asian Languages*. London and New York : Routledge Curzon. pp.97-128
- Huang, Yan. 2014. *Pragmatics (second edition)*. New York: Oxford University Press.
- Huddleston, Rodney. 1984. *Introduction to the Grammar of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Imai, Shingo. 2018. Japanese spatial deixis in crosslinguistic perspective. Prashant Pardeshi and Taro Kageyama (eds.) *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics (Handbooks of Japanese Language and Linguistics Volume 6)*. Boston/Berlin: De Gruyter Mouton. pp.507-532.
- Kiss, Katalin É. 1998. Identificational focus versus information focus. *Language*, 74(2): 245-273.
- Krifka, Manfred. 1998. Additive particles under stress. Devon Strolovitch and Aaron Lawson (eds) *Proceedings of Semantics and Linguistic Theory 8*. NewYork: Cornell University. pp.111-129.
- Lakoff, Robin. 1974. Remarks on ‘this’ and ‘that’. Michael W. La Galy, Robert A. Fox and Anthony Bruck (eds.) *Papers from the Tenth Regional Meeting, Chicago Linguistics Society, April 19-21, 1974*. Chicago: Chicago Linguistics Society. pp.345–356.
- Lambrecht, Knud. 1996. *Information Structure and Sentence Form: Topic, Focus, and the Mental Representations of Discourse Referents (Cambridge Studies in Linguistics 71)*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lee, Chungmin. 1999. Contrastive Topic: A Locus of the interface: Evidence from Korean and English. Ken Turner (ed.) *The Semantics/Pragmatics Interface from Different Points of View (Current Research in the Semantics/Pragmatics Interface: Volume 1)*. Oxford: Elsevier Science Ltd. pp. 317-342.
- Levinson, Stephen. C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Levinson, Stephen. C. 2000. *Presumptive meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*. Cambridge: MIT press.
- Li, Charles N. & Thompson, Sandra A. 1979. Third-person pronouns and zero-anaphora in

- Chinese discourse. Talmy Givón (ed.) *Syntax and Semantics Volume 12: Discourse and Syntax*. New York: Academic Press. pp.311-336.
- Li, Charles N. & Thompson, Sandra A. 1981. *Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Lyons, John. 1995. *Linguistic Semantics: An Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Martin, Fabienne. 2014. Restrictive vs. nonrestrictive modification and evaluative predicates. *Lingua*, 149: 34-54.
- McCarthy, Michael. 2004. It, this and that. Malcolm Coulthard (ed.). *Advances in Written Text Analysis*. Taylor & Francis e-Library. pp.265-275.
- Meng, Ying & Oshima, David Y. 2020. On the marked usage of demonstratives: Toward the typology. *Japanese/Korean Linguistics 27*, forthcoming. Stanford: CSLI Publications.
- Meyer, Charles. F. 1992. *Apposition in Contemporary English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Naruoka, Keiko. 2006. The interactional functions of the Japanese demonstratives in conversation. *Pragmatics*, 16(4): 475-512.
- Nishimura, Chiharu. 1996. Demonstratives in Academic Written English Discourse. Master's thesis, University of California, Los Angeles.
- Oshima, David Y. & McCreedy, Eric. 2017. Anaphoric demonstratives and mutual knowledge: The cases of Japanese and English. *Natural Language & Linguistic Theory*, 35(3): 801–837.
- Passonneau, Rebecca J. 1989. Getting at discourse referents. *Proceedings of the 27th Annual Meeting on Association for Computational Linguistics*. Pennsylvania: Association for Computational Linguistics . pp.51-59.
- Potts, Christopher & Schwarz, Florian. 2010. Affective 'this'. *Linguistic Issues in Language Technology*, 3(5): 1-30.
- Quirk, Randolph, Greenbaum, Sidney, Leech, Geoffrey N & Svartvik, Jan. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Sawada, Osamu & Sawada, Jun. 2014. The meaning of modal affective demonstratives in Japanese. Seungho Nam, Heejeong Ko and Jongho Jun (eds.) *Japanese/Korean Linguistics 21*. Stanford: CSLI Publications. pp.181-196.
- Sawada, Osamu & Sawada, Jun. 2017. On the property of mirativity in the Japanese modal demonstrative *ano*. Kenshi Funakoshi, Shigeto Kawahara and Christopher D. Trancredi (eds.) *Japanese/Korean Linguistics 24*. Stanford: CSLI Publications. pp.141-155.
- Strauss, Susan. 2002. *This, that, and it* in spoken American English: a demonstrative system of gradient focus. *Language Sciences*, 24(2): 131-152.

- Sugamoto, Nobuko. 1989. Pronominality: A noun-pronoun continuum. Roberta Corrigan, Fred Eckman, and Michael Noonan (eds.) *Linguistic Categorization: Proceedings of an International Symposium in Milwaukee, Wisconsin, April 10–11, 1987*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp.267–291.
- Umbach, Carla. 2001. Contrast and contrastive topic. Ivana Kruijf-Korbayová and Mark Steedman (eds.) *Proceedings of the ESSLLI 2001 Workshop on Information Structure, Discourse Structure and Discourse Semantics*. Helsinki: University of Helsinki. pp.175–188.
- Umbach, Carla. 2004. On the Notion of Contrast in Information Structure and Discourse Structure. *Journal of Semantics*, 21(2): 155–175.
- Vallduví, Enric & Vilkuna, Maria. 1998. On rheme and kontrast. Peter W. Culicover and Louise McNally (eds.) *Syntax and Semantics 29: The Limits of Syntax*. San Diego: Academic Press. pp.79-108.
- Wolter, Lynsey Kay. 2006. That's That: The Semantics and Pragmatics of Demonstrative Noun Phrases. PhD dissertation, University of California, Santa Cruz.
- Wu, Yi'an. 2004. *Spatial Demonstratives in English and Chinese: Text and Cognition*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Yoshida, Etsuko. 2011. *Referring Expressions in English and Japanese: Patterns of use in dialogue processing*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

日本語文献

- 安藤貞雄. 1986. 『英語の論理・日本語の論理—対照言語学的研究—』東京：大修館書店.
- 千葉修司・村杉恵子. 1987. 「指示詞についての日英語の比較」. 『津田塾大学紀要』 19: 111-153.
- 高菟. 2004. 「現代中国語“这”“那”の指示内容に関する考察—心理的な遠近概念との関与—」. 『多元文化』(名古屋大学大学院国際言語文化研究科) 4: 1-13.
- 服部四郎. 1968. 『英語基礎語彙の研究』(ELEC叢書). 東京：三省堂.
- 春木仁孝. 1991. 「指示対象の性格からみた日本語の指示詞—アノを中心に—」. 『言語文化研究』 17, 93-113.
- 平田未季. 2015. 「注意概念と推意理論を用いた日本語指示詞の統一的分析」. 北海道大学国際広報メディア研究科. 博士論文.
- 本多正敏. 2010. 「統語構造地図に基づく関係代名詞節の分析—試案—」. 『言語科学研究：神田外語大学大学院紀要』 16, 75-104.
- 胡俊. 2005. 「日本語と中国語の指示詞についての対照研究—現場指示の場合—」. 『地域政策科学研究』 2, 29-52.
- 胡俊. 2006. 「日本語と中国語の指示詞についての対照研究—文脈指示用法の場合—」.

- 『地域政策科学研究』3, 1-24.
- 井上逸兵. 1988. 「言語の非恣意的特性としてのダイクシスについて」. 『芸文研究』53, 25-45.
- 庵功雄. 1994. 「結束性の観点から見た文脈指示—文脈指示に対する一つの接近法—」. 『大阪大学日本学報』13, 31-43.
- 庵功雄. 1995a. 「テキスト的意味の付与について—文脈指示における『この』と『その』の使い分けを中心に—」. 『大阪大学日本学報』14, 79-93.
- 庵功雄. 1995b. 「語彙的意味に基づく結束性について—名詞の項構造との関連から—」. 『現代日本語研究』2, 85-102.
- 庵功雄. 1996. 「指示と代用—文脈指示における指示表現の機能の違い—」. 『現代日本研究』3, 73-91.
- 庵功雄. 2002. 「『この』と『その』の文脈指示的用法再考」. 『一橋大学留学生センター紀要』5, 5-16.
- 金井勇人. 2017. 「現場指示におけるソ系の指示語について—聞き手用法と中距離用法と—」. 河正一・島田雅晴・金井勇人・仁科弘之 (編) 『言語をめぐる x 章—言語を考える、言語を教える、言語で考える—仁科弘之教授退職記念論文集—』(埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書別冊2). 埼玉大学教養学部・人文社会科学研究所. pp.116-127.
- 神崎高明. 1994. 『日英語代名詞の研究』. 東京：研究社出版.
- 加藤重広 (著), 町田健 (編). 2004. 『シリーズ・日本語のしくみを探る 6 日本語語用論のしくみ』. 東京：研究社.
- 木村英樹. 1997. 「中国語指示詞の『遠近』対立について—『コソア』との対照を兼ねて」. 大河内康憲 (編) 『日本語と中国語の対照研究論文集』. 東京：くろしお出版. pp.181-211.
- 木村英樹. 2012. 『中国語文法の意味とカタチ—「虚」的意味の形態化と構造化に関する研究—』. 東京：白帝社.
- 金善美. 2006. 『韓国語と日本語の指示詞の直示用法と非直示用法』. 東京：風間書房.
- 金水敏・田窪行則. 1992. 「談話管理理論からみた日本語の指示詞」. 金水敏・田窪行則 (編) 『指示詞』. 東京：ひつじ書房. pp.123-149.
- 金水敏. 1999. 「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」. 『自然言語処理』6(4), 67-91.
- 小泉保. 1988. 「空間と時間における直示の体系」. 日本言語学会 (編) 『言語研究』94, 1-24.
- 久野暉. 1973. 『日本文法研究』. 東京：大修館書店.
- 黒田成幸. 1992. 「(コ)・ソ・アについて」. 金水敏・田窪行則 (編) 『指示詞』. 東京：ひつじ書房. pp.91-104.

- 劉羈. 2012. 「中国語の物語における文脈指示詞「这」と「那」について」. 『日本語用論学会第14回大会発表論文集 第7号』. pp.129-136.
- 劉羈. 2013. 「中国語の指示詞による総称表現について—英語との比較を兼ねて—」. 『日本語用論学会第15回大会発表論文集 第8号』. pp.177-184.
- 孟鷹・大島デイヴィッド義和. 2018. 「指示詞の有標的な用法—類型論の確立を目指して—」. 『日本言語学会第 157 回大会予稿集』. pp.118-123.
- 奥田寛. 1995. 「中国語の任意性指示詞"這"について—語用論的アプローチ—」. 『姫路獨協大学外国語学部紀要』 8, 204-216.
- 小野絵理. 2016. 「現代中国語指示詞“这”と“那”の前方指示における選択基準」. 大阪大学言語文化研究科. 博士論文.
- 大島デイヴィッド義和. 2014. 「日本語指示詞の内部照応用法 (文脈指示用法) について—久野暉による分析の再検討—」. 『国際開発研究フォーラム』 44, 1-16.
- 坂原茂. 1996. 「英語と日本語への名詞句限定表現の対応関係」. 日本認知科学会 (編)『認知科学』 3(3), 38-58.
- 阪田雪子. 1992. 「指示語『コ・ソ・ア』の機能について」. 金水敏・田窪行則 (編)『指示詞』. 東京: ひつじ書房. pp.54-68.
- 佐久間鼎. 1992. 「指示の場と指す語—『人代名詞』と『こそあど』—」. 金水敏・田窪行則 (編)『指示詞』. 東京: ひつじ書房. pp.32-34.
- 讃井唯允. 1988. 「中国語指示代名詞の語用論的再検討」. 『人文学報』(東京都立大学) 198, 1-19.
- 単娜. 2005. 「日本語の指示詞に関する研究概観—対照研究を中心に—」. 『言語文化と日本語教育』, 増刊特集号『第二言語習得・教育の研究最前線』, 69-100.
- 史隼. 2012. 「日中指示詞の対照研究」. 一橋大学大学院言語社会研究科. 博士論文.
- 堤良一. 2003. 「日本語の指示詞の研究」. 大阪外国語大学. 博士論文.
- 堤良一. 2012. 『現代日本語指示詞の総合的研究』. 東京: ココ出版.
- 上山あゆみ. 2000. 「日本語から見える『文法』の姿」. 『日本語学』 4月臨時増刊号 (vol.19), 169-181. 明治書院.

中国語文献

- 丁启阵. 2003. 现代汉语“这”、“那”的语法分布. 《世界汉语教学》, 2, 27-38.
- 方梅. 2002. 指示词“这”和“那”在北京话中的语法化. 《中国语文》, 2002(4), 343-383.
- 甘时源. 2017. 认知视角下的汉英语篇指示语研究. 吉林大学, 博士论文.
- 黄河. 1992. 关于同位结构. 《汉语学习》, 1992(1), 7-13.
- 黎錦熙 (編). 1957. 《新著國語文法》. 上海: 商務印書館.
- 劉羈. 2014. “那”的非典型语用功能. 『中国語学』 261, 84-102.

- 李宇明. 2000. 量词与数词、名词的扭结. 《语言教学与研究》, 2000(3), 50-58.
- 刘丹青. 2002. 汉语类指成分的语义属性和句法属性. 《中国语文》, 2002(5), 411-479.
- 刘街生. 2000. 现代汉语同位组构研究——汉语作为语用敏感型语言的一个实例分析. 华中师范大学, 博士论文.
- 吕叔湘. 1985. 《近代汉语指代词》. 上海: 学林出版社.
- 吕叔湘·朱德熙. 1979. 《语法修辞讲话》. 北京: 中国青年出版社.
- 吕叔湘. 2002. 《吕叔湘全集 第1卷 中国文法要略》. 辽宁: 辽宁教育出版社.
- 潘国文. 1997. 《汉英语对比纲要》. 北京: 北京语言文化大学出版社.
- 沈家煊. 1999. 《不对称和标记论》. 南昌: 江西教育出版社.
- 王灿龙. 2006. 试论“这”“那”指称事件的照应功能. 《语言研究》, 26(2), 59-62.
- 王汉卫. 2004. 量词的分类与对外汉语量词教学. 《暨南学报 (人文科学与社会科学版)》, 26(2), 113-142.
- 王力. 1985. 《中国现代语法》(《王力文集·第二卷》) 济南: 山东教育出版社.
- 肖薇·郭晓华. 2005. 英汉指示语用法差异. 《广西社会科学》, 2005 (5), 155-157.
- 徐丹. 1988. 浅谈这那的不对称性. 《中国语文》, 1988 (2), 128-130.
- 杨玉玲. 2011. 可及性理论及“这”、“那”篇章不对称研究. 《河南社会科学》, 19(2), 201-204.
- 叶南薰 (著), 张中行 (修订). 1985. 《汉语知识讲话——复指和插说》. 上海: 上海教育出版社.
- 张伯江·方梅. 1996. 《汉语功能语法研究》, 南昌: 江西教育出版社.
- 中央民族学院语文系汉语文教研组 (编). 1975. 《现代汉语量词手册》. 中央民族学院语文系汉语文教研组.

用例出典

コーパス

英語コーパス

Davies, Mark. (2008-). *The Corpus of Contemporary American English (COCA)*. Available online at <https://corpus.byu.edu/coca/> (ver. December 2017).

日本語コーパス

国立国語研究所. (2011-). 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) (通常版 ver. 1.1).

中国語コーパス

詹卫东·郭锐·谌贻荣. (2003). 《CCL语料库》(网络版) 北京大学中国语言学研究中心.
http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus

ドラマ・脚本

英語ドラマ

Grey's Anatomy, season 1 episode 7: The Self-Destruct Button. ABC. May 8, 2005.

日本語ドラマ・脚本

『ホタルノヒカリ』(DVD). 2008. 日本テレビ. 2007年7月-9月放送. バップ.

『古畑任三郎 2nd Season』(DVD). 2004. フジテレビ. 1996年1月-3月放送. ポニーキャニオン.

日本脚本家連盟 (編). 2011. 『テレビドラマ代表作選集 (2011年版)』. 東京: 日本脚本家連盟.

中国語ドラマ

《伪装者》. 2015. 湖南卫视. 2015年8-9月播出.

書籍

日本語書籍

銭鍾書 (著), 荒井健・中島長文・中島もどり (訳). 1988. 『結婚狂詩曲 (上)』. 東京: 岩波書店.

内田康夫. 2014. 『三州吉良殺人事件』. 東京: 角川文庫.

中国語書籍

房兵. 2011. 《大国航母 (第1部)》. 北京: 中国长安出版社.

刘慈欣 2015 《三体全集》 重庆: 重庆出版社.

钱钟书. 2017. 《围城》 北京: 人民文学出版社.

思不群. 2011. 《二战全史》 北京: 中国华侨出版社.

张勇. 2015. 《伪装者》 北京: 化学工业出版社.